

---

# プリキュアオールスターズ×スーパー戦隊!!

ターザン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリキュアオールスターズ×スーパー戦隊！！

### 【Nコード】

N7857M

### 【作者名】

ターザン

### 【あらすじ】

バイオルサターンとの戦いから数ヶ月・・・再び最大の戦いが始まるうとしていた。

## 第1話 再び（前書き）

要望があつたので書いてみました。

前作の続編です、前作の特別編も投稿してるのでそれよろしくお  
願いします。

## 第1話 再び

仮面ライダーとウルトラマンとの共同戦線から数ヶ月・・・プリキユアオールスターズはある遊園地に来ていた。

なぎさ「ねえねえ！！あの観覧車乗ろうよ！！」

舞「5人ずつと3人で乗るのね。」

オールスターズはそれぞれ5人ずつで観覧車に乗った。

なぎさ「きれいな景色だね・・・。」

咲「これを見てるとあの頃が夢みたい。」

のぞみ「土さんとダイゴさん、元気かな？」

ラブ「元気だよ！！絶対に！！」

つぼみ「そうですね、きっと元気ですよ！」

するとラブは他のメンバーの乗っている観覧車から何かを感じ取った。

ラブ（何？）

ラブが他の観覧車を見ると他のメンバーが何か黒い物に襲われている。

ラブ「みんな!？」

のぞみ達もラブの様子を見て他の観覧車を見た。

つぼみ「えりか！」

なぎさ「ほのか!！」

咲「舞!！」

ラブ「ブッキー!！」

のぞみ「りんちゃん!！」

のぞみ達の観覧車にも黒い物が現れた。

「貴様らを消す。」

黒い物はのぞみ達を別空間に移動してしまった。

「きゃあああああ!！」

なぎさ、咲、のぞみ、ラブ、つぼみは何やら漢字がたくさんある空間に

ほのか、美希、いつき、えりか、せつなはエンジン音が鳴り響く空間に

舞、祈里、ひかり、こまち、かれんは電子音が鳴り響く空間に

りん、うらら、くるみは何やら五色の光が輝く空間に

あの戦いから数ヶ月・・・また新たな戦いが始まるうとしていた。

「お・・・、丈夫か・・・おい!!」

のぞみ「・・・う、うん・・・。」

???「こんな所で行き倒れか？」

???「珍しいですね殿？」

???「とりあえず人数も多いし、屋敷に連れて行ってあげようよ。」

「

???「わあ!こんな所に行き倒れでございます!」

???「とりあえず店の中に連れて行くダップ!」

こまち「あれ!?!ここは？」

そこは何かの基地のようだった。

???「!?!、君達どこから入ったの!?!」

こまち「えっ!？」

りん「ん?・・・何か良い匂い・・・。」

???「おっ!!目が覚めたな!まあカレー食って落ち着け!!」

こうしてそれぞれのメンバーはそれぞれの人達に引き取られた。

つづく

## 第1話 再び（後書き）

次回、なぎさ、咲、のぞみ、ラブ、つぼみ side  
です。



## 第2話 侍戦隊（前書き）

修正版！！

## 第2話 侍戦隊

のぞみ「・・・!」

のぞみは目を覚ました、そこは見た事がない屋敷のような所だった。

ガラッ

戸が開く、そこには黄色い服を着た若い女がいた。

女「あっ!目覚ましはったんですね!」

のぞみ「えっ!?あっあの・・・ここは?」

女「ちょっと待つといてください。殿様!みんな!」

女はある人達を連れて来た。

???「目を覚ましたか。」

のぞみ「あの・・・あなた達は?」

すると他のプリキュアのメンバーも目を覚ました。

なぎさ「ここは?」

咲「いつの間に・・・」

ラブ「のぞみ!ここは?」

つぼみ「他のみんなは？」

「???」落ち着いてください、まずは自己紹介を・・・え、私は・・・」

「志葉家19代目当主、志葉文瑠だ。」

「……え、私は……」

「俺は谷千明だ。」

「……え、私は……」

女「花織ことはです、よろしく願います。」

「ごほん……え、私は……」

「寿司屋の梅盛源太だ、よろしくな！」

「うっほん……わ！た！し！は……」

「私は白石茉莉よ、よろしくね。」

「うっ……ぐすっ……私……池波流ノ介……です……」

つぼみ「泣かないでください！流ノ介さん！！」流ノ介「ぐすつ・  
・ありがとう……。」

源太「ところで、君達は？」

なぎさ「私は美墨なぎさです。」

咲「日向咲です。」

のぞみ「私は夢原のぞみです。」

ラブ「桃園ラブです！」

つぼみ「花咲つぼみです。」

ことは「なんであそこに倒れはってたんですか？」

事情説明中・・・

茉莉「まさか、外道衆？」

丈瑠「考えづらいな・・・外道衆もしくは三途の川から現れた新たな敵。」

つぼみ「あの・・・私達が別世界から来たって信じてくれるんですか？」

丈瑠「俺達は三途の川という別次元から来た敵・外道衆と戦ってきた。」

千明「だから別世界から来たってのも納得するわけ。」

のぞみ「戦ってきた？」

その時、部屋の金のようなものになった。

源太「外道衆か!？」

茉莉「まさか!？」

丈瑠「とりあえず行くぞ！」

のぞみ「私達も行ってみよう！」（小声）

のぞみ達は丈瑠達のあとを追う。

流ノ介「やはり外道衆！」

ことは「でも何でなん!？」

丈瑠「何でもいい!行くぞ！」

なぎさ「どうする気なんだろう?」

つぼみ「何か取り出しました。」

6人は携帯を取り出し5人は携帯を筆に変形させ  
源太はディスクを折りたたみ、携帯に取り付ける。

「一筆奏上！」

「一貫献上！」5人は筆でそれぞれ火、水、天、木、土の文字を空に書き、原太は携帯を振り前に突き出した。

6人は光に包まれる。

のぞみ「あれは!？」

ラブ「仮面ライダー・・・じゃない!？」

なぎさ「一体!？」

咲「何なの!？」

つぼみ「・・・侍？」

「シンケンレッド・・・志葉丈瑠！」

「同じくブルー・・・池波流ノ介！」

「同じくピンク・・・白石茉莉！」

「同じくグリーン・・・谷千明！」

「同じくイエロー・・・花織ことは！」

「同じくゴールド・・・梅盛源太！」

レッド「天下御免の侍戦隊・・・」

「シンケンジャー！参る！」

つづく

### 第3話 戦い（前書き）

短めです。



### 第3話 戦い

6人は侍戦隊シンケンジャーに変身した。

なぎさ「・・・シンケンジャー?」

のぞみ「ウルトラマンや仮面ライダー、私達以外にも世界を守る人達がいたなんて。」

レッド、ブルー、ピンク、グリーン、イエローはシンケンマル  
ゴールドはサカナマル  
という名の刀で外道衆に攻撃する。

レッド「はっ!」

イエロー「やあ!」

外道衆「・・・」

外道衆は攻撃にひるむが何故か一言も喋らない。

ピンク（まるで人形みたい・・・人形?）

ブルー「殿!あそこにいるのは!」

レッド「あいつら!?何で!」

のぞみ「あっ、ばれちゃった。」

その時のぞみ達の後ろから外道衆の戦闘員・ナナシが現れた。

ゴールド「あぶねえ!!」

のぞみ「プリキュア・メタモルフォーゼ!」

ラブ「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート!」

三人の体が光輝く。

イエロー「えっ!?!」

グリーン「なんだあれ!?!」

のぞみ、ラブ、つぼみはプリキュアに変身した。

ドリーム「大いなる希望の力!キュアドリーム!」

ピーチ「ピンクのハートは愛ある印!もぎたてフレッシュ!キュア  
ピーチ!」

ブロッサム「大地に咲く、一輪の花!キュアブロッサム!」

三人はナナシ達を蹴り倒す。

なぎさ「変身出来ないなんて・・・」

咲「私達は下がりました!」

ブルー「殿！あれは一体！？」

レッド「話は後だ、行くぞ！」

5人は刀に付いているディスクを回す。  
ゴールドは刀にディスクを取り付ける。

レッド「火炎の舞！！」

ブルー「水流の舞！！」

ピンク「天空の舞！！」

グリーン「木枯らしの舞！！」

イエロー「土煙の舞！！」

ゴールド「百枚おろし！」

それぞれの必殺技で外道衆は倒された。

ドリーム「プリキュア・シューティングスター！！」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャイン！！」

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！」

プリキュアもナナシ達を倒した。

ブルー「君達は一体!？」

ドリーム「実は・・・」

事情説明したドリーム達

しかしなぎさと咲は何やら不機嫌そうな顔をしていた。

つづく

### 第3話 戦い（後書き）

次回、投稿は少し遅らせます。  
すいません

## 第4話 激走!!（前書き）

シンケンジャー side はしばらくお休みです

#### 第4話 激走!!

茉莉「プリキュア・・・か。」

ことは「あなた達はちゃんですか？」

なぎさ「私達はパートナーと一緒にないと変身出来ないんです。」

咲「そのパートナーともバラバラになってしまつて。」

流ノ介「殿！他のプリキュアを探してあげましょう！」

丈瑠「そうだな、さっきの奴らも気になるしな。」

のぞみ「ありがとうございます！」

なぎさ・咲「・・・。」

その夜、のぞみ達はしばらく志葉家の屋敷に居候する事になった。

つぼみ「この黒い人達は？」

千明「黒子、屋敷のお手伝いだ。」

ラブ「喋らないね。」

源太「まあ、黒子だからな。」

夕食後・・・

他のメンバーは眠りについていた。

のぞみ「うゝ、トイレ、トイレ・・・あれ、なぎさに咲？」

中庭にはなぎさと咲が話していた。

なぎさ「咲・・・私達、足手まといなのかな？」

咲「そんなこと！！・・・あるのかな・・・。」

なぎさ「私達・・・ただ見てるだけだった。」

咲「みんな頑張つて戦つてるのに・・・うつ・・・ぐすつ」

なぎさ「咲・・・泣かないで・・・うう。」

のぞみ（2人共・・・）

いつもなら励ますのぞみだが今回は声をかけられなかった。

その頃・・・

???「プリキュアでございますですか!？」

???「別世界か・・・信じがたい。」



ほのか「ですよねえ。」

ほのか、美希、いつき、えりか、せつなはPegasusという車屋の前に倒れていた、そこには5人の若者と宇宙人がいた。

「君達の名前は聞いたけど俺達はまだまだたな、俺は陣内恭介だ！」

「僕は土門直樹でございます。」

「俺は上杉実や、よろしくな！」

「私は志乃原菜摘よ。」

「私は八神洋子よ！よろしくね！」

「ダップダップ！」

美希「ダップダップ？」

菜摘「ああ、語尾なダップをつけてるから、名前はダップね。」

せつな「車を作ってるの？」

恭介「ああ、一応店だからな。」

直樹「僕は車のデザインを担当しているでございます。」

いつき（絶対敬語だよ。）

その時店の中のサイレンが鳴った。

ダップ「ボーゾックダップ!!」

実「んなアホな!ボーゾックとは和解したやんけ!」

洋子「とにかく行ってみよう!」

恭介「よし、君達はここに残って・・・」

しかしボーゾックは既に店の前まで来ていた。

菜摘「早っ!?!」

恭介「仕方ない!行くぞ!」

5人は車のキーのような物を取り出し腕につけてるブレスに差し込み回した。

「激走!!!アクセルチェンジャー!!!」

えりか「!?!」

5人はエンジン音と共に姿を変えた。

せつな「ええ!?!」

恭介「レッドレーサー!」  
直樹「ブルーレーサー!」

実「グリーンレーサー！」

菜摘「イエローレーサー！」

洋子「ピンクレーサー！」

「戦う交通安全！激走戦隊！カアアアレンジャー！」

ほか「カーレンジャー！？」

美希「あれも世界を守る人達なの？」

カーレンジャーはボーゾックに立ち向かった。

レッド「おいボーゾック！何でこんな事を！？」

ボーゾック「……………」

イエロー「何で黙ってるの！？」

ブルー「何か変でございます！」

グリーン「さつさと片付けるで！」

ピンク「恭介！」

レッド「すまない！こいつに手こずってて手が離せない！」

ピンク「ええ！ーどーすんのよ！？」

その時

「チェインジ！プリキュア・ビートアップ！」

「プリキュア・オープンマイハート！」

美希、せつな、いつき、えりかはプリキュアに変身した。  
ほのかは敵を引きつける。

ベリー「ブルーのハートは希望の印！摘みたてフレッシュ！キュア  
ベリー！」

パッション「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キ  
ュアパッション！」

マリン「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

シャイン「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

ブルー「あれはまさかプリキュアでございますか！？」

レッド「あの話は本当だったのか！？」

ほのか（・・・変身は出来なくてもやれる事はあるはず！）  
カーレンジャーとプリキュアは協力し、ボーゾックに立ち向かった。

つづく

## 第4話 激走！！（後書き）

次回、カーレンジャー特有のセンスでいきます

## 第5話 戦う交通安全（前書き）

前作に特別編をアップしたのでそれもよろしくお願いします。

## 第5話 戦う交通安全

なんとかボーゾックを追い払ったカーレンジャーとプリキュア

ほのか「危なかった・・・」

恭介「凄いな、鉄パイプでボーゾックに抵抗するなんて。」

直樹「でも何でボーゾックが襲ってきたでございますですか!？」

えりか「気分じゃない？」

実「いや、ちやうやろ!」

せつな「ボーゾックとは和解したって言ってたわね？」

菜摘「うん、そのはずなんだけど。」

美希「不思議ねえ。」

洋子「まあ、そういう事があってもいいんじゃない？」

いつき「いやっ良くない良くない良くない!!!」

ほのか「とりあえず調べてみましょう?」

恭介「そうだな・・・おつ、来た来た!」

「ちゃーす、カツ井屋です。」

えりか「カツ丼!？」

直樹「そついえば今日は給料日だったでございますね!！」

実「奮発したな、ちゃんとみんなの分があるやん。」

いつき「僕達に分まで……」

美希「いつの間に……」

ほのか「すいません。」

菜摘「気にしないでいいよ、ほら食べて食べて。」

ダップ「!」、僕のはカツ丼じゃないダップ!？」

恭介「あつ、ダップはドロップ丼ね。」

えりか「ドッ!？」

せつな「美味しいの?」

「んなわけあるか!！」

つづく



## 第6話 超電子！（前書き）

最近短めです。

## 第6話 超電子！

舞「あれ？・・・ここは？」

舞、こまち、祈里、かれん、ひかりは基地のような所にいた。

「？」「！！、君達どこから！？」

こまち「へっ！？」

かれん「私達は、え」と・・・」

ひかり「少し、落ち着かせてください。」

5人はなんとか落ち着き、目の前の男に聞いた。

祈里「あの・・・あなたは？」

「？」「俺は郷史郎、パイロットだ。」

5人はそれぞれ自己紹介をした、そこに4人の者達が来た。

「？」「郷、この子たちは？」

史郎は舞達のことを話した。

「？」「なるほど、俺は高杉真吾だ。」

「？」「俺は南原竜太。」

「???「矢吹ジュンよ。」

「???「私は桂木ひかる、得意なのはフルートよ。よろしくね!」

舞達は史郎達と共に街に出た。

舞「大きい街ね。」

祈里「住んでみたい!」

その時爆発が起こった。

こまち「きゃあ!」

かれん「何が起こったの!」

謎の戦闘員が襲ってきた、史郎達は戦闘員達をなぎ倒していく。

史郎「君達は下がって、行くぞ!」

「バイオマン!」

5人は片手を開き、片手の拳をつけ叫んだ。  
5人の体に電流がはしる。

舞「え!」

ひかり「姿が変わりました!」

史郎「レッドワン!」

真吾「グリーンツー！」

竜太「ブルースリー！」

ジュン「イエローフォー！」

ひかる「ピンクファイブ！」

「ワン！ツー！スリー！フォー！ファイブ！超電子！バイオマン！  
！」

こまち「あれは！？」

かれん「一体・・・何？」

ひかり「私達も行きましょう！」

舞（私は下がろくと。）

「プリキュア・メタモルフォーゼ！」

「チェインジ！プリキュア・ビートアップ！」

「ルミナス・シャイニングストリーム！」

舞以外はプリキュアに変身した。

ワン「話に出て来たプリキュアか。」

アキラ「一緒に戦いましょう！」

プリキュアとバイオマンは協力し、敵に立ち向かった。

ルミナス「この人達は一体!?!」

ファイブ「新帝国ギア!世界征服を企む悪の組織よ!」

ミント「ならなおさら放つてはおけないわ!」

ツー「ありがとう!助かる!」

パイン「そういえば舞は!?!」

スリー「どこに隠れたんだ!?!」

アクア「!?!、あそこ!?!」

舞は新帝国ギアの戦闘員・メカクローンに追い詰められていた。

舞「うわゝ、ピンチ・・・」

メカクローンは舞に襲いかかった。

舞「きゃあ!?!」

舞はとつさに拳を前に突き出し、それがメカクローンのみぞに入った。

メカクローン「ぐは!?!」

舞「あり?」

一同「……………」

気付いた時にはメカクローンは全滅していた。  
一同は落ち着くために基地に戻った。

つづく

## 第6話 超電子！（後書き）

次回はバイオマンとプリキュアの何かです。

## 第7話 秘密戦隊（前書き）

ついに初代登場！



## 第7話 秘密戦隊

バイオマンとプリキュアは基地に戻り、これからの事を話し合った。

真吾「じゃあ、他のプリキュアをさがすか。」

かれん「なんか突然ですけど、本当ですか!？」

ひかる「当たり前よ、できる限りの事はするわ!」

ひかり「ありがとうございます!!」

舞「私は・・・どうしようかな?」

ジュン「ついてきて、私がアーチェリーを教えるわ。」

舞「あ、はい。」

祈里「何かわかるまでお世話になりそうだね。」

竜太「かまわないよ、ずっといてもいいし。」

こまち「ずっと・・・?」

そんなわけで舞達はバイオマンの基地に居候する事になった。

その頃・・・

くるみ「・・・・あれ?」

うすら「……どこでしょう?……!!、カレーの匂いです  
!」

見渡すとりんが小太りの男と一緒にカレーを食べていた。

???「カレーが一番!」

りん「美味しい!……あ、二人共。」

くるみ「りん!目を覚ましてたのね!……ってうすら!」

うらは既にカレーをほおばっていた。

うら「美味しいです!……くるみさんも食べましょう!」

くるみ「そのカレーその人のなんじゃない?」

???「ええよ、おいどんのはまだまだあるりよる、早く食べな!」

……

くるみ「もぐもぐ……あの、あなたは?」

???「おいどんは大岩大太、キレンジャーや!」

うら「もぐもぐ、キレンジャー?」

りん「もぐもぐ、何それ?」

大太「はっ！つい口に出してしまいよった・・・このままじゃ海城  
どんに・・・」

???「おい、大太！」

大太の後ろには青年3人と女が1人いた。

???「悪いな、今の事は忘れてくれ。」

うらら「ちよつと無理ですかね。」

りん「別に知ってて良いじゃない、私達がプリキュアだって言っ  
ちやったし。」

くるみ「ええ!？」

大太「聞いとるよ、何でも変な黒いのに襲われたとか。」

???「・・・秘密を知ったのなら互いに秘密を知っておく必要が  
あるな。」

???「そうね、私はペギー松山。モモレンジャーよ。」

???「新命明、アオレンジャーだ。」

???「俺は海城剛、アカレンジャーだ。」

???「僕は明日香健二、ミドレンジャーだ。」

りん「・・・思ったんだけど、そのアカレンジャーとかキレンジャ

「何？」

剛「ああ、その・・・」

その時、外で爆発が起こった。

くるみ「何！？」

剛「まさか・・・」

8人は外に出た、そこには謎の戦闘員がいた。

松山「ゾルダー！？」

明「なぜだ、黒十字軍は壊滅させたはずなのに・・・」

剛「なんでもいい、行くぞ！」

5人は一瞬にして姿を変えた。

うらら「えっ！？あつ・・・ええ！？」

りん「もしかして・・・」

くるみ「さっき言ってた・・・」

剛「アカレンジャー！」

大太「キレンジャー！」

明「アオレンジャー！」

松山「モモレンジャー！」

健二「ミドレンジャー！」

「5人揃って・・・ゴレンジャー！！！」

つづく

## 第7話 秘密戦隊（後書き）

次回、戦闘開始！

## 第8話 天使とGO!! (前書き)

34年も経つのか。

## 第8話 天使とGO!!

突然姿を変えた5人に唖然する3人、そしてくるみが

くるみ「・・・って！見てないで、私達も行くわよ！」

りん「え！？あつ、うん！」

うすら「行きましよう！」

3人はキュアモとミルキィパレットを取り出した。

「プリキュア・メタモルフォーゼ！」

「スカイローズ・トランススレイト！」

りんはキュアルージュにうらははキュアレモネードにくるみはミルキィローズに変身し、ゴレンジャーのもとに駆けつける。

アカ「プリキュアか！」

レモネード「一緒に戦いましょう！」

ゴレンジャーはプリキュアと共にゾルダーに立ち向かう。

アカ「何か変だぞ、このゾルダー！」

ルージュ「一体何が!？」



アオ「言葉では説明しづらいが何かが変なんだ!」

するとゾルダーは突如消えてしまった。

ローズ「消えた!？」

モモ「もう訳がわからないわ。」

一同は変身を解いた。

ペギー「とにかくあなた達が言っていた他のプリキュアを探しましょう。」

りん「ありがとう!・・・でも、他のメンバーはどこに?」

一同「うーん・・・」

するとどこからか声が響いた。

????「別の世界にいるよ。」

明「誰だ!」

そこには赤い服を着た青年がいた。

????「俺はアラタ、ゴレンジャー、君達と同じだ。」

剛「同じ?」

アラタ「僕達は別の世界から来たんだ。」

りん「別の世界？」

そこに桃色、青色、黒色、黄色の服をきた男2人と女2人が走ってきた。

剛「同じ・・・つまり君達もその別の世界を守る戦隊なんだな。」

???「そうだ、俺はハイド。」

???「私はモネよ！」

???「アグリだ。」

???「私はエリ、よろしくね!!」

うらら「別の世界って事は、会えないんですか？」

アグリ「安心しな、会えない事はないから俺達はここにいるんだろ。」

くるみ「どうすればいいの？」

ハイド「ここに来るのにかなりの力を使った、行けるのは2人までだ。」

エリ「私達は天使なの、その天装術っていう力を使えばどこの世界にもひとつ飛び〜!!」

一同「天使!？」

モネ「そう！護星天使！」

そこに不気味な怪人が現れた。

「見つけたぞ・・・」

アグリ「めんどくさい奴が・・・ここまで追ってきたか。」

くるみ「どういう事！？」

ハイド「ここに来る途中に奴が現れて追ってきたんだ！」

天使と言う5人は何やらモアイのような顔したアイテムの口を開け、カードを差し込み口を閉じた。

「ガチャ！」

5人「チェンジカード・天装！！」

「チェンジ・ゴセイジャー！」

5人の体は輝き、羽のようなものに包まれ姿を変えた。

剛「やはり戦隊か！」

りん「本当に天使みたい。」

「嵐のスカイクパワー！ゴセイレッド！」

「伊吹のスカイクパワー！ゴセイピンク！」

「巖のランディックパワー！ゴセイブラック！」

「恵みのランディックパワー！ゴセイイエロー！」

「怒濤のシーニックパワー！ゴセイブルー！」

「地球（星）を守るは天使の使命！天装戦隊！ゴセイジャー！！！」

ブルー「アラタはもう1人と行け！！！」

りん「私が行く！」

レッド「よし、ここはまかせたよ！」

剛「俺達も協力する！」

うらら「私達も！！！」

剛達とりんを除くうらら達は変身し、ゴセイレッドを除くゴセイジャーと共に怪人と戦う。

レッド「行こう！！！」

りん「わかった！」

「サモン・スカイックパワー！」

レッドとりんは天使の力で別世界に行った。

う  
う  
う  
う

## 第8話 天使とGO!!（後書き）

次回からはシンケンジャー、カーレンジャー、バイオマンside  
で。

## 第9話 超忍法！（前書き）

「こうた」の「こう」という漢字他に何て読むか教えてください。  
あと、「なく」という漢字も他に何て読むか教えてください。

## 第9話 超忍法！

シンケンジャー side

のぞみ「どうでしょう?。」

丈瑠「・・・ダメだ、モジカラでは他のプリキュアの所には移動できない。」

つぼみ「そうですか・・・一体どうすれば・・・」

ことは「あれ?そういえばなぎさちゃんと咲ちゃんは何?」

のぞみ「そういえばいないですね(昨日の夜から2人共・・・どうしたんだろ?)。」

そこに丈瑠に話があるという3人の若者が屋敷を訪ねてきた。

茉莉「丈瑠の知り合い?」

丈瑠「いや・・・初めて見る顔だ。」

???「君がこの世界の戦隊か。」

千明「俺達がシンケンジャーって知ってんのか!?」

???「私達もあなた達と同じだから。」

ことは「って事はあなた達も戦隊なんですか?」



「???」「忍の力で別世界からやってきた戦隊だ!」

流ノ介「あなた達のお名前は?」

「???」「俺は椎名鷹介だ!」

「???」「野乃七海よ。」

「???」「俺は尾藤吼太だ。」

そこにラブが慌てて部屋から出てきた。

ラブ「大変!大変だよ!」

源太「どうしたラブちゃん!」

ラブ「咲となぎさが部屋にもどこにもいなくて、部屋が血まみれで!」

丈瑠「何!」

一同は部屋に急いだ、ラブの言ったとおり部屋は血まみれでもぬけの空だった。

ことは「ありえへん、一体どうしてこんな事に・・・もしかして2人は!」

鷹介「いや、これは忍術で見せた幻覚だ。」

丈瑠はシヨドウフォンで「解」の字を

空に書いた。

確かにそれは幻覚で2人が寝ていた布団には一通の書き置きがあった。

「2人は預かった、返して欲しくば俺がいる世界に来る事だな。」

源太「ありきたりな書き置きしやがつて！！2人をかえしやがれ！！」

茉莉「源太落ち着いて！！」

のぞみ「私が2人の所に行つてあげれば・・・」

吼太「どういう事？」

のぞみ「昨晚、2人中庭で泣いていたの、私達だけ力になれないつて。」

千明「あいつら、そんな事を思っていたなんてな。」

七海「書き置きの主のいる世界・・・私が探す！鷹介と吼太はここに残つて、誰か1人ついてきて！！。」

丈瑠「それが良いな・・・のぞみ、昨晚2人の他に何かいなかったか？」

のぞみ「2人の他・・・そういえば暗くてよくわからなかったけど、何か変な感じがした。」

丈瑠「ならなのぞみは行くべきではない。」

のぞみ「何で！？」

流ノ介「その変な気配の正体が2人をさらったに違いない、のぞみも狙われているかもしれないからな。」

つぼみ「私が行きます!」

ことは「気をつけてな。」

鷹介「!!、何かいる!?!」

それは悪の組織ジャカンジャの戦闘員・マゲラッパだった。

吼太「ジャカンジャの偽物か!?!」

丈瑠「偽物?」

七海「邪悪な何かがあれば作りだして私達を襲わせてるの!?!」

ことは「じゃああのナナシも!?!」

丈瑠「そつらしい、行くぞ!」

鷹介「俺達も行くぞ!」

「一筆奏上!」

「忍風・忍チエンジ!はあ!?!」

鷹介達は腕のブレスのメダルを回して変身した。

鷹介「風が泣き、空が怒る、空忍!ハリケンレッド!」

七海「水が舞い、波が踊る、水忍！ハリケンブルー！」

吼太「大地が震え、花が歌う、陸忍！ハリケンイエロー！」

レッド「人も知らず！」

ブルー「世も知らず！」

イエロー「影となりて悪を討つ！」

レッド「忍風戦隊！」

「ハリケンジャー！」

レッド「あっさん〜じょ〜お！」

丈瑠達も変身し、マゲラッパに立ち向かう。

ブルー「よし、行こうー！」

つばみ「わかりました！」

ブルー「超忍法！水渡りの術！」

ハリケンブルーの周りに水が起こり、その水が無理矢理次元を開いた。

つばみ以外はプリキュアに変身しマゲラッパに立ち向かう。

ドリーム「ここは任せてー！」

ピーチ「頑張ってー！」

つぼみ「はい!!」

ハリケンブルーとつぼみは開いた次元に入り、別世界に行った。

つづく

## 第9話 超忍法！（後書き）

関連性を持った戦隊が出てきます。

ゴレンジャー ゴセイジャー 何となく

シンケンジャー ハリケンジャー 和風

## 第10話 炎神と電磁（前書き）

本編へ。

## 第10話 炎神と電磁

カーレンジャー side

恭介「・・・カツ丼食べててもラチがあかない、プリキュアの居場所を突き止めよう。」

ほのか「でも、一体どこに？」

???「おい！！カーレンジャー！」

そこにいきなり胸に信号機が付いているカーレンジャーのような者が現れた。

直樹「シグナルマンでございます！」

いつき「信号機!？」

シグナル「本官の許可なく、客を招き入れるとは何事だ！」

美希（許可いるの!？）

菜摘「ところで、シグナルマンは何用？」

シグナル「そうだった、お前達に客だ。」

???「おつ、ここがPegasusか!？」

1人の熱い青年がやって来た。



実「せやけど、あんた誰やねん？」

????「江角走輔だ！よろしくたのむぜ！！」

えりか「よろしく？どついう事？」

走輔「カーレンジャーとプリキュアだろ？他のプリキュアの所に案内するぜ！」

ほのか「え！？」

恭介「なんで俺達の事を！？」

走輔「気にすんな！おい、俺について来い！」

走輔はせつなの手をつかみ走り去った。

せつな「あゝれ〜！」

美希「せつなああああ！！」

.....

走輔「悪い！すこし早まっちゃったぜ！」

????「事情を説明せずに連れてくるのは良くないっす。」

????「そつだよ走輔、ごめんなさい。」

シグナル「君達は一体？」

「???」「僕達は世界の平和を守るゴーオンジャーだよ！」

「???」「まあ、違う世界だけだな。」

いつき「名前は？」

「???」「香坂連っす！」

「???」「私は楼山早輝ね。」

「???」「僕は城範人だよ！」

「???」「石原軍平だ！」

菜摘「ゴーオンジャー、私達カーレンジャーと同じ戦隊ね。」

早輝「そう、それで別の世界に邪悪な存在が現れたの。」

ほのか「邪悪な存在？」

軍平「それが俺達が戦ってきた敵の偽物を作って襲わせているんだ。」

直樹「偽物でございますか!？」

範人「偽物でございますです!!」

美希「感染した。」

実「偽物って事はあのボーソックもやな!？」

軍平「その通りだ。」

走輔「というわけで、俺の相棒スピードルだ!こいつは次元を渡る事ができるからその邪悪な何かがいる世界に突入だぜ!」

いつき「あの・・・範人って人がほのかと行っちゃったんだけど・・・」

走輔「えっ!？」

・・・

バイオマン side

史郎「さて・・・どうするか。」

ひかる「さすがに別世界に行くのは私達のロボでも不可能だわ。」

舞「そうですか・・・うっ!筋肉痛が!」

ジュン「ごめん、やりすぎたわ、今度あなたに合う弓を見つけろわ。」

舞「お気遣いなく・・・ん?」

かれん「どうしたの?」

一同は舞の視線の先を見た。そこに5人の若者たちが落ちてきた。

「???」いたた、だから飛び降りるのは危険だとあれほど・・・」

「???」ごめんごめん、あつ!!あの人たちじゃない!？」

こまち「あなたたちは?」

「???」俺は伊達健太、好物は焼き肉だ!」

「???」遠藤耕一郎、このメンバーのリーダーだ。」

「???」並樹瞬だ。」

「???」城ヶ崎千里よ。」

「???」私は今村みく!!」

その5人は自分達も戦隊である事を伝えた。

慎吾「メガレンジャーか。」

竜太「邪悪な存在・・・」

史郎「話はわかったがどうやって別の世界に行くんだ?」

健太「おっさんが作った・・・え」と・・・」

耕一郎「瞬間次元転送装置、これを使えばどんな世界にも移動できる。」

舞「あの、私が行ってもいいですか？」

一同「いいよ。」

舞（かるっ！？）

みく「じゃあ私と行こう！！」

舞「あっ、はい。」

すると辺りで爆発が起こった。

千里「何！？」

瞬「あれは・・・ネジレジアの残党！？」

それはメガレンジャーの世界の敵、ネジレジアの戦闘員・クネクネだった。

健太「行くぞ！」

5人はブレスのボタンを押した。

「インストール！メガレンジャー！！」

「335！」

5人はメガレンジャーに変身した。

健太「メガレッド！」

耕一郎「メガブラック！」

瞬「メガブルー！」

千里「メガイエロー！」

みく「メガピンク！」

「電磁戦隊！メガレンジャー！」  
「バイオマン！」

「プリキュア・メタモルフォーゼ！」

「チェインジ！プリキュア・ビートアップ！」

「ルミナス！シャイニング・ストリーム！」

史郎達、かれん達も変身してクネクネに立ち向かう。

ピンク「行くよ！」

舞「はい！」

ピンク「転送開始！！！」

装置を使い、舞とメガピンクは別世界に行った。

う  
う  
う  
う

## 第10話 炎神と電磁（後書き）

関連性

カーレンジャー ゴーオンジャー くるま

バイオマン メガレンジャー なんかつく

適当ですみません。



第11話 再会と外道、そして遭遇（前書き）

キャラ崩壊注意。

## 第11話 再会と外道、そして遭遇

別世界・・・

ゴセイレッド「着いたよ。」

りん「ここが・・・」

ハリケンブルー「ここに書き置きの主がいるかもなのね。」

つぼみ「そうみたいですな。」

ゴーオングリーン「変だな・・・邪悪な存在がいる世界とは思えないな。」

ほのか「確かに・・・」

メガピンク「なんか綺麗な草原だね。」

舞「そうですね・・・」

「・・・え？」

一同は綺麗な草原が広がる心地良い世界にきていた、そして互いの存在に気づいた。

つぼみ「りんさん！ほのかさん！舞さん！」

りん「みんななんで？」

ほのか「それにその人達は？」

舞「あゝも、訳わかんない！」

戦隊一同は変身を解いた。

アラタ「みんな落ち着いて！」

七海「一旦話を整理しましょ！」

範人「そうだよ！それだよ！」

みく「場所を変えよう！」

・・・

みく「場所を変えたいけど全部草原だった。」

ほのか「とりあえず話はわかりましたがなんだか状況がにてますね。」

「

りん「確かにね・・・もしかしてつばみ達が言った書き置きの主と・

・・・」

アラタ「邪悪な存在は同じ奴？」

舞「そう考えれば・・・」

範人「納得できる話だよ！？」

七海「そうだとしたらその2人が危ないかも!？」

つぼみ「大変です!!早く2人を見つけましょう!」

アラタ「ついでにその邪悪な存在も見つかるかも!？」

その時声が響いた。

???「なら私も連れて行ってくれないか？」

何者かが現れた瞬間薔薇の香りが漂った。

・・・・・・

なぎさ「・・・あれ?ここは・・・」

なぎさはある場所で咲と一緒にいた。

咲「・・・ん?なぎさ・・・!」

なぎさ「咲?・・・!!」

2人は自分が鎖で繋がれているのに気付いた。

なぎさ「何よ!これ!!」

咲「ダメ!!外せない!!」

???「気がついたか？」

なぎさ「だっ・・・誰!？」

咲「よく見えない。」

そこには咲達にはよく見えない赤い何かがいた。

???「貴様らの力・・・貰うぞ。」

その時、2人の鎖から強力な電流が流れた。

なぎさ・咲「きゃあああああああ!!!!!!」

???「ハハハハッ!これで奴らを地獄の底へ叩き落とす!!」

なぎさ「・・・ダ・・・メ・・・」

咲「・・・させ・・・ない・・・」

???「今のお前らにこの俺を止められるとでも言うのか!?!この・・・血祭ドウコク様を!!」

再び2人の鎖に電流が走る、先ほどより強力な電流で用済みになった2人を殺そうとしているのだ。

なぎさ「きゃあああああああ!!」

咲「うあああああああ!!」

ドウコク「ハハハハハハハハッ、見ているスーパー戦隊共!」

・・・

りん「新命明さん!？」

????「?、何の事だ？」

驚くのも無理はないだろう、りんが見た突然現れた男はアオレンジャー・新命明と瓜二つだったからだ。りんはその事を話した。

????「なるほど、役者繋がりか・・・ブイスリヤア!!」

舞「あれ、聞いた事ある声のような・・・」

????「気にするな、パラレルだと思ってくれ。」

アラタ「あの・・・あなたは？」

????「よく聞いてくれた、私はジャッカー電撃隊・リーダーの番場壮吉だ。」

七海「ジャッカー？」

範人「電撃隊？」

つばみ「ですか？」

壮吉「そうだ、ここからは私に従ってくれないか？」

ほのか「何か考えが？」

壮吉「ああ、君達が言っていた2人を助けだせるかもしれない。」

アラタ「話を聞いてたんだ・・・わかりました、みんな良い？」

一同は頷く。

壮吉「よし、奴らのアジトはわかっている、行くぞ！」

つづく

第11話 再会と外道、そして遭遇（後書き）

次回、変身します。



第12話 助けたい（前書き）

本編へ

## 第12話 助けたい

一同は壮吉の指示に従いアジトを見つけ出した。

壮吉「あれだ。」

つぼみ「あそこになぎさん達が・・・」

みく「見た事のある敵ばかり。」

りん「戦いはできるけど、ほのかと舞は・・・」

ほのか「私達も行きたいけど・・・」

舞「足手まといよね・・・」

しかし2人の脳裏にある記憶が蘇った。

ほのか「鉄パイプで、えい!!」

ボーゾック「ぐは!!」

・・・

舞「えっ!?!きゃあ!!」

メカクローン「ぐおっ!?!」

・・・

舞・ほのか「戦えます!!」

アラタ「あっ・・・そう、よしみんな行こう!!」

一同「おっ・・・おう!!」

アラタ「チェンジカード・天装!」

七海「忍風・忍チェンジ!はあ!!」

みく「インストール・メガレンジャー!!」

範人「チェンジソウル・セット!レッツ・ゴーオン!!」

壮吉「ビィック・ワァアン!!」

壮吉は薔薇の香りを嗅ぎ、空高くジャンプした。そして全身が白く  
顔には七色の逆三角形、赤いマントのビック・ワンに変身した。

りん「プリキュア・メタモルフォーゼ!」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート!!」

・・・

ドウコク「来たか、スーパー戦隊共。」

ドウコクはアジトから外に出た。

・・・

ビツク・ワン「あれは!？」

つぼみ「丈瑠さんが言ってた外道衆の首領・血祭ドウコク!？」

メガピンク「あれも偽物!？」

ドウコク「何をごちゃごちゃと・・・そうだ、このゴミ共を返してやろう。」

ドウコクは息も絶え絶えになった傷だらけのなぎさと咲を一同に向かって投げた。

ほのか「なぎさ!！」

舞「咲!！」

なぎさ「・・・」

咲「・・・」

ドウコク「残念だな、そいつらは過酷な拷問を受けていたからな、生きているが意識を保つ事すらできん。」

ブロッサム「そんな・・・」

ゴーオングリーン「なんてひどい事を・・・」

ルージュ「許さない!！」

ルージュはドウコクに向け必殺技を繰り出す。

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク！」

しかしドウコクは炎の玉を片手で弾き飛ばした。

ゴセイレッド「ならこれだ！コンプレッサンダーカード・天装！」

「サモン・スカイクパワー！」

上空から雷が落ちドウコクを襲うがそれさえも弾き飛ばした。

ドウコク「死ね！！」

ドウコクは手から暗黒の波動を放った。

「うわああああああ！！！！！！」

なぎさ「……………ん……」

咲「……………？」

ドウコク「何！？」

なんとなぎさと咲が意識を取り戻したのだ。

なぎさ「痛っ！……………みんな！！」

咲「くっ、助けないと……………舞！」

ほのか・舞「うん!!」

「デュアル・オーロラ・ウェーブ!!」

「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

4人はプリキュアに変身したが、ブルームとブラックが疑問に思った。

ブラック「あれ？」

ブルーム「力が・・・入らない!!」

ドウコク「当たり前だ、貴様らの変身能力以外は全て俺の中に取り込んだ!!」

ブルーム「そんな・・・」

ブラック「また・・・何も」

ホワイ「しっかりしてブラック!!」

イーグレット「どうしたの!?!ブルーム!?!」

ビク・ワン「2人共!気を確かに持て!!ビクバトン!!」

ビク・ワンはビクバトンでドウコクを攻撃する。

ドウコク「なるほど、少しはやるようだな・・・だが!!」

ドウコクは剣を取り出しビクワンを斬りつけた。

ビクワン「ぐあー！」

ゴーオングリーン「たあ！やあー！」

ドウコク「それで攻撃してるつもりか！？」

ハリケンブルー「ジャイロシュリケン！」

ブロッサム「花よ輝け！！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！  
！」

ドウコク「馬鹿めがー！」

ドウコクは闇の波動で攻撃を簡単に押し返した。

ゴーオングリーン「うわあああああー！」

ハリケンブルー・ブロッサム「きゃああああー！」

ホワイト「みんな！！ブラックどうしたの！？ブラックー！」

イーグレット「ブルームー！！ねえブルーム  
！！」

ブルーム「……………」

ブラック「……………」

ホワイト「…………馬鹿ー！」

イーグレット「いい加減にして!!」

ホワイとイーグレットは2人の頬を叩いた。

ブラック・ブルーム「!!!!」

ホワイ「なんで何も言ってくれないの!?!」

イーグレット「言ってくれなきゃ何もわからないじゃない!!!!」

ブラック「……でも……」

「うわああああああ!!」

ブルーム「!!!!」

イーグレット「見なよ!!みんな傷ついてるじゃない!苦しんでるじゃない!」

ホワイ「私達がなんとかしなきゃいけないの!わかる!?!」

ブルーム「……でも足手まといに……」

ブラック「違う世界でも私達何もできなかった。」

2人はシンケンジャーの世界で何もできなかった事を打ち明けた。

ホワイ「足手まといなんかじゃないわ。」



イーグレット「あなたは今もこうやって変身してみんなも助けようとしてるじゃない。」

ブラック「ホワイト・・・」

ブルーム「イーグレット・・・」

・・・

ゴセイレッド「なんて強さだ。」

ブロッサム「必殺技もまったく効きません!」

ドウコク「ハハハハッ、終わりだ!!」

ブラック「やめて!!」

ドウコク「ん？」

ブルーム「これ以上みんなを傷つけたら・・・許さない!!」

ドウコク「フン、何もできないゴミ共が!!」

ホワイト「2人はゴミなんかじゃない!」

イーグレット「みんなを助けようとする立派な戦士よ!!」

ドウコク「ならその戦士の力とやらで俺を倒してみろ!」

ドウコクは4人に向かって暗黒の波動を放った。

ブラック「もう泣かない！」

ブルーム「もうあきらめない！」

ホワイト「もう2人を・・・」

イーグレット「ゴミなんて言わせない！」

「みんなを・・・助けたい！」

その時、暗黒の波動は何かに打ち消された。

ドウコク「馬鹿な、今の俺の力を打ち消しただと!？」

「???」「君達のその思い、受け取った。」

イーグレット「あなた達は？」

目の前には5人の若者がいた。

「???」「行くぞ!彼らを救助だ!!」

「???」達「おう!!」

「着装!!」

u'u

## 第12話 助けたい（後書き）

次回、救助してもらいます。

第13話 救助と奪還（前書き）

救助！！

### 第13話 救助と奪還

「着装!!」

5人の若者は戦隊に変身した。

ブラック「戦隊!？」

ブルーム「あなた達は・・・」

「ゴーレッド!!」

「ゴースブルー!!」

「ゴーグリーン!!」

「ゴージェロー!!」

「ゴースピンク!!」

「人の命は地球の未来!燃えるレスキュー魂!救急戦隊!!」  
「ゴー!ファイブ!!」

「ゴーレッド」出場!!」

ホワイト「救急

戦隊・・・」

イーグレット「ゴーゴースファイブ・・・。」

「ゴーレッド」きっと君達の力と仲間を救い出そう!!」

ドウコク「貴様らがこの俺に勝てると思ってるのか？」

ゴーパーク「人の気持ちを踏みにじって・・・許さない!!」  
ゴーパークはドウコクに攻撃を仕掛ける。

ゴーパーク「ファイブレイザー！」

ドウコク「そんなもの、痛くも痒くもないわ。」

ゴーパーク「さすがに血祭ドウコクには効かないか。」

ゴーパーク「ならゴーパークだ!!」

ゴーパークはファイブレイザーの二倍の威力を誇る武器だ。

ドウコク「さっきよりはましなようだが、無駄だ。」

しかしゴーパークはゴーパークでドウコクに向けて打ち続ける。

ドウコク「無駄だと言っのが聞こえんのか!？」

ゴーパーク「本当に無駄かな？」

ドウコク「何を・・・何!？」

ドウコクが気づいた時にはビックワン達はゴーパークファイブの所にいた。

ルーシュ「あんたに攻撃してる間に移動したのよ。」

ゴセイレッド「ゴーゴーフアيبの一人が俺達を誘導してくれたんだ。」

ゴイエロー「そういう事。」

ドウコク「貴様ら！」

ゴーレッド「後は君達の力だね。」

ブロッサム「必ず取り戻します！！」

ドウコク「貴様ら！一体何なんだ！？」

「嵐のスカイクパワー！ゴセイレッド！」

「水が舞い、波が踊る！水忍！ハリケンブルー！」

「ドキドキ愉快！ゴーオングリーン！」

「メガピンク！」

「ビックワン！！」

「我らスーパー戦隊！！」

ドウコク「我が力を受けよ！！」

ドウコクは手を一同に向けて暗黒の波動を放った。

ゴーオングリーン「まただ！！」

ブロッサム「私達の必殺技では勝てません！」



ブラック「・・・そういえば・・・」

ブルーム「あいつ・・・」

・・・

ドウコク「お前たちの変身能力以外は全て俺の中に取り込んだ！」

・・・

ブルーム「ブラック!!」

ブラック「うん!!」

なんとブラックとブルームは闇の波動を自ら生身で受けたのだ。

ルージュ「何やってんの!!」

ホワイト「2人共死んじゃう!!」

ブラック「くっ!大丈夫・・・」

ブルーム「これは・・・うっ!私達の力そのものだから・・・」

イーグレット「ブルーム!!無茶はやめて!!」

ドウコク「しぶといな、これでどうだ!!」

ドウコクは闇の波動を最大の力で放った。

ブラック「きゃあああああ！」

ブルーム「ああああああああ！」

ブロッサム「ブラック！！ブルーム！！」

ブラックとブルームは拳を握りしめる。

ブラック「私達の・・・力は・・・みんなを・・・助けるためにあるの・・・」

ブルーム「それを．．．みんなを．．．傷つける．．．ためなんか  
に．．．」

ブラック・ブルーム「使うなああああああああ！！！！！！！！！！」

ブラックとブルームが拳を突き出すと暗黒の波動が光に変わり2人の体に溢れた。

ドウコク「馬鹿な！力を……取り戻したと！？」

ゴセイレッド「凄い！」

メガピンク「やっちゃんえ!!」

ブラック「ブラックサンダー……！」

ブルーム「大地の精霊よ……」

ブラック・ブルーム「我らの力となりて、悪をうち砕け!!」

ドウコク「させるかああああ!!」

ドウコクは2人に向かって突っ込んできた。

「プリキュア・ガイア・サンダー・インパクト!!」

2人は互いに手を握りもう片方の手を突き出した。  
黒い稲妻と大地の光が合体し衝撃波をうみだした。

ドウコク「くっ、この俺が・・・負けるものか・・・ぐおおおお  
おおおお!!!!!!」

ドウコクは消え去った。しかし何かが一同の目の前に現れた。

???「私の最高傑作の一つであるレプリカ・ドウコクを倒すとは  
少しあなどっていたようだ。」

ビクワン「なんだお前は!?!」

ハリケンブルー「なにが目的!?!」

???「君達を知る必要はない、次が楽しみだ。」

ゴーレッド「待て!!」

しかし謎の敵は姿を消した。

ゴセイレッド「もしかして、あれが邪悪な存在かな?」

ブロッサム「その可能性は高いですね。」

ルージュ「でも、一体あいつは誰なんだろう？」

???「僕にまかせて。」

そこにプリキュア達が会った事のある少年が現れた。

ブロッサム「ああああ!!」

ルージュ「なんで!?!なんでこんな所に!?!」

つづく

### 第13話 救助と奪還（後書き）

次回、友情出演。  
検索を始めよう。

## 第14話 知られざる力（前書き）

検索を始めよう、キーワードは「戦隊」。

## 第14話 知られざる力

「???」「僕にまかせて。」

ブロッサム「なんでここにいますか!? フィリップさん!?」

彼は前回の戦いでプリキュア達を救った仮面ライダーWの一人・フィリップだ。

(友情出演させたかった・・・)

フィリップの事を説明中・・・

一同は変身を解いた。

アラタ「心強いね。」

みく「じゃあ早速検索してよ!!」

フィリップは地球の本棚に入った。

フィリップ「検索を始めよう、キーワードは(邪悪な存在の正体)」

本棚が次々に消えていく。

フィリップ「やはり絞れない・・・他にキーワードはあるかい?」

アラタ「他にか・・・」

りん「(レプリカ)は?」

つばみ「さっき言っていましたね。」

フィリップは（レプリカ）で検索したがまだ絞れない。

フィリップ「最後は（創始者）。」

本棚は消えて一冊の本が現れた。

フィリップ「なるほど、奴は数々の怨念の塊からできた存在のよう  
だ。」

七海「怨念!？」

フィリップ「ああ、君達が倒してきた怪人などの怨念。」

範人「そうか・・・つまり、それを浄化しちゃえば!」

ほのか「そのためのプリキュアの力ね!!」

フィリップ「それが一番良いかもしれない・・・そういえば前回の  
戦いの後プリキュアについて閲覧したんだけど、面白い本を発見し  
たよ。」

なぎさ「何々?」

咲「聞かせて!!」

フィリップ「伝説の戦士・プリキュア、邪悪な力に圧倒された時、  
獣・太陽・妖精・時・魔法・爆発・鳥・気・星獣の力を身に付け、



邪悪な存在を滅ぼさん・・・なんだか何かの伝説みたいだけど？」

舞「何だろうね。」

壮吉「まだプリキュアには知られざる力があるのだろうな。」

???「おい!!」

つぼみ「丈瑠さん!? どうして・・・」

丈瑠「折神とモチカラで次元を渡ってきたんだ。」

りん「あっ!! 剛さんまで!!」

剛「どうやって来たかは聞くなよ、面倒だからな。」

ほのか「恭介さん!?」

舞「史郎さん!?」

史郎「とりあえず、みんな連れてきた。」

恭介「プリキュアで沢山いるんだな。」

それぞれの戦隊のレッドがプリキュアメンバー全員を連れてきた。

ラブ「なんだかんだで再会だね。」

のぞみ「これからどうする?」

つぼみ「フィリップさんが言った、獣・太陽・妖精・星獣・爆発・

魔法・気・時・鳥の力が気になります。」

剛「おそらく、別世界の戦隊の事だと思う。」

恭介「確かにそれなら納得できる。」

史郎「なら早速ペアで移動しよう。」

フィリップ「これはプリキュアに関係がある事だから行くのは彼女達だけにしよう。」

相談中・・・そして決定。

のぞみ&amp;りん 星獣の力

咲&amp;舞 妖精の力

ひかり&amp;いつき 太陽の力

くるみ&amp;かれん 獣の力

つぼみ&amp;えりか 爆発の力

せつな&amp;美希 時の力

うすら&amp;こまち 魔法の力

ラブ&amp;祈里 気の力

なぎさ&ほのか 鳥の力

フィリップ「じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ。」

フィリップは自分の世界に戻って行った。

ラブ「そういえばフィリップどうやってここに来たんだろ？」

舞「それは聞かない約束よ。」

つぼみ「丈瑠さんそういえばモチカラじゃ世界を移動出来ないって・  
・・」

丈瑠「聞くな、それより移動させるぞ、いいな？」

プリキュア一同「はい!!」

丈瑠は空にそれぞれの力の文字を書きプリキュアを別世界に移動させた。

つづく

## 第14話 知られざる力（後書き）

次回はのぞみ&amp;りんsideから

第15話 ニキニキ!!かれんとくるみの獣拳修行!! (前書き)

手違いで急遽かれん&amp;くるみsideから始めます。

第15話 ニキニキ!!かれんとくるみの獣拳修行!!

くるみ&amp;かれんside

かれん「ここは何の世界かしら?」

くるみ「なんかジャングルみたいな所ね。」

くるみとかれんは獣の力を知るべくジャングルみたいな風景が広がる所に来ていた、すると・・・

「アアアアーーー・・・」

かれん「ん?何かしら今の声。」

くるみ「近づいてる、気をつけて!-!」

くるみとかれんが警戒態勢にはいる。

???「アアアアー!って、おわああああ!-!」

パンツ一枚の男が木のつたでターザンのようにぶら下がりながらこちらに迫ってきた。

ターザン「呼びました?」

お前じゃない(怒)

そんな男の足がくるみの後頭部に直撃!!

くるみ「そつち!？」

かれん「くるみ!！」

くるみが勢いよく吹っ飛び、かれんがくるみの下に走る。

???「んん?ごめん!気がつかなかった!！」

くるみ「痛た・・・あんた何!？」

かれん「野生人?」

???「野生人?なんだそりあ?・・・」

パンツ一枚の男はくるみとかれんを見つめて何かに気がついた。

???「お前たち・・・カチカチだな。」

かれん「?」

くるみ「カチカチ?」

???「俺と来い!!一緒にワキワキだあ!!」

かれん「えっ!?!ちよつと待って!！」

くるみ「何よワキワキって!?!引っ張らないで!！」

とそこに2人の若者が走ってきた。

???「ちょっとジャン!!何やってんの!？」

???「その子達をはなしてやれ!」

どうやら野生人の名はジャンというらしい。

ジャン「だってこの2人カチカチだから遊んでワキワキして体をヤ  
ワヤワしないと体がズキズキになるんだぞ。」

かれん「何言ってるのかさっぱり・・・」

くるみ「とりあえず、あなた達はなんなの?話してくれない?」

???「ここじゃ何だから移動しましょ、あつ私、宇崎ランね。」

???「深見レッツだ。」

ジャン「俺はジャンだ!!よろしくだ!!」

かれん「あつ・・・水無月かれんです。」

くるみ「顔が近い!!・・・美々野くるみよ。」

2人はジャン、ラン、レッツに案内されある建物の中に入った。

???「戻ったか、ん?その2人は?」

かれん「・・・ね」



くるみ「・・・ね!!」

「猫がしゃべったああああ!!!!」

2人が驚くのも無理ないだろう、目の前にいたのは年老いて二足歩行でしゃべる猫がいたからだ。

ラン「マスター・シャーフー!!いきなりダメですよ!!」

シャーフー「おお、わしとした事が・・・」

レツ「あの方は俺達の師匠、マスター・シャーフーだよ。」

かれん「しゃべる猫が師匠って・・・」

くるみ「どうなのそれ・・・」

事情説明中・・・

ジャン「それで獣拳を身に付けに来たのか!!」

かれん「獣拳・・・?」

くるみ「獣の力ってやつね。」

ラン「でも獣拳の道は厳しいわよ?」

レツ「覚悟は?」

かれん「世界を救うためですもの。」

くるみ「覚悟はしてるわ。」

ジャン「お前たちニキニキだな!!じゃあ早速始めよう!!」

くるみ「ニキニキ?」

修行その一

ジャン「まずはこれを持つんだ!」

ジャンはかれんとくるみに雑巾を手渡す。

かれん「雑巾?」

くるみ「まさか雑巾がけで筋トレって事?」

ジャン「筋トレ?そんな事しないぞ、これでここを磨くんだ!」

ジャンは高いビルを指さした。

かれん「一体どういう事?」

くるみ「わけがわからない。」

ジャン「お手本を見せるよ、行くぞおおおおお!!!!」

ジャンはビルに向かって走る。

かれん「えっ!!あの………えっ?」

くるみ「えええ？」

ジャン「うおおおおお！！！！！！」

なんとジャンはビルを雑巾がけしながら壁を駆け上っていくのだ。

かれん・くるみ「ええええええええええ！?!?!?!?」

ジャンは気づくと屋上に到達していた。

ジャン「何やってんだあ？早く来いよー！！」

かれん・くるみ「……………無理。」

## 修行その二

ラン「じゃあレッツお願い!!」

レッツ「行くぞ！」

レツはざるに入った枯れ葉をすべてランに落とした。

ラン「ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！」

なんとランはその枯れ葉を見えない速さで全て取ったのだ。

ラン「はい！！次はあなた達の番！！」

かれん・くるみ「……はい。」

### 修行その三

レツ「ピアノを演奏してもらおうよ。」

かれん「ピアノ・・・なんとなくなら演奏できるわ。」

くるみ「私も。」

レツ「まずは手本を見せるよ。」

レツは裸足になりなんと足でドヴォルザークのピアノ協奏曲を演奏したのだ。

レツ「さあ、どうぞ。」

かれん・くるみ「うーん・・・」

かれんとくるみは倒れてしまった。  
獣拳の道は文字どおり厳しかった。

つづく

**第15話 ニキニキ!!かれんとくるみの獣拳修行!! (後書き)**

獣拳の道は厳しいものです。

第16話 カチカチ！？足りないものを見つけ出せ！！（前書き）

オリジナル怪人登場です。

第16話 カチカチ!? 足りないものを見つけ出せ!!

かれん「・・・ハッ!!」

かれんが目を覚ました。

そこにはジャンの顔がドアップでそこにあった。

ジャン「大丈夫かああ?」

かれん「きゃあ!!・・・顔が近い!!」

ジャン「ハハッ!ごめんなあ。」

かれん「あの・・・」

ジャン「ん?」

かれん「あなた達はなんで獣拳を?」

かれんはジャンに問いかけた。

ジャンは口を開いた。

ジャン「獣拳には種類があるんだ、俺達のは激獣拳と言って、獣拳を悪い事に使う奴らがいてそれが臨獣拳と言うんだ。」

かれん「激獣拳と臨獣拳・・・」

ラン「私達はその臨獣拳を使う奴らと戦うためにゲキレンジャーとして激獣拳を身につけたの。」

かれん「ランさん！？それにゲキレンジャーって……あなた達は戦隊なの！？」

レツ「そう、それで臨獣拳の奴らを倒したんだけど・・・そいつらの中に少し心をひらいた、理央とメレってというのがいたんだ。」

かれん「その人達は？」

ジャン「死んだ。」

かれんは驚愕した、理由は聞かないほうが良いと思ったのか話を変えた。

かれん「じ、じゃあ獣拳を身につける修行しなきゃ！くつ、くるみは？」

ランはかれんの気持ちを悟った。

ラン（ありがとう。）

- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 

かれん「ひい  
ひい  
ひい  
ひい  
ひい  
！！  
！！  
！！  
！！」

かれんは枯れ葉を必死にキャッチしようとしていた。くるみも必死に枯れ葉を取ろうとする。

そして雑巾がけで建物を登ろうとしたり、足でピアノを演奏しよう  
としたりで数日がたったある日の事……



かれん「全然駄目ね。」

くるみ「これで本当に獣拳を身につけられるのかしら？」

そこに2人の男が現れた。

???「そこのお姉ちゃん!!一緒にお茶しない？」

???「ナンパしてる場合か!!」

かれんとくるみはぽくんとするしかなかった。

???「あ・・・悪い、獣拳の事で悩んでるな？」

くるみ「獣拳を知ってるの!？」

???「俺達もゲキレンジャーだからな。」

「ええええええええ!!」

???「俺は深見ゴウ、レツの兄だ。」

???「久津ケン!!って事で。」

くるみ「事でって・・・」

ケン「なかなか獣拳身につけられなくて困ってるんだろ？」

かれん「・・・修行が上手く出来なくて。」

ゴウ「雑巾がけで高いビル登ろうとしたり？」

ケン「落ちてくる枯れ葉全部キャッチしようとしたり？」

ゴウ「足でピアノ演奏しようとしたり？」

かれん・くるみ「ご名答！！」

・・・

なんだかんだでゴウとケンも修行に参加。

かれん「はあああああああ！！！！！！！」

雑巾がけでビルを登るかれん！！

かれん「あつ駄目無理、きゃあああああ！！！」

ジャン「おっと、大丈夫かあ？」

ビルから落ちるかれんをジャンは受け止めた。

かれん「ごめんなさい。」

ジャン「・・・なんでお前は獣拳を身につけたいんだ？」

かれん「えっ！？前に言っただじゃない、世界を救いたいから・・・」

ジャン「それだけかあ？」

かれん「えっ!?!」

.....

くるみ「やった!! 掴んだ・・・ああ!?! 落とした!?!」

ラン「そんな絶対に取りうとしてたらないよ。」

くるみ「?」

ケン「良く考えてみな?」

.....

かれん「ドの音は・・・ああ!?! これはファじゃない!」

くるみ「足った!?!」

レツ「ジャンの言ったとおりカチカチだな。」

かれん「どうも力が・・・」

ゴウ「力を抜かないと、焦ってるんだろ? 早く獣拳身につけなきゃ  
つて。」

くるみ「・・・あ」

.....

ジャン「何か大切なものを忘れてないかあ?」

かれん「大切なもの？」

ラン「そう、ただ世界を救うってだけじゃ、獣拳は身につけられないよ。」

くるみ「世界を救うだけじゃ駄目・・・」

レツ「別に世界を救うのが駄目ってわけじゃないよ。」

ゴウ「ただ、それだけじゃ足りないって事だ。」

ケン「考えだしてみな。」

かれん・くるみ「・・・」

その時、謎の怪人が現れた。

「見つけたぞ、ゲキレンジャー！！」

ジャン「なんだあ！？」

ラン「見たことない怪人ね。」

「俺はゲキレンジャー抹殺を命じられたカヤクだ！！シネ！！」

レツ「死ぬのはそっちだ！！」

ジャン「行くぞお！！」

「たぎれ！！獣の力！！」

「響け！！獣の叫び！！」

「研ぎ澄ませ！！獣の刃！！」

「ビーストオン！！」

5人はゲキレンジャーに変身した。

「身体にみなぎる無限の力、アンブレイカブルボディー！ゲキレツド！！」

「日々是精進心を磨く、オネストハート！！ゲキイエロー！！」

「技が彩る大輪の花、ファンタスティックテクニク！！ゲキブル  
ー！！」

「紫激気、俺流・・・我が意を尽くす！！アイアンウィル！！ゲキ  
バイオレット！！」

「才を磨き、己の未来を切り開く！アメイジングアビリティ！！ゲ  
キチヨッパー！！」

「燃え立つ激気は正義の証！！獣拳戦隊！！ゲキレンジャー！！」

カヤク「ハハハハ、シネ！！」

かれん「あれがゲキレンジャー・・・」

くるみ「私達も変身を！」

その時ゲキレッドが叫んだ。

ゲキレッド「駄目だ!!」

かれん「えっ!?!」

くるみ「なんで!?!」

ゲキレッド「お前達まだカチカチだ!!ヤワヤワになるまで変身は駄目だ!!」

かれんとくるみは戸惑った。

自分たちに足りないものがまだわからないのだ。

かれん「そんな事言われたって・・・」

くるみ「どうすれば・・・」

ゲキレンジャーはカヤクに獣拳で立ち向かう。

ゲキレッド「ゲキワザ!砲砲弾!!」

ゲキイエロー「ゲキワザ!瞬瞬弾!!」

ゲキブルー「ゲキワザ!転転弾!!」

ゲキバイオレット「ゲキワザ!厳厳拳!!」

ゲキチョッパー「ゲキワザ!鋭鋭刀!!」

しかしカヤクはビクともしなかった。カヤクは受けたゲキワザをゲキレンジャーに向けて放った。

「うわあああ!!」

カヤク「私は受けた攻撃をコピーできるのだ!」

ゲキチョッパー「そんな!？」

ゲキバイオレット「強敵だ。」

かれん「・・・どうすれば・・・。」

くるみ「早くしないとみんなが・・・。」

・・・

???「世界を守れば良いってわけじゃないだろ。」

かれん「どういう事?」

???「世界救つても何も残らなくちゃ意味ないだろ?」

くるみ「確かに・・・。」

???「俺は一度全てを失ったが、取り戻す事ができた・・・仲間のおかげでな。」

・・・

ある男との会話が頭をよぎった。  
そしてジャンの言葉が蘇った。

ジャン「何のために獣拳を身につけたいんだ？」

・  
・  
・  
・  
・  
・

かれん・くるみ「・・・・・・・・!!」

つづく



第16話 カチカチ！？足りないものを見つけ出せ！！（後書き）

次回、ついに

第17話 ヤワヤワ！目覚めろその獣拳！！（前書き）

今回は2つのsideです。

## 第17話 ヤワヤワ！目覚めるその獣拳！！

カヤク「さあゲキレンジャーの最後だ！！」

ゲキレッド「ヤバヤバだあ！！」

ゲキイエロー「ゲキバズーカも今からじゃ間に合わない！」

カヤクが攻撃を仕掛けようとした瞬間、変身したかれんとくるみがカヤクに攻撃を仕掛けた。

ゲキブル「2人共！！」

アクア「させないわ！」

ゲキバイオレット「無理するな！！」

ローズ「大丈夫！私達気づいたわ！」

アクア「さっきまで世界を救う事だけ考えていた！」

ローズ「でも今は違う！私達に足りないのは・・・」

「仲間と一緒にやり抜こうという気持ち！！」

ゲキチョッパー「おお！」

ゲキイエロー「ジャン！もしかして今の2人なら！」

カヤク「だまらっしゃい！！貴様らはここで死ぬんだよ！！」

カヤクは一同に突っ込んできた。

ゲキレツド「2人共！！拳を前にシュビシュビだあ！！」

アクア「シュビシュビ！？」

ローズ「きつとこうよ！！」

2人は拳を前に突き出した。

すると2人の拳から紫色と青色の龍が放たれた。

カヤク「ぬお！！」

カヤクは間一髪それをかわすが突然の事だったので戸惑った。

アクアとローズも何が起ったかわからなかった。

アクア「何・・・今の・・・」

ローズ「あれ？体が！！」

気づいた時には2人の体から青色と紫色の波動がでていた。

ゲキレツド「やったな！これがお前達の獣拳・gogogo拳だ！！」

アクア「gogogo・・・拳？」

ゲキイエロー「あなた達は足りないものを見つけ出せた、だから体にねむる力が目覚めたの！」

ローズ「g o g o 拳、気に入ったわ。」

カヤク「貴様らああ!!」

ゲキブル「来るぞ!!」

ゲキチョッパー「一気に決めようぜ!!」

三人はゲキバズーカを構え気をたくわえる。

ゲキレッド「激激砲!豚の角煮いい!!」

ゲキチョッパー「ゲキワザ!!千千斬!」

ゲキバイオレット「ゲキワザ!!天地転変打!」

ゲキレンジャーはそれぞれ必殺技を放つ。

アクアは空高く飛び上がり、ローズは拳に気をためる。

アクア「g o g o 拳!!水水天龍激!!」

アクアは身に水の龍をまといカヤクに突っ込む。

ローズ「g o g o 拳!!花<sup>か</sup>花旋風龍弾!!!!」

ローズは拳に紫色の風の龍を宿らせカヤクに殴り込む。  
全ての攻撃がカヤクに直撃した。

カヤク「ちくしょおおおお!!!!!!!!」

カヤクは爆発を起こした。

アクア「やった!!」

ローズ「倒した!」

ゲキエロー「おめでとう。」

ゲキブルー「これで君達も獣拳の戦士だ。」

ゲキレッド「お前達ヤワヤワだ!!」

アクア「・・・そうね。」

ローズ「ヤワヤワ・・・ね。」

・・・のぞみ&amp;りんside

のぞみ「・・・せいじゅって何だろう?」

りん「力って言うくらいだから凄いんだろうね。」

???「星獣・・・それは銀河の平和を守る、神秘の動物達のことだ。」

のぞみ「誰!？」

りん「誰も・・・いない・・・?」

その時、鼓膜が破れそうな雄叫びが聞こえた。

「ギイヤアアアア！……！！……！！……！！」

のぞみ「わわわわわああああ！！！！耳があああ！！」

りん「なんの声！？動物じゃないよね！？」

しかし、それは動物だった。

通常の動物の数十倍いや数百倍の大きさだろう。

のぞみ「大きいよおおおおお！！！！！！！！！！！！」

りん「怪獣！？何なの一体！？」

その怪獣が動物かわからない生物はのぞみ&amp;りんに気づかず踏み潰そうとした。

のぞみ&amp;りん「いやあああああ！！！！！！！！！！」

「……やめろ！！ギンガレオン！！」

つづく

第17話 ヤワヤワ！目覚めるその獣拳！！（後書き）

次回からのぞみ&amp;りんsideです。



## 第18話 銀河の戦士達（前書き）

星獣戦隊！！ギンガマン！！  
の前にセリフってありましたっけ？

## 第18話 銀河の戦士達

一人の赤い妙な服を着た青年が謎の生物を呼び止めた。

のぞみ「助かったよぉ。」

りん「怪獣が人間の言う事を聞いた？」

???「怪獣じゃないよ、星獣だよ。星獣。」

のぞみ&amp;りんは驚愕した、探し求めていた星獣をさっそく見つけられたからだ。

のぞみ「・・・そういえばあなたは？」

りん「さっき星獣を止めてましたよね？」

???「ああ、俺はリヨウマ。で、あの星獣は俺のパートナーのギンガレオンだ。」

のぞみ&amp;りんは今までの経緯を説明した。

リヨウマ「なるほど、確かに最近妙な事も起きてる。」

のぞみ「あの・・・星獣の力は一体どうすれば？」

リヨウマ「ついてきて、とりあえず場所を変えよう。」

三人が移動した先にはリヨウマに似た妙な格好をした若者がいた。

「????」「リヨウマ、その子達?」

リヨウマ事情説明中・・・

「????」「星獣の力をねえ。」

「????」「実際に他の星獣を見せた方がいいんじゃないか?」

「????」「それが一番よね。」

のぞみ「お願いします・・・え」と・・・」

「ああ、俺はハヤテだよ。」

リヨウマ「・・・のごとく。」

りん「へ?」

「俺はゴウキだ!」

「ヒカルだよ、よろしく。」

「私はサヤ。」

若者は2人を星獣の所に連れて行った。

「グオオオオオオオ!」

「キイヤアアアアアア!」「ゴオオオオオオオ!」

「ウオオオオオン!!」

「キイイイイイイイ!!」

ゴウキ「みんないつもに増して元気だなあ。」

リヨウマ「あれ?・・・2人共!？」

のぞみ & amp; りん「・・・・・・・・」

サヤ「ありゃ、五体の星獣の雄叫びを一気に聞いたから気絶しちゃったのね。」

ハヤテ「ん・・・・・・・・」

ヒカル「大丈夫なのか？」

はたして2人は星獣の力を手に入れられるのか。

しばらくして・・・

のぞみ「・・・・・・・・ああ、耳が痛い。」

りん「頭が割れる。」

リヨウマ「実際どうすれば星獣の力って身につくんだ?」

のぞみ「えゝ!知らないんですか!？」

ハヤテ「俺達はそういう種族だからな。」

サヤ「気づいたら使えてたって感じよね？」

りん「そんな～・・・。」

ハヤテ「まあ、努力あるのみだな。」

その時、一同に電流が走った。

リヨウマ「うわああああ！」

りん「なに！これ・・・うう！」

目の前には謎の怪人がいた。

「星獣・・・もらう・・・。」

リヨウマ「何だお前は！？」

「お前ら・・・死ぬ・・・だから・・・教える・・・俺・・・バダ  
グ・・・。」

りん「何が目的なの！？。」

「それ・・・教えない・・・死ぬ。」

リヨウマ「誰が死ぬか！行くぞ！」

「おう！」

「ギンガ転生!!」

5人はギンガブレスを使った。

それぞれ炎、水、風、雷、花に身を包み姿を変えた。

のぞみ「なっ!何!?!」

りん「まさか!?!」

リョウマ「ギンガレッド!リョウマ!!」

ゴウキ「ギンガブルー!ゴウキ!!」

ハヤテ「ギンガグリーン!ハヤテ!!」

ヒカル「ギンガイエロー!ヒカル!」

サヤ「ギンガピンク!!サヤ!!」

「銀河を貫く伝説の刃!星獣戦隊!!ギンガマン!!」

彼は星獣の力で銀河を守る戦隊、ギンガマンだ。

のぞみ「戦隊だったんだ。」

りん「私達も!!」

のぞみ「あっ!うん!」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!」

2人はプリキュアに変身し、加勢しに行く。

ギンガレット「よし、行くぞ！」ギンガレットは手を構えた。

ギンガレット「炎の・・・たてがみ!!」

ギンガレットの手から凄まじい炎が放たれた。

ドリーム「すっ！すごい!!」

ルージュ「これが星獣の力。」

炎はバダグに直撃したがバダグの黒い体が赤く変わった。

ギンガグリーン「なんだ!？」

ギンガブルー「なんか来るまえに片付けよう!!」

4人も手を構えた。

ギンガグリーン「風のはばたき!!」

ギンガブルー「流水の鼓動!!」

ギンガイエロー「雷の雄叫び!!」

ギンガピンク「花びらの爪!!」

バダグは風、水、雷、花びらの力を直撃したがなにやら嬉しそうにつばやいた。

バダグ「お前ら・・・馬鹿・・・お前ら・・・力・・・くれた。」

ドリーム「ルージュ!!」

ルージュ「うん!」

ドリーム「プリキュア・シューティングスター!!!」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!」

プリキュアは必殺技を繰り出す。  
しかし・・・

バダグ「無駄」

バダグは片手でドリームを受け止め、ファイヤーストライクの盾にした。

ドリーム「きゃああああ!!!!!!!!」

ルージュ「ドリーム!!」

バダグ「今・・・力・・・使う。」

バダグはドリームを投げ飛ばし、腕から五色の光線を空に放った。

ドリーム「くっ・・・なに?」

ギンガピンク「あの方向は、星獣達が!!」



その時星獣が現れギンガマン達を襲った。

「ぐわあああああ！！！！！！」

バダグ「星獣・・・俺・・・仲間・・・お前ら・・・勝てない。」

そう言うバダグと星獣達は消えてしまった。

ギンガブル「俺達の力を吸収して星獣を操ったのか。」

ギンガレット「何とかしないと。」

「あああああああ！！！！！！！」

悲鳴が響き渡った、ドリームだ。

ルージュ「どうしたの！？ドリーム・・・！！！」

ギンガイエロー「どうしたんだ・・・なっ！！！！！」

一同「！！！！！」

一同が見たのはドリームの右腕が段々紫色に変色していく様子だった。

う  
う  
う  
く

## 第18話 銀河の戦士達（後書き）

次回、ドリームに危機！！

なんかドリームだけ苦しい思いしてる気がするきた。

## 第19話 宝の損失（前書き）

今回はオリジナル設定多彩です。

## 第19話 宝の損失

のぞみ「くっ……うああああ……!!!!」

りん「のぞみ!! しっかりして!! のぞみ!!」

リョウマ「駄目だ、アースでも治らない。」

りん「アース？」

ハヤテ「俺達を力は君達は星獣の力って呼んでるけど正式には地球の力・アースなんだ。」

その時サヤはある事に気がついた。

サヤ「ねえ……」

ヒカル「どうした？サヤ。」

サヤ「のぞみちゃんの腕の変色……広がってない？」

りん「……!!」

りんはのぞみの体を見た、たしかにその変色は腕にとどまらず肩にまで広がっていた。

のぞみ「あ……くっ……」

のぞみは既にしゃべる事すらやつの状態だった。

りん「なんなの！？何が原因なの！？」

ゴウキ「何か心当たりは？」

そしてりんはある事に気がついた。

・・・リヨウマに会おう少し前・・・

のぞみ「よし！星獣の力を手に入れるぞ、けってゝい！！」

りん「そんなにはしゃがないの、ケガするよ。」

のぞみ「大丈夫大丈夫・・・うわあ！！」

のぞみは段差に気づかずに転んでしまった。

りん「もう言わんこっちゃない、大丈夫！？」

のぞみ「大丈夫だよ・・・って痛っ！！」

りん「どうしたの？」

のぞみの右腕から多少の血がでていた。

のぞみ「どうしょ。」

りん「包帯はないから葉っぱ押しつけときな、ほら。」

りんは妙に長くて大きい葉っぱを差し出した。

のぞみ「私ゴム持つてるからそれを巻いて。」

りん「はいはい。」

.....

りんはのぞみの腕を見たが、巻いたはずの葉っぱが消えており、葉っぱに巻いたゴムだけが腕にあった。

サヤ「バダグ草・・・」

リヨウマ「バダグ草？なんだそれ？」

サヤ「ヒュウガに聞いた事があるの、あの怪人の名前を聞いて何か引っかけたんだけど・・・」

ハヤテ「何なんだ、そのバダグ草って？」

サヤ「バダグ草は他の植物の葉っぱよりかなり大きくて長いのが特徴の猛毒の植物、体に押しつけとけばその葉っぱの成分が体の中に入って葉っぱ自体は消滅してしまう。」

ゴウキ「もうそれじゃないか！」

サヤ「でも可笑しいの、バダグ草は星獣が地球にやってきた3000年前に既に星獣の力で絶滅してるはずなの。」

リヨウマ「じゃあなんで？」

????「バダグを生み出した奴のせいだろう。」

りん「誰!？」

ハヤテ「ブルブラックじゃないか！」

ブルブラック「久しぶりだな、その子達の事は大体わかってる、バダグとは・・・恐ろしい奴が蘇ったもんだ。」

リヨウマ「奴を知ってるのか!？」

ブルブラック「ああ、バダグは今から3000年前、俺がギンガの光をこの地に持って来た直後・・・俺は奴と戦った。」

ヒカル「そんな事が・・・それで？」

ブルブラック「惨敗だった、手も足も出ないとはこの事だろう。」

サヤ「ブルブラックが負けた？」

ブルブラック「ああ、その後初代ギンガマンと協力しなんとか倒したが・・・まさか今になって復活するとはな。」

リヨウマ「そういえばヒュウガ兄さんは？」

ブルブラック「最近の妙な出来事について調査中だ。」

ゴウキ「ブルブラックは星獣なのに操られなかったのか？」

ブルブラック「奴はヒュウガの力を吸収していないから俺は無事だったんだろう。」

その時のぞみが口をパクパクと動かし始めた。



りん「どうしたの？」

りんはのぞみに耳を近づける。

のぞみは「私はいかりんちゃんは星獣の力を手に入れて。」と弱く言った。

りん「何言ってるの！？そんなのできないよ！！」

サヤ「でも何で絶滅したバダグ草が？」

ブルブラック「バダグの仕業だろ、奴は消えた物質を復元する能力がある。」

ハヤテ「なるほど、治療法はないのか？」

ブルブラック「・・・ひとつだけある。」

りん「教えて！！このままじゃのぞみは！！」

ブルブラック「ギンガの森にあるギンガ草を使っんだ。」

サヤ「ギンガ草！？でもそれはバダグ草と同じで3000年前に絶滅してるはずよ！？」

ブルブラック「確かに、だがギンガ草はまだ絶滅していないという噂がある。」

リヨウマ「それが本当ならまだ希望はあるな。」

ブルブラック「どうやら俺が潜んでいた洞窟のさらに奥にあるらしい。」

ヒカル「じゃあすぐに!」

その時りんが・・・

りん「のぞみ?・・・のぞみ!!のぞみ!!!!!!」

のぞみ「・・・・・・・・」

のぞみはりんがいくら呼びかけても返答しない。

ブルブラック「かなりまずい状態だな、急いだほうがいい。」

りん、リョウマ、ヒカルは洞窟へ急いだ。

・・・・・・・・

リョウマ「あつた、ここだ。」

ヒカル「急ごう!」

りん「うん!」

三人は洞窟の奥に入っていた。

りん「暗い、こんなんで見つかるの?」

ヒカル「サヤが言うにはギンガ草は暗い中でも弱い光を放ってるらしいからたぶん見つかるよ。」

リヨウマ「確かここだよな、ブルブラックがいた所・・・」

りん「でも行き止まりだよ？」

ヒカルが頭を抱えながら壁に寄っかかると壁が光だした。

ヒカル「え!？」

りん「壁が・・・」

リヨウマ「消えていく。」

壁が消えるとなにやら奥に弱い光が見えた。

リヨウマ「あの光か!？」

りん「急がないと!」

三人はのぞみの体の状態を考え急いだ。

そこには光を放ちながら咲いている美しい花があった。

りん「綺麗・・・これがギンガ草？」

リヨウマ「サヤの言ってたのと同じだ。」

ヒカル「早く戻ろう!」

しかし洞窟を出た時には見た事のない戦闘員に囲まれていた。

リヨウマ「何だこいつら!?!」

戦闘員「オレタチハ『メデム』ノセントウイン・ビッパード!」

ヒカル「メデム?」

リヨウマ「何だそれ?」

りん「そんなのどうでもいい!!そこをどいて!!」

ビッパ「ソレハデキナイ」

リヨウマ「だったら力ずくだ!炎のたてがみ!」

凄まじい炎がビッパを襲う。

ビッパ「ギアアア!!」

ヒカル「雷の雄叫び!!」

ビッパ「ギアアア!!」

リヨウマ「急ごう!!」

リヨウマ達は急いでのぞみ達のもとへ行くが、途中でビッパの奇襲を受けながらなんとか退くきのぞみ達のもとにたどり着いた。

りん「みんな!!」

しかし辺りは重い空気に包まれていた。

リヨウマ「どうしたんだ？」

ヒカル（まさか・・・）

サヤは涙を流しながらりんに伝えた。

サヤ「りんちゃん・・・のぞみちゃんは・・・」

りんは持っていたギンガ草を落とし、のぞみに駆け寄る。

りん「のぞみ！！」

しかしのぞみは目を覚まさず返答もしない。

りんは大粒の涙を流しながらのぞみに声をかけつつける。

りん「のぞみ・・・何でも言うてくれないの！？ねえ、のぞみ！！」

のぞみ「・・・」

りん「のぞみ！！冗談は止めてよ！！・・・また一緒にナッツハウ  
スでみんなと・・・ココとナッツとシロップと・・・うらやくる  
みや・・・こまちさんにかれんさんとお菓子食べようよ！！」

のぞみ「・・・」

りん「私の豆大福と羊羹全部食べていいから！！ねえのぞみ！！」

その時、ビッパーがバダグと共に現れた。

ブルブラック「バダグ!!」

バダグ「へへ……一人……死んだ……次……お前たち……」

リョウマ「サヤとヒカルはりんを守ってくれ!!」

サヤ「わかったわ!」

ヒカル「任せろ!」

リョウマ「貴様だけは絶対に許さん!!」

「ギンガ転生!!!!!!」

つづく

## 第19話 宝の損失（後書き）

次回、りんはこの状況をどう乗り越えるのか！？

## 第20話 銀河の覚醒（前書き）

やっとできた！！



## 第20話 銀河の覚醒

「ギンガ転生!!」

リヨウマ達はギンガマンに変身し、立ち向かう。

ギンガレット「くらえバダグ!!炎のたてがみ!!」

ギンガブルー「流水の鼓動!!」

ギンガグリーン「風のはばたき!!」

しかしバダグはギンガマンの技を片手で振り払った。

ギンガレット「何!!」

バダグ「次・・・俺・・・」

バダグは両手をかざすと炎のたてがみ、流水の鼓動、風のはばたきが合体したエネルギーが放たれた。

ギンガレット「うわあああ!!」

ギンガブルー「ぐわああああ!!」

ギンガグリーン「ぬああああ!!」

バダグ「俺・・・ブルブラック・・・戦いたい・・・」

ブルブラック「三人共、俺が行く。」

ブルブラックは剣をとりだしバダグに立ち向かう。

・・・・・・・・

ギンガイエロー「このビツパーって奴、気味が悪い!!」

ギンガピンク「きりがない!!」

ギンガイエロー、ピンクはビツパーの大群に苦戦していた。

りん「・・・のぞみ。」

りんはのぞみが死んだショックから立ち直れないでいた。

ギンガイエロー「くそ!りん!!」

ギンガピンク「駄目!りんちゃんの耳に届いてない!!」

その時、ビツパーが攻撃をやめたと思うと、向こうからバダグがやってきた。

ギンガピンク「リョウマ達は!？」

バダグ「あいつら・・・これ？」

バダグの後ろから、ボロボロになった4人を運んでいるビツパーが現れた。

ギンガイエロー「4人共！」

バダグ「こいつら・・・弱い・・・あの女・・・同じ。」

その言葉にりんが反応した。

りん「のぞみが・・・弱いですって？」

バダグ「そいつ・・・弱い・・・だから・・・死んだ。」

ギンガレット「くっ・・・。」

ギンガブルー「うう・・・。」

ギンガグリーン「はあ、はあ」

ブルブラック「う・・・お・・・」

ギンガピンク「良かった、生きてた！」

バダグ「弱い・・・だから・・・死ぬ」

りん「みんなは、弱くなんかない!!」

りんはバダグに向かって叫んだ。

バダグ「は？」

りん「弱いのはあんたよ!!・・・こんな卑怯な事してのぞみを苦しめて、リヨウマ達の力も奪って・・・自分の力じゃ何もできない

からじゃない!!」

バダグ「お前・・・むかつく・・・殺す」

バダグはギンガピンクとギンガイエローを払いのけ、りんの頭をつかみ持ち上げ、握りつぶそうとする。

りん「うあ!!」

バダグ「そいつ・・・弱い・・・だから・・・死んだ」

りん「のぞみは死んでなんかいない!私の・・・いや、私達の心の中で生きてる!!」

ギンガマン「!」

りん「人が本当に死ぬのは、みんなに忘れられた時・・・でも、のぞみは私達の中にいる!ずっと生きてる!!」

バダグ「意味・・・わかんない・・・死ぬ」

バダグが手に力を入れようとしたとき・・・

「ギャオオオオオオ!!」

バダグが操った星獣が雄叫びをあげだした。

バダグ「何!？」

星獣の瞳は美しく輝き、ビッパ一軍に襲いかかる。

ギンガイエロー「洗脳が解けた!!」

バダグ「なんで・・・わかんない・・・」

星獣は口から光の玉をだした。

ブルブラック「あれはまさか!？」

ブルブラックは手をかざすと同じ光の玉が出てきた。

そして、6つの光の玉がバダグを襲いりんを助け、のぞみとりんの体に入った。

りん「何!？」

ギンガピンク「星獣の力が二人に!!」

りん「でも、なんでのぞみにも?」

???「・・・私も星獣の力、手に入れるために一緒に来たんだよ?りんちゃん。」

りんは聞いた事のある声を聞いて驚愕し、後ろを振り向いた。

りん「の・・・ぞみ?」

そこには死んだはずののぞみがいつもの笑顔でそこにいた。

のぞみ「えへへ、少し寝坊しちゃった。」

りん「・・・少しじゃなくて大分でしょ!!」

りんはあまりの嬉しさに涙を流しかけるがすぐに涙を拭いバダグの方を向いた。

バダグ「なんで・・・生き返った・・・意味・・・わかんない。」

のぞみ「あんたにはわかんないわ、私達はずっと一緒なの!!どんなに離れていても私達は繋がってる・・・だから私は戻ってこれた!!」

バダグ「貴様・・・殺す。」

のぞみとりんはプリキュアに変身しようとするが何かに反応した。

のぞみ「あれ?何かな、この腕についてるの。」

りん「ギンガマンのに・・・似てる?」

のぞみ「& a m p ;りん「!!!!」

何かが二人の頭によぎった。

のぞみ「りんちゃん!!」

りん「うん!!」

二人は腕についているブレスを回し、ボタンを押した。

のぞみ「ドリームブレス!!」

りん「ルージュブレス!!」

のぞみ&りん「フルスロットル!!!!!!ギンガ転生!!」

のぞみの体は希望の光に

りんの体は凄まじき炎に包まれ、プリキュアに似ている鮮やかな衣装に変わった。

ギンガレット「なっ!?!」

ギンガブルー「あれは!?!」

ブルブラック「おお!!」

バダグ「何・・・あれ?」

「ギンガドリーム!!のぞみ!!」

「ギンガルージュ!!りん!!」

ギンガドリーム「華麗に!!」

ギンガルージュ「激しく!!」

「銀河の雄叫びを今ここに!!ギャラクシープリキュア!!」

ギンガドリーム「ここに降臨!!」

バダグ「死ね」

バダグは攻撃を仕掛けるが二人はその攻撃を簡単にかわした。

ギンガドリーム（すごい力・・・）

ギンガルージュ（相手の動き、考え・・・）

（全部読みとれる！！）

二人はバダグの懐に重たい一撃を浴びせる。

バダグ「痛い・・・ぐわあああああ！」

バダグは狂ったのか、黒い光弾を辺り一面に打ち散らす。二人は全てかわしてバダグと距離をとる。

ギンガドリーム「ルージュ！！」

ギンガルージュ「わかってるわ！」

二人は再びブレスを回した。

ギンガドリーム「希望の覚醒！！」

ギンガルージュ「炎の覚醒！！」

「舞い降りろ！！」

二人は光と炎に包まれ、また姿を変えた。



「闇を照らす銀河の希望！！ホーピングドリーム！！！」

「闇を焼き尽くす銀河の炎！！バーニングルージュ！！」

そして二人に見たことのない星獣が舞い降りた。

ブルブラック「あれは！？伝説の星獣、ギンガイガーにギンガラゴン！！！」

ホーピングドリーム「銀河の希望！！」

バーニングルージュ「銀河の炎！！」

「全ての闇を葬る銀河の輝き！！受けてみなさい！！プリキュア・ギヤラクシーリジェクト・ハーベスト！！」

凄まじい銀河の輝きがバダグを襲う。

バダグ「俺・・・強い・・・こんなの・・・効かない・・・ぎゃああああああ！！！！！！！！」

バダグはまばゆい光と共に消え去った。

つづく

## 第20話 銀河の覚醒（後書き）

これ書き終わった時なぜか息切れしてた。

次回、少しギンガマン編とこまち&amp;mp・うららside

## 第21話 魔法を学べ！〜マジ・マジ・マジロー（前書き）

Wikipediaにマジシャインの変身呪文が載ってない不思議な出来事に出会いました。

色々修正あるのはわかってるんですが、漢字は別の読み方を調べて後々修正します。「たゆたう」とか・・・

長々すいません。

## 第21話 魔法を学べ！〜マジ・マジ・マジロー

のぞみ「お〜いし〜!~!」

りん「幸せ〜。」

のぞみとりんは森の食べ物で腹ごしらえしていた。

リヨウマ「すごい力だったな、ギャラクシープリキュア・・・。」

サヤ「本当、びっくりしちゃった。」

のぞみ「えへへ、びっくりさせるの好きだもん!」

りん「わっ!~!」

のぞみ「ひゃあああ!~!」

一同「ハハハハハ!」

・・・こまち&amp;うづらside・・・

こまち「・・・」

うづら「・・・」

???「・・・」

こまちとうづらは若い高校生ぐらいの男と沈黙の領域をかみしめて

いた。

こまち「あの、あなた一体？」

???「いや、こつちが聞きたいよ!!服着替えててパンツだけになつたら急に後ろにいたんだもん!しかもその瞬間『きゃあああ!』ってこつちが『きゃあああ!!』だよ!!」

うらら「すいません!急にパンツだけの変・・・男の人が現れたか  
と思つて!!」

???「いま変態つて言いかけなかった!？」

???「ちよつと魁、うるさい・・・つて誰!？」

そこに青い服を着た女が現れた。

そしてぞろぞろと緑、桃、黄、深青色の服を着た若者が出てきた。  
ちなみにこまちとうらが話していた男は赤い服をきている。

???「まさか・・・彼女か!？」

???「しかも二人とは・・・」

???「じゃあフタマタがバレて話し合つてるところ!？」

???「よし魁、兄ちゃんがそんなときの対処法を教えてやる!  
」

???「そんなんじゃないよ!!」

・・・・・・

「???」つてわけだよ。」

こまち「すいません!!!!」ご迷惑をおかけして!!!わたし秋元こまちです!」

うらら「あわわわ、春日野うららです!」

とつさに自己紹介した二人。

「???」あつ・・・え」と

「???」魁!駄目だぞ、自己紹介されたらそう返さなきゃ。こいつは末っ子の小津魁だ、俺は長男の小津時人だ!」

魁「なんでそう返せていっておいで言っちゃうんだよ!」

「???」私はあなたと同じね、小津麗です。」

「???」僕は夫のヒカルだよ。」

「???」はい!私小津芳香よ!よろしくね」

「???」なんで最後なんだよ、小津翼だ。」

・・・・・・

時人「なるほどなるほど、それで魔法の力を・・・」

こまち「信じてくれるんですか!？」

ヒカル「僕達マジレンジャーは別世界の天空聖界・マジトピアと関わりがあるからね、おかしくはないよ。」

こまち&amp;うらら「マジレンジャー!!!!!!」

こまちとうららはどぎもを抜かれた、目の前にいるたわいのない普通の兄弟が戦隊だということからだ。

芳香「そっ!魔法戦隊マジレンジャー」

うらら「あの、いきなり図々しいかもしれませんが・・・」

こまち「言ったとおり魔法の力が必要なんです、だから私達に魔法を・・・」

麗「いいわよ、ねえみんな？」

魁「別にいいぜ。」

時人「これからは兄ちゃんと呼んでくれ!」

ヒカル「僕で良ければ。」

芳香「芳香ちゃんもOK」

しかし

翼「俺はパス。」

全員が「え!？」という形相で翼を見た。

翼「プリキュアとか世界を救うとか、俺はまたそんな苦しい思いはしたくないんだ・・・俺は抜けるぜ。」

翼は家の外へ出て行ってしまった。

麗「ちよっ!翼!？」

こまち「やっぱり迷惑でしたか？」

魁「いや、兄ちゃんは本当は優しい奴なんだけど・・・」

芳香「人見知りというか・・・」

詩人「人を疑いやすいタイプなんだ、打ち解けるには時間かかるけど、それは俺達の問題だから。」

ヒカル「僕達は今できる事をしよう。」

うらら（翼さん・・・）

というわけで魔法レスンススタート!

ヒカル「まずは場所を変えよう。」

ヒカルは変わったアイテムを取り出し何やら呪文を唱えた。

ヒカル「ゴルド!」



すると景色が変わり、一同は不思議な空間にいた。

こまち「すごい……」

「魔法ですね。」

そして小津家一同は呪文を唱え姿を変えた。

魁達はケータイを

ヒカルは切符のようなものとそれを先ほどのアイテムで挟み呪文を唱えた。

「天空聖者よ！！我に魔法の力を！！」

こまち「ケータイが光ってるわ！」

「魔法変身！マージ・マジ・マジロー！」

「魔法変身！ゴール・ゴル・ゴジカ！」

すると一同は光に包まれ姿を変えた。

詩人「唸る大地のエレメント！緑の魔法使い！！マジグリーン！！」

芳香「吹きゆく風のエレメント！桃色の魔法使い！！マジピンク！」

麗「たゆたう水のエレメント！水色の魔法使い！！マジブルー！」

魁「燃える炎のエレメント！赤の魔法使い！！マジレッド！！」

ヒカル「輝く太陽のエLEMENT!! 天空勇者マジシャイン!!」

こまち「すごい!!」

うらら「魔法って色々あるんですね。」

マジレッド「まずはこれだ!!」

マジレッドはケータイを使い呪文を唱えた。

マジレッド「マジ・マジカ! レッドファイヤー!!」

マジレッドは全身を炎で包み込み、鳥の姿になった。

マジレッド「本当は攻撃呪文だけど、今は空を飛ぶぞ!! うおおお  
おおお!!」

こまち「すごい・・・」

うらら「私達にできますかね?」

マジピンク「いきなりは無理よ、まずは花を咲かせるとか。」

マジシャイン「・・・」

マジブルー「どうしたの? ヒカル。」

マジグリーン「なんか言わないのか?」

マジシャイン「いや．．．その．．．マジフォンも杖もないのに  
どうやって魔法を？」

一同「あ．．．．．」

つづく

**第21話 魔法を学べ！ーマジ・マジ・マジーロー（後書き）**

次回、オリジナル怪人登場の予定です。

第22話 最悪の怪人〜マジ・マジ・マジ・マジ・マジロー（前書き）

さてさてマジレンジャー編PART2スタート

## 第22話 最悪の怪人〜マジ・マジ・マジ・マジロー

こまち「えっ！？それがないと魔法使えないんですか!？」

ヒカル「うん、出来たとしてもかなり難しいと思う。」

うらら「困りましたね。」

時人「まあまあ、いいじゃないかいずれできるさ。」

.....

翼「は！たあ！」

翼はボクシングジムで練習をしていた。

翼「はあはあ、今日はここまでかな。」

???「お疲れ様です。」

翼「うお！・・・なんだお前か、え」と・・・

うらら「春日野うららです。」

翼「何の用だ。」

うらら「いえ、ここにいるって聞いたから・・・」

翼「だったら目障りだ、どっか行け。」

「うらら」・・・はい。」

翼はうららにきつく言い放ちその場を去った。

翼「・・・すまねえな、今はこつするしかねえんだ。」

・・・

こまち「魁さん、呪文だけでも教えてくれませんか？」

魁「いいよ、え〜と変身が・・・」

蒔人「大変だ！！魁！！」

魁「どうしたの兄ちゃん？」

蒔人「麗とヒカルが変な怪人にさらわれた！」

魁とこまちは驚愕した、芳香とうららにその事を伝え蒔人に怪人のいた場所に案内された。

蒔人「この川で三人で釣りをしてたらいきなり現れて・・・」

魁（またなんでこんなどぶ川で釣り？）

芳香「さらわれたって、どうやって？」

蒔人「川に引きずり込まれたんだ。」

こまち「ええ！！」

うらら「大丈夫でしょうか？」

魁「別空間に移されたとか？」

魁の何気ない一言で一同は

芳香「それよ!!」

詩人「さすが俺の弟だ!!」

こまち「じゃあ、魔法でその空間に生きましょう。」

うらら「そうしましょう。」

三人は呪文を唱えて別空間に行った。  
その近くには翼がいた。

翼「俺は行くわけにはいかない・・・もう少し待っててくれ。」

・・・別空間

詩人「ここにヒカルと麗が？」

こまち「まだ断定出来ないと思います。」

魁「とりあえず先に進んでみよう。」

その時



「??? キヤハハハ! 死ぬ、マジレンジャー!」

何者かが攻撃を仕掛けてきた。

「うちら、何ですか!」

芳香「何よあんだ!!」

「??? キヤハハハ!!! 私はドグラよ!!! キヤハハハ!!!」

魁「何だか気持ち悪いな。」

詩人「お前！！ヒカルと麗をどこにやった!？」

ドグラ「キャハハハ！あぁ、あの2人？キャハハハ！馬鹿よ、私にかなうはずないのに変身して攻撃して返り討ちになってあそこに吊されてやんの！キャハハハ笑えるわ！！」

ドグラが指さした方向には鎖で吊されているヒカルと麗がいた。

魁「ヒカル！！麗姉ちゃん！！」

蒔人「ゆるさねえ！！行くぞ！」

こまち「私も許せない！！」

「うらうら、行きましょー！」

「マジ・マジ・マジロー！」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!!」

一同は変身した、その時気絶していた2人が目を覚ました。

ヒカル「みんなー!!」

麗「そいつの前で変身しちゃ駄目!!」

ドグラ「キャハハハ!! わかった!」

マジレッド「何わけわかんねー事言ってやがる! レッドファイヤー  
!!!」

マジレッドはレッドファイヤーで攻撃し見事に直撃、しかし

ドグラ「キャハハハ!! 効かないよ!!」

ドグラはマジレッドを投げ飛ばした。

マジレッド「なっ!!? うわ!!」

マジピンク「魁!!」

マジグリーン「魁の攻撃が効かない!？」

レモネード「なら任せてください!! プリキュア・プリズムチェー  
ン!!」

レモネードはプリズムチェーンでドグラを拘束する。

レモネード「捕らえました!!」

ミント「わかったわー！！プリキュア・エメラルドソーサー！！」

マジピンク「ピンクストーム！！」

マジグリーン「グリーンランド！！」

エメラルドソーサーと魔法がドグラを襲うが

ドグラ「キャハハハ！！笑える！！効かないのわかってない！！」

ミント「なんでなの！？」

マジレッド「どうなってんだよ！？」

ドグラ「キャハハハ！！行きなビッパー達！！」

ドグラはビッパー軍団を放った。

マジレッド「何だこいつら！？」

ミント「多すぎるー！！」

マジグリーン「こうなったら2人共！！」

マジピンク「うんー！！」

マジレンジャーはマジフォンで呪文を唱えた。

「マジ・マジ・マジ・マジ・マジローー！！」

その呪文でマジレンジャーはレジェンドマジレンジャーになった。

レジェンドマジレッド「レジェンドファイヤー!!」

レジェンドマジピンク「レジェンドストーム!!」

レジェンドマジグリーン「レジェンドグランド!!」

ビッパー達は一掃したがドグラにはびくともしなかった。

ドグラ「キャハハハ!!力の無駄使い!!」

ドグラは双剣を取り出し一同を斬りつけた。

マジレンジャー「うわあああ!!」

ミント&amp;レモネード「きゃああああ!!」

ドグラ「キャハハハ!!良い悲鳴だ!!私にもっと悲鳴を聞かせてくれ!!」

ミント「うう、どうして攻撃が効かないの?」

レモネード「あの2人は何か知ってるんじゃない?」

ドグラ「キャハハハ!!私が説明するよ!!私の体は視界に入ったものの特徴を瞬時に理解し、耐性作ってしまうのだ!!」

そしてドグラは突然姿を消した。

レジェンドマジレッド「どこに行き・・・うわあ!!」

マジレッドはいきなり何かに斬りつけられた。

ミント「どうしたの・・・きゃあ!!」

レモネード「ミント!!・・・きゃあ!!」

レジェンドマジグリーン「どうなってんだよ!?!・・・うわあ!!」

レジェンドマジピンク「お兄ちゃん!?!・・・きゃあ!!」

ドグラ「キャハハハ!!私は物質の影に入る事もできるんだ!!」

レジェンドマジピンク「そんな・・・」

レジェンドマジグリーン「どうすれば・・・」

ミント「あきらめないわ!!」

レモネード「ここで負けるわけにはいかないんです!!」

2人はドグラに攻撃するが簡単に交わされ、

ドグラ「あんたら目障りねえ、元の空間に帰りなさい。」

ドグラはワームホールを作り出し、2人を投げ飛ばした。

「きゃあああああ!!」

レジェンドマジレッド「2人共!!」

ドグラ「キャハハハ!!キャハハハ!!」

つづく

第22話 最悪の怪人〜マジ・マジ・マジ・マジ・マジ〜（後書き）

次回、翼の狙いがあかされる!!

## 第23話 本当の魔法〜マージ・ゴル・ゴルマジーネ〜

翼が何か考えながら歩いていた。

翼「・・・なるほど・・・じゃあ・・・ん？」

翼は目の前の光景に目を疑った。

そこには血だらけで互いの体を支えながら歩いているこまちとつらがいた。

翼「おい！！どうしたんだよ！！」

こまち「はあはあ・・・」

つらら「つ・・・ばさ・・・さん」

2人はとうとう倒れてしまった。

翼「おい！！」

・・・

こまち「・・・ん、ん・・・ここは？」

翼「気がついたか。」

こまち「あら？翼さん？」

つらら「・・・あれ？ここは？それに翼さん。」



2人は翼がいる事に驚いた。

翼「じゃあ、俺はここで。」

こまち「なんでなんですか？」

翼「？」

こまち「私気づいてましたよ、なんであんな近くにいたのに一緒に来なかったんですか!？」

こまちは翼に怒鳴りつけた。

翼「俺はもうあんな苦しい思いはまっぴらなんだ、何度も・・・」

その時、うらはは翼の頬を叩いた。

翼「なにすんだ!！」

うらは「最低よ・・・あの人はあなたの大切な・・・たった一つの家族じゃないですか!？私にはお父さんしかいない・・・お母さんはもう死んじゃった、家族がいるのに見捨てて・・・最低よ!！」

うらはは涙を流しながら家を出て行った。

こまち「うららさん!！」

こまちはうららのあとを追う。

翼「・・・もう少しだけ時間をくれ、もう少しだけ・・・」

・・・

ドグラ「キャハハハ！！笑える！！みんな捕まってやんの！！」

魁「はあ、捕まっちゃった・・・腹減った。」

芳香「この状況で良くそんな事言えるわね。」

蒔人「ははははっ！！魁はそれでこそ魁だ！！」

ドグラ「キャハハハ！！なんか怖がつてる自分ごまかしてる！！」

・・・

うらら「翼さんにはもう頼らない！！私達だけでなんとかしましょ  
う！！」

こまち「・・・そうね、私達しかできる人はいないもんね。」

うららとこまちはあの空間へ行くための方法を探した。

うらら「魔法じゃないと行けないですね？」

こまち「ん、私が見た映画では作ったロボットの腕を光速以上の  
スピードでぐるぐる回して次元をねじらせて別世界に行くって方法  
があったわ？」

.....

我夢「ハックション!!」

アスカ「どうした我夢？」

ダイゴ「風邪？」

我夢「いや、わかんない（噂されてるのかな?）。」

.....

うらら「ロボットはともかく速くするっていうのは良いですね。」

こまち「でも、どうすれば・・・。」

その時、マージフォンが足下に落ちてきた。

うらら「これは・・・マジレンジャーが使ってたケータイ?」

こまち「これを使えば、別次元にいけるかも!!」

うらら（でも誰が・・・まさかね。）

こまち「うららさん?」

うらら「え!?!いや、なんでもないです!!行きましょう。」

マージフォンのダイヤルに印がついていた、ダイヤルを押すと光出しこまちとうらは次元のねじれに入った、マージフォンはその場

に落ちた。

こまち&amp・うらら「きゃああー!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

その場に落ちたマージフォンを誰かが拾い上げる・・・翼だった。

翼「そろそろだな。」

・  
・  
・  
・  
・  
・

ドグラ「ねえ、悲鳴上げてよ、つまんないよ。」

魁「もう悲鳴上げる気力ないよ、腹減った。」

「ドグラ!!」

ドグラ「?」

後ろにはキュアミント、レモネードがいた。

ヒカル「2人共!!」

麗「やっぱり来てくれた!」

ドグラ「キャハハハ!!面白〜い!!またやられにきたの?」

ミント「あなたには負けないわ!!」

レモネード「みんなを助けます!!」

ドグラ「私と戦うの? キャハハハ!! 笑える!! いいよ、来なさい!!」

ドグラは双剣を取り出し、その辺の影に隠れた。

レモネード「影に隠れました!!」

ミント「プリキュア・ミントプロテクション!!」

ミントはシールドを張った。

ミント「これならドグラは、この中の影にしか隠れないわ!!」

レモネード「プリキュア・レモネードフラッシュ!!」

レモネードは黄色く輝く蝶をあたり一面に放った。  
しかし

ドグラ「あんたら馬鹿!!? キャハハハ!!」

ドグラはシールドの中で無傷でいた。

ミント「どうして!?!」

レモネード「シールドの中一面に攻撃を放ったのに!?!」

ドグラ「キャハハハ!! まさかあんたら私が影にとけ込んでると思った!?! 私は影の中に入る事が出来るのよ!!」

ミント「そんな・・・」

ドグラ「あんたらは死にな、キャハハハ!!」

ドグラは双剣で2人を斬りつけた。

ミント「きゃああ!!」

レモネード「あああ!!」

ドグラ「キャハハハ!! 終わりよ!!」

ドグラは2人にとどめをさそうとしたその時

???「イエローサンダー!!」

ドグラ「なっ! ぎゃあああああ!!」

突如ドグラに雷が襲う。

ミント「え!？」

レモネード「まさか・・・」

そのまさかである、2人の後ろには変身した翼がいた。

魁「兄ちゃん!」

麗「やっぱり来た!」

蒔人「さすが俺の弟だ！！信じてたぜ！！」

芳香「やった！！」

ヒカル「さすが翼だ！！」

ミント「なんで・・・今さら」

レモネード「同情でもしたんですか？」

マジエロー「すまねえな、こうするしかなかった。」

ミント「どういう事ですか？」

ドグラ「キャハハハ！！・・・ぐふ！！」

ドグラは先ほどの攻撃で相当弱っていた。

レモネード「攻撃が効いてます！？」

蒔人「そうか！奴は翼の姿を見てないから耐性を作れなかったんだ  
！！！！」

ドグラ「馬鹿ね・・・それでも攻撃は・・・一回が限度じゃない。」

ミント「でもなんで今になって？」

マジエロー「お前達は気付いてなかったみたいだけど・・・あいつ、ずっと俺達の家<sup>で</sup>にいたんだぜ？」

芳香「うそ!!」

蒔人「気づかなかった。」

マジイエロー「最初は気のせいかと思ったけど、後で確信に変わった。」

.....

ヒカル「まずは場所を変えよう。」

家の中・・・

ドグラ「キャハハハ!!場所変えちゃったか・・・でもいいや、まだチャンスはあるし、キャハハハ!!」

翼「やはりか・・・」

.....

翼は別の部屋でドグラを偵察していたのだ。

マジイエロー「奴が俺の事を忘れるまで待ってたんだ、長くなってすまねえな。」

レモネード「じゃあ、翼さんを叩いたのは・・・」

マジイエロー「気にするな。」



ドグラ「キャハハハ！でも貴様の姿はもう見た！耐性を作ったぞ！」

マジイエロー「どうかな？」

マジイエローは電撃で魁達を吊している鎖を切った。

魁「さすが兄ちゃん！かんが鋭いねえ。」

芳香「ありがとう」

マジイエロー「だべってないで早く変身しろ。」

小津家は変身した。

「唸る大地のエLEMENT！緑の魔法使い！マジグリーン！！」

「吹きゆく風のエLEMENT！！桃色の魔法使い！マジピンク！！」

「走る雷のエLEMENT！！黄色の魔法使い！マジイエロー！！」

「たゆたう水のエLEMENT！！水色の魔法使い！マジブルー！！」

「輝く太陽のエLEMENT！！天空勇者マジシャイン！！」

「燃える炎のエLEMENT！！赤の魔法使い！マジレッド！！」

「溢れる勇気を魔法に変える！！魔法戦隊！！マジレンジャー！！」

マジレッド「行くぜ！！」

ドグラ「やれ！ービッパードも！ー」マジレンジャーはビッパードに立ち向かう、そこにマジエローとプリキュアの2人が

ミント「自分を捨ててまで家族のために作戦を実行するなんて！」

レモネード「翼さんはすごいです！」

マジエロー「家族は魔法みたいなもんだからな。」

ミント&amp;レモネード「え？」

マジエロー「バカだけどみんなのために全力を尽くす魁の勇氣。」

マジレッド「うおおおおお！ー！」

マジエロー「マイペースだけどいつもムードを盛り上げてくれる芳香姉さんの明るさ。」

マジピンク「いつくぞお」

マジエロー「真面目で家族のために一生懸命働く麗の熱意、それを支えるヒカル。」

マジシャイン「行くぞ麗！」

マジブルー「わかったわ！ー！」

マジエロー「そして何があっても励ましてくれる時人兄さんの優しさ。」

マジグリーン「はははっ！！俺達に不可能はない！！」

マジエロー「それが俺達の力なんだ。」

ミント&amp;レモネード「翼さん。」

その時

マジエロー「！、新しい魔法が！！」

マジレッド「使ってみよう！！」

マジシャイン「行くぞ！」

「マジ・ゴル・ゴルマジネ！！」

つづく

第24話 魔法の力〜プリキュア・マージ・ゴル・ゴジュナ〜（前書き）

マジレンジャーって面白いですね。

## 第24話 魔法の力〜プリキュア・マージ・ゴル・ゴジュナ〜

「マージ・ゴル・ゴルマジーネ!!」

マジレンジャーからは光が放たれ、その光がミントとレモネードに与えられる。

ミント「これは？」

レモネード「マジレンジャーの杖？」

2人の手にはマジレンジャーの使っている杖と少し違う杖が手にあった。

ドグラ「キャハハハ!!馬鹿ね!!私にはあんたらの耐性があるのよ!!」

マジイエロー「だったら試してみるか!!」

マジイエローは杖からイエローサンダーを放った。

ドグラ「一度見た技が通じるとも・・・ぎゃああああ!!」

なんと耐性を作ったはずのドグラはマジイエローの技で苦しみ始めた。

ドグラ「なぜだ!!私には耐性が・・・」

マジイエロー「残念だな、さっきの不意打ちに使った魔法に相手の

能力を抑制させる力をつけといたんだよ。」

マジレッド「まじ!?!」

マジピンク「さすが翼」

ドグラ「くそお!」

マジグリーン「よし!!俺達の力をプリキュアに!!」

マジレンジャーは力をプリキュアに分け与えた。

ミント「すごい力!」

レモネード「これなら奴を!!」

ドグラ「くっ!退散!!」

ドグラは逃げ出そうとしたが

マジレッド「逃がすか!!レッドファイヤー!」

レッドファイヤーでドグラを撃ち落とした。

ドグラ「なんで!なんで私が!?!」

マジレッド「今だ!!」

ミントとレモネードは杖を天に掲げた。

ミント「天空聖者よ!!」

レモネード「我らに魔法の力を!!」

ミント&amp;レモネード「プリキュア・マジ・ゴル・ゴジユ  
ナ!!」

杖をドグラに向けるとプリキュアと魔法の力が合体した光の波動が  
放たれ、ドグラを消滅させた。

ドグラ「そんなあああああ!!」

・・・

魁達は元の空間に戻ってきた。

翼「これで2人は魔法の力を手に入れたわけか。」

こまち「みんなのおかげです。」

うらら「ありがとうございます。」

時人「翼の作戦勝ちだな!」

芳香「ありがとう 翼」

翼「お、おう。」

麗「じゃあみんな、そろそろ戻ろっか。」

ヒカル「そうだね、今後どうするかも決めた方がいいしね。」

魁「今日の晩飯何かな？」

麗「そればっかし。」

.....

???「カヤク、バダグに続いてドグラまでやられるとはな。」

???「やはり奴らを止められるのは私めかと。」

???「チヨイマチ！あんたに任せたらろくな事にならんわ！ここはわいが・・・」

???「落ち着け、ここは・・・ザグド、貴様が行け。」

ザグド「は、ありがたき幸せ。拙者が必ず奴らを仕留めます。」

.....

邪悪なる存在がプリキュアと戦隊を仕留めるために次なるしかくを送り込んでいた。

魁「でも兄ちゃん、なんであの怪人がいるの教えてくれなかったのさ？」

翼「馬鹿、さっき言っただろ？相手を油断させるためだよ、言っただろ、敵を欺くにはまず味方から」って。」



蒔人「だが俺達を利用したのは感心しないな!!」

翼「ぐっ・・・わかった、今日は俺が・・・回転寿司おごるから。」

麗「本当に!？」

ヒカル「この間は食べそこねたからね、今度こそ・・・」

蒔人「さすが俺の弟だ!!」

芳香「イカにタコに・・・」

魁「マグロ、中トロ、大トロ、ネギトロ!」

翼「贅沢言っな!!・・・お前達も来い、はぶくのは良くないからな。」

こまち「え!?!・・・でも・・・」

芳香「遠慮したら損だよ?」

麗「せっかくこの世界に来て魔法の力も手に入れたんだし!」

蒔人「遠慮はいらないぞ!」

翼（なんでお前達が決めてんだよ!!）

こまち「じゃあ、お言葉に甘えて・・・」

うすら「カレーはありますか?」

小津家「寿司屋だよ!？」

つづく

第24話 魔法の力〜プリキュア・マージ・ゴル・ゴジュナ〜（後書き）

次回はなぎさとほのかside

## 第25話 始まりの農家（前書き）

ブルブラックが死んでた事に今更気づいた俺が書きました。

## 第25話 始まりの農家

なぎさとほのかは、別世界に来たのは良いもののどうすればいいかわからなかった。

なぎさ「どうしようか？」

ほのか「当たりは畑が広がっているけれど・・・」

その時、一匹のカエルが飛び出してきた。

なぎさ「ひっ!？」

ほのか「きっ!？」

「ぎゃああああああ!！」

カエルが飛び出してきたせいでなぎさとほのかはバランスを崩し倒れかけた。  
しかし

「???」おっと、大丈夫？」

なぎさ「え!？あつ、ありがとうございます!」

ほのか「助かりました。」

「???」君達見ないね、どこから来たの?」

なぎさ「私達は・・・その・・・」

ほのか「え〜と・・・あれ？」

ほのかは小太りな男の腕についているプレスを見た。

ほのか「あの・・・突然申し訳ないんですけど、鳥の力って知ってますか？」

なぎさ「ちよつとほのか！？何聞いてんの！？」

????「君達・・・もしかしてジェットマンを知ってるのかい？」

なぎさ「ジェットマン！？」

ほのか「まさか、あなたは戦隊の一員ですか！？」

????「君達になら話しても大丈夫そうだな、俺は大石雷太だ！！ここで農家やってるんだ、野菜食べる？」

なぎさ「本当に！？」

ほのか「ちよつとなぎ・・・」

ぐう

ほのか「／／／・・・！！！！！！」

ほのかはお腹を慌てて押さえる。

雷太「ははは、遠慮はいらないよ、はい新鮮な野菜!」

なぎさ「美味しい」なんにも付けてないのに、あまーい!」

ほのか「すごい新鮮なトマトですね!」

雷太「我ながらうまくできたよ。」

???「おーい!!雷太」

野菜を食べる三人の所に青い服の女が走ってきた。

???「あれ?その子達は誰?」

事情説明・・・

???「なるほどね、私は早坂アコ、協力代は五千元ね」

なぎさ「じつ!」

ほのか「五千元!」

2人は思わずトマトを落としてしまった。

雷太「でた、アコの金儲け。」

アコ「冗談冗談」

その時

「ききい!!」

なぎさ「うわ!!何!?!」

「オレタチ『ビッパ』オマエタチタオス。」

突然現れたのはビッパだった。

アコ「あんた達なんかに負けないわ!!」

雷太「よくわからないけど変身だ!!」

「クロスチェンジャー!!!!!!」

すると雷太とアコの体が光り出し姿を変えた。

なぎさ「うおお!!」

ほのか「あの女の人も戦隊!?!」

雷太「イエローオウル!!」

アコ「ブルースワロー!!」

2人はビッパ軍団を次々に倒していき、そしてビッパ軍団を全滅させた。

雷太「何なんだあいつら。」

アコ「とりあえず野菜ちょうだい」



なぎさ（なんとマイペースな・・・）

雷太「女子高生が良く食べるなあ、はい。」

ほのか（しかも高校生！？）

・・・

???「ふふふ、ジェットマンの力・・・拙者が必ず先に手に入れるでござる。」

・・・

なぎさとほのかは雷太とアコと共に雷太が運転する車に乗っていた。

なぎさ「どどこどこ行くんですかあああ!?!」

ほのか「ススススピード出しすぎですうつうつうつ!?!」

雷太「こんなの普通普通!?!」

アコ「やつほ」

なぎさ&ほのか「ひゃああああああ!?!?!?!」

そしてなぎさとほのかはある建物についた。

なぎさ「こ・・・こは?うつ・・・」

ほのか「気持ち悪・・・うぷ!?!」

雷太「わわ！！やりすぎたかな？」

アコ「とりあえず医務室に！！」

何だかんだ落ち着いた2人は雷太達に連れられある部屋に行った。  
そこにはホットミルクを飲んでいる男と、隣にはおしとやかな女、  
そして司令官のような格好をした女がいた。

つづく

## 第25話 始まりの農家（後書き）

次回、ちと悲しい。

第26話 武士の怪人（前書き）

カヤクが普通

バダグが片言野郎

ドグラが常に笑う女

ザグドが武士

うゝん、次はどうしよう？

というわけで意見募集中！！

## 第26話 武士の怪人

ある部屋にはホットミルクを飲んでいる男とその隣に座っているおしとやかな女、そして司令官のような格好をした女がいた。

雷太「おっす！久しぶり！」

アコ「お久々　元気してた？幸せご夫婦さん！」

???「やめろ、からかうな。」

一方の女は赤くなっていた。

なぎさ「アコさん、この人達は？」

アコ「この人達？ほら自己紹介しなさいよ！！」

???「なんだその子達は？」

???「まずは自己紹介しなきゃ、鹿鳴館香です。」

???「天堂竜だ。」

竜はホットミルクをすすりながら話した。

雷太「またホットミルク！？」

アコ「私でもコーヒー飲むわよ、いい加減卒業しなさいよ。」

竜「コーヒーは苦いじゃないか!!」

なぎさ「ホットミルク・・・」

ほのか「私は紅茶かな?」

???「くだらない事で喧嘩しないの!!」

なぎさ「そういえばあなたは?」

???「私は小田切綾、ここ『スカイキャンプ』の責任者よ。」

事情説明・・・

香「それは大変でしたね、どうぞごゆつくり。」

綾「ようするにジェットマンの力を手に入れるためにここに来たのね。」

雷太「俺達はバードニックウェーブを偶然浴びたからジェットマンになったんだ。」

竜「俺は違うけど。」

綾「ただどまたバードニックウェーブを浴びるのは難しいわね、他の方法を探しましょう。」

香「それにビッパっていうのも気になります。」

アコ「じゃあ2つにわかれようよ!、雷太とあたしでこの2人を鍛

えるから幸せご夫婦さんはビッパ―について調べて！」

竜「だからその呼び方やめろ!!」

なぎさ「2人は結婚してるんですね!!」

ほのか「お幸せに。」

香「えっ、あっ・・・」

香はまた赤くなった。

・・・

雷太「よし、まずはこの崖を登ろう。」

なぎさ「ひゃあ!すごい崖・・・」

ほのか「高いわね。」

アコ「どうしたの?行くよ!!」

なぎさ&ほのか「はっ、はい!!」

崖の上・・・

雷太「ふう、着いた!」

なぎさ「痛た、指が・・・」

ほのか「かなり体力使ったわね。」

アコ「でも登れたんだから凄いじゃん!!さあ、次々!!」

なぎさ「・・・思ったんだけど鳥の力って事は空も飛べるんですか？」

ほのか「あつ、私もそれ思ってた。」

アコ「飛べるよ、まあ雷太は飛べそうに見えないよね。」

雷太「どういう事だ!？」

なぎさ「まあまあ。」

ほのか「じゃ、じゃあ次の訓練に。」

???「拙者が手伝ってやろう。」

雷太「誰だ!？」

アコ「何?あの怪人・・・」

なぎさ「侍みたい。」

ほのか「気をつけて刀を持ってるわ!!」

???「拙者はザグド・・・お命頂戴!!」

謎の怪人・ザグドは刀を抜き4人に切りかかる。



「クロスチェンジャー!!」

「デュアル・オーロラウェーブ!!」

4人は変身し、刀をよける。

ザグド「拙者の太刀筋を見切るとはさすがでござるな。」

するとザグドはいきなり刀を鞘におさめ、座りはじめた。

ブラック「休む暇なんてない!!」

ブラックはすぐさまザグドに飛びかかる。

ホワイト（あの構え・・・）

ブルースワロー（まさか!!）

イエローオウル「なぎさちゃん!!」

ザグド「見切った!」

ザグドは目にも止まらぬ速さで刀を抜くと同時にブラックを斬りつけた。

ブラック「かはっ!!」

ホワイト「ブラック!!」

ザグド「我が居合いに一点の狂いなし。」

ザグドが放ったのは『居合い切り』、それは刀をしまいじつと相手を待ち、相手が自分の刀が届く範囲に入った時刀を一気に抜き斬りつける技である。

ブルースワロー「まったく見えなかった・・・」

イエローオウル「なんて奴だ・・・あつ、なぎさちゃん!!」

ブラックはかなり深く切られたようだ。

ホワイト「血が！血が止まらない!!」

ブラック「く・・・」

ザグド「さすがはプリキュアでござるな、拙者の居合いをあの一瞬でわずかによけた・・・だがそれでは動けまい・・・今日は一人にしておこう。」

するとザグドは煙玉で煙を出し、姿を消した。

ブルースワロー「ああ、逃げられた!!!!」

イエローオウル「そんな事より今はなぎさちゃんだ!!」

・・・

香「・・・なんとか傷口は塞がりました。」

竜「しかし面倒な奴らに出会ったな。」

ほのか「はい、侍なんて戦った事がなかったから。」

アコ「まずはあの刀の対処法を見つけなきゃね。」

雷太「ああ、あまり奴に近づかない方がいいな。」

ほのか「……あの思っただんですけど、あの写真……」

竜「ん？ああ、バイラムっていう悪の軍団を壊滅させた記念にみんなで撮ったんだ。」

ほのか「あの男の人は？ここにはいないみたいですけど……」

その写真には竜、香、雷太、アコ、綾、そしてここにはいない男が写っていた。

竜「……あいつは結城凱、ブラックコンドルだ。」

ほのか「その方は今どこに？」

アコ「……変なチンピラに刃物を刺されて……死んじゃった。」

ほのか「!!!!!!ごっつ、ごめんなさい!!!私、知らなくて……」

雷太「大丈夫だよ、もう悲しくはないから。」

香「私達は凱さんの分も頑張る……それだけです。」

ほか「・・・・」

しかし一同は知らなかった、その後信じられない奇跡が起こる事を・

つづく

## 第26話 武士の怪人（後書き）

ターザン「結城か、懐かしい名前だぜ。」

丈二「呼んだか？」

ターザン「あれ？あなたが来ちゃったの？結城丈二さん。」

丈二「ライダーの中で不満を持つてる奴がいるんだ、出させてやってくれ。」

ターザン「ああ、あのパンツの・・・わかりました、考えます。」

丈二「頼んだぞ。」

## 第27話 蘇る鳥人（前書き）

ジェット！！ジェット！！ジェットマン！！

レッツゴー飛び出せ！！

ジェット！！ジェット！！ジェットマン！！

鳥人戦隊！！ジェーットマン！！

めっちゃ歌格好良い！！

## 第27話 蘇る鳥人

ザグドが現れて2日後・・・

なぎさ「うゝ、痛たた・・・」

香「まだ動かない方がいいですよ？」

なぎさ「大丈夫です・・・はあゝ、ついてないなゝ。」

すると部屋にほのかが入ってきた。

ほのか「なぎさ！、大丈夫？」

なぎさ「なんとか・・・ね。」

香「まだもう少し休んでいてください、無理は禁物です。」

なぎさはまた布団に潜り込む。

・・・

竜「ビッパーについてだが分かった事がいくつかあった。」

雷太「一体何なんだ？奴らは。」

竜「どうやら『メデム』とかいう組織の戦闘員らしい、メデムは今まで壊滅していった組織を復活させて世界征服をたくらんでる。」

アコ「よくそこまで調べたわね。」

ほのか「それでそのメデムのアジトは？」

竜「わからない、どうやら奴らは『世界の架け橋』ってのを使って別世界から来てるらしい。」

アコ（また面倒な設定にして・・・）

ターザン「すぁーせん。」

香「とりあえずそのメデムという組織のアジトを探しましょう。」

???「そうはせん。」

ほのか「！！！！、ザグド！！！！」

竜「何でここが！？」

ザグド「拙者は武士、場所を探り当てるなど容易い事。」

香「ほのかさんは下がってください！！」

ほのか「あつ、はい！！！！」

「クロスチエンジャー！！！！」

竜「レッドホーク！！！！」

香「ホワイトスワン！！！！」



ブルースワロー「いくよ!!」

イエローオウル「次こそ!!」

ザグド「拙者の技、受けるがいい。」

ザグドは刀を抜き、構える。  
刀から異様なオーラが走る。

レッドホーク「まずい!みんな確実にかわせ!!」

ザグド「秘技・竜王舞塵!!!!」

ザグドの刀からは凄まじい力を帯びた龍が放たれた。

ホワイトスワン「かわすわよ!!」

ジェットマンは龍から離れるが、龍はまるで舞い踊るように動き、  
ジェットマンを襲う。

ジェットマン「うわああああ!!」

ザグド「・・・次はお主の番だ、死にたくなければそこをどけ。」

ほのか「くっ・・・（この部屋にはなぎさが・・・）絶対どかない  
!!」

ザグド「なら力ずくだ。」

ザグドはほのかの肩に刀を置く。

ほのか「あ!！」

ザグド「もう一度問う・・・そこをどかないのか？」

ほのかの足はガクガクに震えていた。

ほのか「ど・・・どかな・・・」

ザグド「ならさらばだ。」

ほのか「くっ!？」

ほのかを刀で斬りつけようとしたとき

なぎさ「止めて!！」

ザグド「!!!！」

ほのか「なぎさ!！」

ホワイトスワン「まだ動いちゃ駄目です。」

なぎさ「くっ・・・うっ!!!！」

なぎさは急に動き叫んだために傷口が開いてしまった。

なぎさ「はあはあ・・・もう・・・みんなを・・・傷つけさせない・・・」

ほのか「なぎさ!!」

ザグド「・・・仲間か・・・拙者も・・・そのようなものが欲しかった・・・。」

レッドホーク「？」

ほのか「え？」

ザグド「だが時既に遅し・・・覚悟!!」

ザグドは刀を振り上げる。

ほのか「!？」

なぎさ「駄目!!ほのか!!」

その時、なぎさとほのかの体から白と黒の光が放たれた。

ほのか「なっ、何!？」

その2つの光は1つになり、徐々に人の形に姿を変えていった。

「???」その子達に感謝するんだなあ、やっとお前達と戦えるぜ。」

イエローオウル「あっ、あああ!!」

ブルースワロー「う・・・うそ!!」

ホワイトスワン「あなたは!？」

レッドホーク「凱!!!」

そこにはかつて命を落としたはずのジェットマンの仲間、結城凱がいた。

凱「プリキュアの仲間を大切に思う思いが、俺をここに呼んだんだ。」

先ほど2人から出た光は目には見えない凱の魂に宿り、肉体を作り上げたのだ。

ザグド「お主がもう一人のジェットマンか。」

凱「その通り、クロスチェンジャー!!」

凱の体は光輝いた。

凱「ブラックコンドル!!」

なぎさ「はあはあ・・・」

ブラックコンドル「おっとそうだったあ、2人に俺たちの必殺技を放つんだ!!」

レッドホーク「はっ、はあ!？」

ホワイトスワン「何言ってるんですか!？」

ブラックコンドル「頼む、急いでくれ!!」

ブルースワロー「それあの2人は助かるのね!? もし何かあったら承知しないよ!!」

イエローオウル「俺は凱にかけてみる!!」

レッドホーク「くそお!! こうなったら・・・」

ホワイトスワン「やけくそです!!」

「バードボンバー!!」

ジェットマンは必殺技・バードボンバーを2人に放った。

なぎさ&ほのか「きゃあああ!!・・・って、あれ?」

バードボンバーは2人に直撃したが2人は無傷、それどころか2人から凄まじい力が溢れ出した。

つづく

## 第27話 蘇る鳥人（後書き）

さてさて鳥の力とは一体!?

ターザン「さあ、盛り上がってきましたね、ジェットマン編!」

???「おい。」

ターザン「ん?・・・んでジェットマン編の次は確か太陽の力だっけな?それに・・・」

???「おい!!」

ターザン「何ですか土さん!!今大事な話を!!」

土「お前、『世界の架け橋』って言葉出したな?」

ターザン「は?それが?」

土「『世界の架け橋』と言えばディケイドだ、また俺を面倒な事に巻き込むつもりなのか?」

ターザン「ギクッ・・・違いますよ。」

土「・・・教えないつもりか?」

ターザン「何の事ですか!?!」

土「お前を・・・破壊してやる!!」

ターザン「ぎゃあああああー!!」

第28話 鳥人と真相（前書き）

ちと悲しい



## 第28話 鳥人と真相

なぎさ「何？この力・・・傷も治ってる！？」

ほのか「この力・・・まさか鳥人の！？」

ザグド（ほお。）

ブラックコンドル「成功だ。」

イエローオウル「なるほど、ジェットマンの力がプリキュアの力に共鳴したのか。」

ブルースワロー「今のあの2人ならジェットマンに変身できるかも！！」

レッドホーク「あっ！！見ろ、2人の腕！！」

なぎさとほのかの腕にはジェットマンと同じクロスチェンジャーが付いていた。

ザグド「お主ら、変身しろ。」

なぎさ「え？自分から！？」

ほのか「何でもいいからやろうなぎさ！！」

なぎさ「あっ、うん！！」

2人はクロスチェンジャーを使った。

「デュアル・クロス・ウェーブ!!」

するとなぎさは少し違う黒い衣装に

ほのかは白い衣装に変わり、背中には鮮やかに輝く翼が生えていた。

なぎさ「光の鳥人!! キュアクロウ!!」

ほのか「光の鳥人!! キュアフエニックス!!」

「2人はプリキュア・クロスバード!!」

ホワイトスワン「凄いです!!」

レッドホーク「新たな鳥人の誕生だ!!」

ザグド「いざ勝負!!」

キュアクロウ「ブラッククロス!!」

キュアフエニックス「ホワイトクロス!!」

2人は黒と白の双剣を出した。

ザグド「ならば拙者も!!」

ザグドは二刀流になりプリキュアに立ち向かう。

キュアクロウ「はああああ!!」

キュアフエニックス「やあああああ!!」

ザグド「ふっ! せい!!」

力はほぼ互角だった。

ザグド「やるな・・・奥義! 双龍舞塵!!」

ザグドの刀から二体の龍が放たれた。

キュアクロウ「よし、クロウサンダー!!」

キュアフエニックス「フェニックスサンダー!!」

2人の双剣は雷となりひとつになった。

「プリキュア・クロス・ボンバー!!」

そして雷は二体の鳥となり、龍を襲う。

ザグド「くっ、うお!!」

キュアクロウ「くっ、・・・はあああ!!」

キュアフエニックス「負けない!!」

二体の鳥は龍を消滅させ、ザグドを襲った。

ザグド「敵ながら・・・あっぱれで・・・」

・・・

ザグドはかるうじて生きていた。

ザグド「拙者の・・・敗北だ。」

竜「教えてくれ、あんたさつき・・・仲間が欲しかったて・・・」

なぎさ「私も気になる。」

ザグド「お主らになら・・・話しても・・・よかるう。」

・・・時は江戸にさかのぼる。・・・

ザグド（拙者はかつて・・・花咲伝吉という・・・人間・・・侍だった。）

花咲伝吉・・・江戸では名の知れた役人である。

伝吉「こら！！家族が心配してるぞ、早く帰りなさい！！」

伝吉「金に困ったらいつでも来なさい、飯ぐらいなら食わせてやる。」

江戸の町民は彼を『江戸の優しき仏』と呼んだ。

しかし、ある日伝吉が罪の無い町民を刀で殺したという瓦版が町に出回った。

伝吉にはまったく身に覚えがなく否定したが瓦版の力には叶わず、伝吉は『江戸の優しき仏』から『江戸の悪魔』と呼ばれるようになった。

った。

そんなある日、伝吉は自分に無実の罪を被せた犯人を見つけた。それは奉行所の同僚達だった。

伝吉「なぜあんなでたらめを!!」

同僚1「いつも町民に優しくして・・・」

同僚2「良い子ぶってんじゃねえよ。」

その同僚2人は酒を飲んで是人に手を上げるどうしようもない役人だった。

そして伝吉は一時的に意識を無くした、気がついた時には同僚2人が血まみれになって倒れており、手には血まみれの刀が握ってあった。

伝吉の行為は瞬く間に町に広がった。

伝吉は必死に事情を説明したが『江戸の悪魔』と呼ばれる男の言うことには誰も耳をかたむけず一週間後、伝吉は処刑された。

・・・

ザグド「そして拙者の魂は成仏されず・・・現代までさ迷い、奴に拾われ・・・この肉体を手に入れた。」

なぎさ「・・・ひどい・・・」

アコ「その肉体を作り上げた奴の名前は？」

ザグド「拙者にも・・・彼らにも・・・わからない。」

竜「彼ら？」

ザグドは他世界に行つて倒された怪人についても話した。

カヤクは愛する人に裏切られ、復讐の力を求める余り身を落とし

バダグは家族に虐待され精神が安定せずその傷で死に

ドグラはいつも笑顔がたえない美しい少女だったがその美しさあまり他の女にいじめを受け精神が狂い、笑つたまま身を落とした。

しかし彼らの魂は成仏されず現代までさ迷い、邪悪な存在に拾われ体を与えられメデムの幹部として身を置いている。

ザグド「拙者にも・・・信じられる・・・友がいれば・・・お主らを・・・傷つける事は・・・」

その時なぎさとほのかはザグドの手を握りしめた。

なぎさ「あなたは・・・私達にその事を話して、自分の間違いに気づいてくれた。」

ほのか「あなたはもう・・・友達・・・仲間よ。」

ザグド「！！！！・・・拙者を・・・許してくれるのか？」

竜「当たり前だ。」

香「あなたをスカイキャンプのメンバーに認定してもらつように綾さんに言っておきます。」

ザグド「・・・おお・・・そうか・・・これが・・・嬉しいという・・・思いだった。」

肉体を作られた時、感情を消されるのだがザグドはその感情を取り戻した。

そしてザグドの体は砂になり始めた。

なぎさ「ザグ・・・伝吉さん!!」

ほのか「私達は・・・ずっと仲間です。」

アコ「私達の事忘れないでよ」

雷太「ちゃんと新鮮な野菜届けるからね!!」

凱「忘れたら承知しないからな、後輩。」

伝吉「・・・あ・・・り・・・が・・・とう・・・」

ザグド、いや伝吉の体は砂となり崩れた。伝吉はスカイキャンプの新米社員として登録されその砂となった体はスカイキャンプの近くの花畑に埋葬された。

その辺りにはいつそう美しい花が咲き誇ったという。

つづく

第28話 鳥人と真相（後書き）

次回からひかり&いつき編



## 第29話 命の星（前書き）

「??? あれえ？メダルどっかいつちやった。」

「??? はあ！？ちよつとお前に預けてたらこれかあ！？」

「??? ごめんごめん、でもカマキリのメダルはあるから・・・ね」

「??? 三枚もなくしたなあ！？」

「??? やめてやめて！！あああ！！誰か拾っててくれええ！！！」

## 第29話 命の星

なぎさ「うわあ、綺麗な花!!」

ほのか「伝吉さんの優しさね。」

なぎさとほのかが花畑の中を歩いているとなぎさが何かを見つけた。

なぎさ「あれ？ほのか、これ何だろう？鳥の絵が書いてあるけど。」

ほのか「これは鷹の絵ね、メダルのようにけど・・・」

なぎさ「鷹のメダル？」

・・・ひかり&いつきside

いつき「広がる緑！太陽サンサン！！気持ち良いなあ!!」

ひかり「いつきさんは太陽が好き何ですね。」

いつき「うん、僕は光り輝く太陽が一番好きだよ。」

そこに1人の男がウロウロしてるのを見つけた。

???「ひよひよ、迷ってしまった。」

いつき「この世界の人かな？」

ひかり「行ってみましょう。」



ひかり「あなたが!？」

朝夫「落ち着け!!!・・・まず事情を、ん？」

朝夫は何かに気付いた、メデム戦闘員・ビッパーがこちらに向かっ  
てきていた。

いつき「何あれ!？」

ひかり「敵みたいです!！」

朝夫「2人は下がってて。」

朝夫は腕のブレスを使い姿を変えた。

朝夫「バルパンサー!！」

バルパンサーは豹のごとくビッパーに立ち向かう。

いつき「はっ、はやい!！」

ひかり「本物の豹みたいです!！」

バルパンサーは一気にビッパーを倒してしまった。

バルパンサーは変身を解いた。

朝夫「とりあえず事情を聞こうか?みんな呼ぶから。」

いつき「あっ、はい。」

ひかり「よろしく願いします。」

・・・というわけで集合

???「なんだか唐突だな、飛羽高之だ。」

???「俺は鮫島欣也だぜ!!」

・・・・・・

???「うむ、今回は奴に行かせよう、親に森に捨てられ獣に食い殺された不幸な男・・・ゼバダ。」

ゼバダ「かしこまりました、私がきっちり任務を遂行いたします。」

邪悪な存在は口調が礼儀正しい怪人・ゼバダをサンバルカンの世界に送り込んだ。

???「プリキュア・・・スーパー戦隊・・・必ずや全員始末してみせる、はははは。」

・・・・・・

欣也「ふーん、プリキュアかあ。」

高之「まあ、世界を守るって事なら放っておけないよな。」

朝夫「じゃあまず実力を試すか。」

いつき「はい！！よろしくお願いします！！」

ひかり「私は防御専門なので防御力を高めます！！」

・・・修行場

辺りに太鼓の音が鳴り響く。

高之「よし、変身しよう。」

三人はブレスを使い姿を変えた。

高之「バルイーグル！！」

欣也「バルシャーク！！！！」

バルパンサー「バルパンサー！！！！！！」

「輝け！！太陽戦隊！！サンバルカン！！」

いつき「プリキュア・オープンマイハート！！」

ひかり「ルミナス！！シャイニング・ストリーム！！」

2人は光に包まれる。

「陽の光浴びる一輪の花！！キュアサンシャイン！！」

「輝く命！シャイニールミナス！！光の心と光の意思！！全てを一つにするために！！」

バルイーグル「行くぞ!!!」

バルイーグルはキュアサンシャインに蹴りを仕掛け、バルシャークは鯨のように動き高く飛び上がり蹴りを仕掛ける。

サンシャイン「ふっ!はっ!」

サンシャインはイーグルとシャークの蹴りを受け止める。

バルパンサー「甘い!!」

バルパンサーはサンシャインがイーグルとシャークの攻撃に気をひいている間にルミナスに攻撃を仕掛ける。

パンサー「おりゃ!!」

ルミナス「させません!!」

ルミナスはバルパンサーの攻撃をバリヤーで防いだ。

バルパンサー「シャシャシャ!!!!!!」

しかしバルパンサーは豹のように素早く攻撃を連打しバリヤーに攻撃を加える。

ルミナス「くっ!うつ!!!!」

ルミナスは何とか攻撃に耐えるが

バルイーグル「はっ！！やああ！！」

バルシャーク「ていやあああ！！」

バルイーグルとシャークはいきなり攻撃の対象をサンシャインからルミナスに変えた。

サンシャイン「なっ！？」

ルミナスのバリアーに三人の連打攻撃を受けついにバリアーは砕けた。

ルミナス「そんな！？」

バルパンサー「ほいやああ！！」

バルパンサーはルミナスに殴りかかるが顔に当たる直前に手を止めた。

サンシャイン「はあああ！！」

サンシャインはバルパンサーに攻撃を仕掛けるがバルイーグルとシャークに受け止められた。

サンシャインは距離をとるが気付いた時にはバルシャークがいなかった。

サンシャイン「どこ！？」

すると後ろにあった湖からバルシャークが飛び出し、サンシャインを湖に引きずり込んだ。



サンシャイン「きゃあー!!」

引きずり込まれたサンシャインは湖でバルシャークに攻撃を仕掛けようとするが水の中ではうまく動けない。

サンシャイン「ぐっ、がはっ!!」

サンシャインは息がなくなり湖から出ようとするがバルシャークにつかまれ出ようにも出られない。

サンシャイン「ぐっ!!んんんん!!!!!!!!!!」

サンシャインは何とかバルシャークを振りほどき湖から飛び出るが空にはバルイーグルが待ち構えていた。

バルイーグル「とりやああああ!!!!!!!!」

サンシャインはバルイーグルの攻撃を受け地面に叩きつけられる。

サンシャイン「きゃあー!!くっ、この・・・」

しかしサンシャインが上を見た時にはバルシャークが湖から高く飛び上がった状態にありサンシャインに向かって殴りかかる。

バルシャーク「とおおおおお!!」

サンシャイン「きゃあー!!」

しかしバルシャークは攻撃を当たる瞬間に止めた。

ルミナス「はあはあ・・・」

サンシャイン「はあはあ・・・」

完敗だった、サンバルカンの前にプリキュアは手も足もでなかった。

バルイーグル「なるほど、特訓のしがいがあるな。」

バルシャーク「だね。」

バルパンサー「よし、今日はここまでかな？」

ルミナス「えっ？」

サンシャイン「あっ、はあ。」

2人はまさかあの三人がこれほどの実力があるとは思わなかった。

つづく

第29話 命の星（後書き）

次回、またバトル!!

### 第30話 少年の叫び（前書き）

フィリップ「翔太郎、依頼がきているよ。」

翔太郎「あん？誰だ依頼主は？」

フィリップ「それが分からないんだ、手紙にはこう書いている。」

「彼女達が危機に陥っている、助けてあげてほしい。」

翔太郎「彼女・・・まさかあいつらか？」

フィリップ「おそらく、差出人はともかく・・・どうするんだい翔太郎？」

翔太郎「行くに決まってるだろう、きつとおやっさんそうしたさ。」

フィリップ「それもそうだね。」

翔太郎「よし、待ってるよ。」

### 第30話 少年の叫び

いつきとひかりは太陽戦隊サンバルカンの高之、欣也、朝夫に特訓を受けていた。

いつき「シャシャシャシャ!!」

朝夫「頑張れ!!もう少しで500連打だ!!」

ひかり「はあ、ひいひい・・・」

欣也「頑張れええ!!」

高之（でもまだ90連打目だぞ?）

1時間後・・・

朝夫「ほい、特製野菜ジュース!!」

いつき「ぬおお!!苦い・・・けど疲れが取れるや。」

ひかり「匂いでだめ・・・です。」

欣也「まあ、100%野菜だからな。」

高之「ゴーヤにトマト、三つ葉にピーマンだもん・・・」

その時、謎の怪人が現れた。  
ゼバダだった。

ゼバダ「ほほほほ、あなた方がプリキュアとサンバルカンですね。」

欣也「なんだ！？あの怪人！？」

いつき「変身しなきゃ！！」

ひかり「は・・・い」

しかしひかりは倒れてしまった。

高之「ひかり！？」

ゼバダ「どうやら修行のせいで疲れ果てたようですね。」

するとゼバダは見えない速さで走りひかりを持ち上げ走り去った。

朝夫「あつ！！ひかりを返せ！！」

ゼバダ「ほほほほ、では私の居場所を突き止めてください。」

いつき「ひかり！！」

・・・

ゼバダ「ほほほほ、1人人質に取っておけば十分・・・」

「えええええん！！！！ええええん！！！！」

「本当にうるさいわね！！」

「黙れ!!この!!」

「ええええん!!ええええん!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

ゼバダの脳内に何かが鳴り響いた。

ゼバダ「はっ!!何でしょう、今は・・・」

ひかり「う・・・ん？」

ひかりが目を覚ました。

ゼバダ「ついに目を覚ましましたね。」

ひかり「あなたは!？」

ゼバダ「私はゼバダ・・・あなたには人質になってもりました。」

ひかり「えっ、どうすれば・・・」

ゼバダ「ほほほ、悩みなさい、悩みなさ・・・!？」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「この!!この!!これでもわからないのかい!？」

「いい加減泣き止め!!ああイライラする!!」

「ええええん！！ええええん！！」

・・・・・・・・

ひかり「？、どうかしました？」

ゼバダ「いえ・・・さっきから変な声が頭に・・・少し外に出てきます。」

ゼバダは外に出た。

ひかり「・・・今のうちに脱出しなきゃ・・・」

その時、辺りは奇妙な風景に包まれた。

???「また新たな戦いに巻き込まれてしまいましたね。」

ひかり「あっ！！渡さん！！」

そこには仮面ライダーキバ・紅渡がいた。

渡「お久しぶりです、ひかりさん。」

ひかり「どうしたんですか！？」

渡「話さなければいけない事があります。」

ひかり「なんですか？」



渡「彼の名はゼバダ、メデムという組織の幹部の1人です。」

ひかり「ではまだ他に幹部が・・・」

渡「はい、しかし他の幹部は他の世界のプリキュアとスーパー戦隊に大体は倒されています。」

ひかり「なぎささん達が・・・よかった。」

渡「しかし、彼らの中ではまだ1人しか浄化できていません。」

ひかり「どういう事ですか？」

渡「メデムの幹部は元々人間だったんです。」

ひかり「じゃあなんで怪人に？」

渡は彼らが人間であった時の出来事を話した。

・・・

「あの子はもう邪魔よ、捨てましょう。」

「そうだな、俺たちの気に入る子供に育たなかったあいつが悪い、この近くの森に捨てよう。」

少年はあまりにも無責任な親にゴミのように捨てられた。

「ええええん、ええええん！！！」

そして少年は森に潜む獣に食い殺された。

.....

ひかり「そんな、ひどい。」

渡「どうか彼をあなたがたの力で浄化させてあげてください。」

そして元の風景に戻った。

ひかり「.....どうにかしないと。」

そこにゼバダが戻ってきた。

ゼバダ「おや？どうされました？人質だというのに.....」

ひかり「あの.....私にできる事がありますか？」

ゼバダ「はい？」

つづく

### 第30話 少年の叫び（後書き）

史郎「先輩、士から伝言です。」

猛「士から？」

史郎「はい、どうやら彼女達が危機に陥っているようです。」

隼人「彼女達が・・・どうする本郷？」

敬介「俺は行きます、大事な仲間ですから。」

大介「俺もだ。」

茂「悩む必要もないな。」

洋「ライダーの力が必要とされる限り、」

一也「俺達はどこでも駆けつける。」

良「先輩、どうするんですか？」

光太郎「聞く必要もないじゃないですか。」

真「もう決まってるですね？」

勝「仮面ライダーは、」

耕司「人々のために戦うんだ。」

猛「当たり前だ、行くぞ!!!」

### 第31話 暴走（前書き）

雄介「これ以上、誰かの涙は見たくない……。」

翔一「未来が奴の手の中にあるなら、俺たちが奪い返す!!」

真司「俺たちの願いは……。」

巧「世界を守る事……。俺の、いや俺たちの手で!!」

一真「みんなのために俺たちは戦う!!」

ヒビキ「さてと、行きますかあ。」

総司「俺がいれば不可能はない。」

良太郎「行くよ、みんな。」

### 第31話 暴走

ひかりはゼバダの役に立ちたいと言い出し、ゼバダは少し戸惑った。

ゼバダ「何です？いきなり・・・」

さすがにさっきの事は話せないといひかりは思い

ひかり「いやあ、なんかゼバダさん口調な優しいからもしかしたら根は優しいんじゃないかなあって思って・・・」

ゼバダ「優・・・し・・・い？」

ゼバダは何か拒否反応を抱きはじめた。

ゼバダ「優しい！・・・うそだ・・・そんなのうそだ！！」

ひかり「ゼバダさん！？」

ゼバダ「うそだうそだ！！そんなのうそだああああ！！！！！！！」

・・・

ひかり「ゼバダさん・・・大丈夫ですか？」

ゼバダ「す・・・すみません、取り乱してしまいましたね・・・」

ひかり「さっきも言いましたけど、私にできる事があれば言うてください。」

ゼバダ「……では……」

???「ひかり!!」

するとそこにいつき達が駆けつける。

ゼバダ「あなた達……どうしてここに？」

朝夫「一匹の雑魚とつかまえて、場所を聞き出したんだよ。」

高之「覚悟しろ!!」

ひかり「待ってください!!」

欣也「!!!!」

ひかりはゼバダをかばった。

いつき「ひかり!! どうして……」

ひかり「お願いです!!……少しだけ時間をください!!」

ゼバダ「ひかりさん……」

しかし4人は変身し、こう言った。

サンシャイン「なにがあつたかわからないけど……そいつを倒さなきゃいけない!!」

バルイーグル「それでもそいつをかばうなら、覚悟しろ!!」

ひかり「そんな・・・」

ゼバダ「おどきください、ひかりさん・・・私が彼らを消します。」

ひかり「ゼバダさん!!」

ゼバダと4人は戦いをはじめてしまった。

サンシャイン「はあ!!」

バルパンサー「たあ!!」

ゼバダ「ふふふ、この程度ですか。」

バルイーグル「くそ!!」

バルシャーク「すばしっこい奴だ!!」

ひかり「みなさん!! やめて・・・やめてください!!」

しかし、彼らは攻撃の手を休める事なく戦いを続ける。

サンシャイン「やあああ!!」

ゼバダ「くつ、やりますね・・・おや?他の三人は?」

「バルカンシュート!!」



ゼバダ「何!!」

ゼバダは不意にサンバルカンの必殺技をくらった。

ゼバダ「あ……う……。」「

ゼバダはその場に倒れ動かなくなった。

ひかり「い……や……。」「

サンシャイン「ひか……り?」

ひかり「いやああああああ!!!!!!!!!!」

突如ひかりから闇の力が放たれた。

サンバルカン「うわあああ!!」

サンシャイン「きゃあ!!ひかり!!」

そこにいたのは変身したひかりの姿があつたが通常のシャイニールミナスの姿ではなく衣装も髪も黒く、瞳が赤くなっていた。

ひかり「暗黒の命……ダークライトルミナス、心と意思……全てを闇で包むために。」

ひかりは事情を知らないとはいえ4人がゼバダを攻撃した事に強い怒りを生み出し、暗黒の力を手に入れてしまった。

バルシャーク「ひかりちゃん!?!」

ゼバダ「おや？・・・その姿・・・」

ルミナス「生きておったかゼバダよ、我もお前に協力しよう。」

サンシャイン「ルミナス！？何言って・・・」

しかしルミナスは一瞬消えたかと思うとサンバルカンを一掃していた。

サンバルカン「うわああああ！！」

あまりのダメージに三人は元の姿に戻ってしまった。

ルミナス「弱い者達よ・・・次はそなたが犠牲になる番だ。」

サンシャイン「させない、あなたの闇・・・私の光で照らしてみせる。」

するとサンシャインはシャイニータンバリンを取り出した。

サンシャイン「花よ輝け！！プリキュア・ゴールド・フォルテウェーブー！！」

サンシャインは最強の必殺技でルミナスの闇を浄化しようとしたが

ルミナス「暗黒よ・・・醜き太陽を葬り去れ、ルミナス・ダーク・ワームホール！！」

ルミナスは巨大な漆黒のワームホールを作り出し、ゴールド・フォ

ルテウェーブを取り込んでしまった。

サンシャイン「そんな!？」

しかし、終わっていなかった。

ワームホールは4人もろとも吸い込もうとする。

高之・欣也・朝夫「わああああ!!！」

サンシャイン「くっ、うわあああ!!！」

4人はワームホールに吸い込まれてしまいワームホールは閉じた。

ゼバダ「なんという力・・・」

ルミナス「もう一度聞く、我がそなたにできる事はないか？先ほどあるように思えたが？」

ゼバダ「・・・いえ、思い違いでした。」

突如暗黒の力を手に入れてしまったひかり、そしてそのルミナスの前に手も足もでなかった4人、はたして太陽の力とは？そしていつきとひかりはその力を手に入れられるのか？

つづく

### 第31話 暴走（後書き）

次回、ラブ&amp;祈里side

14話の光の力 太陽の力に修正。

## 第32話 オーラパワー（前書き）

ラブ&amp;p・祈里編スタート!!

### 第32話 オーラパワー

???「ほお、プリキュアの仲間が我が組織に入ったか。」

ゼバダ「はい、ルミナスです。」

ルミナス「我はプリキュアとスーパー戦隊には強い憎しみがある、手伝いにまいった。」

???「なるほど心強いな、では褒美だ。これを機に頑張ってくれ。」

ゼバダ「虎の絵が書いているメダルですね。」

ルミナス「虎のメダルか・・・」

・・・ラブ&am p・祈里side

ラブ「ブッキー、ここどこだかわかる。」

祈里「わかるわけないじゃん。」

ラブと祈里はいきなり違う世界に来たので道に迷っていた。

祈里「ねえ、ラブ。」

ラブ「ん、何？」

祈里「なんだかラブから・・・なんて言うか、強いオーラを感じるんだけど。」

ラブ「強いオーラ？」

するとそこに1人の男が走ってきた。

???「危ない！！避ける！！」

ラブ&amp;・祈里「え！？」

その時、近くで爆発が起こった。

ラブ&amp;・祈里「きゃあああああ！！」

2人は吹き飛ばされた。

???「まずい！！オーラマスク！！」

その男はプレスを使い光の壁を出現させその壁をくぐり抜け姿を変えた。

「レッドマスク！！」

レッドマスクは素早く落下する2人を受け止めた。

ラブ「あれ？あつ！？」

祈里「戦隊！？」

レッドマスク「え！？まさか君たちは・・・」

その時、ビッパーが現れた。

レッドマスク「メデムの雑魚・ビッパー!!」

ラブと祈里はさっぱりわからなかったが、とりあえず変身した。

「チェインジ!!プリキュア・ビートアップ!!」

ラブと祈里はリンクルンで変身した。

ピーチ「ピンクのハートは愛あるしるし、もぎたてフレッシュ!!  
キュアピーチ!!」

パイン「イエローハートは祈りのしるし、とれたてフレッシュ!!  
キュアパイン!!」

レッドマスクはプリキュアを見て言った。

レッドマスク「やはりプリキュアだったのか!!」

ピーチ「え!?プリキュアを知ってるんですか!?!」

パイン「なんで!?!」

レッドマスク「話は後だ、まずはこいつらを片付けよう。」

三人はビッパーを一掃した。

.....



ラブ「なんとか終わったね。」

祈里「それよりあなたは？なんで私達の事を？」

???「俺はタケルだ、実はさつき・・・」

・・・さつき

タケル「うゝん、平和だなあ。」

タケルは野原で昼寝をしていると何やらバイクに乗った男が現れた。

タケル「誰？あんた。」

吾郎「僕は吾郎、君に伝えなくてはならない事がある。」

その時ビッパーが現れた。

タケル「なんだあ！？」

吾郎「あれはビッパー、新たな悪の組織・メデムの戦闘員だ！！」

タケル「そんな組織が・・・」

吾郎「変身！！」

吾郎は仮面ライダーGに変身した。

タケル「おお！！すごい！！」

G「おそらくこの世界にプリキュアという2人の女の子が来るはずだ！――！」

タケル「プリキュア・・・あんたと俺たちに似て変身する奴らか！――！」

G「そうだ、後は彼女達に聞いてくれ――！」

Gはビッパを一掃し消えた。

・・・・・・

ラブ「吾郎さん来たんだ。」

タケル「じゃあとりあえず仲間の所に連れて行くから、そこで事情を聞かせてくれ。」

祈里「あつ、はい。」

移動中・・・・・・

タケル「さあ着いたぞ――！」

???「あつ、タケル・・・その子達は？」

事情説明中・・・・

タケル「なるほどな、そういえばお前ら名前教えたっけ？」

???「おっとそうだった、俺はケンタだ。」

???「俺はアキラ、よろしくね。」

タケル「あれ？ハルカとモモコは？」

アキラ「出かけてる、後で話とくよ。」

祈里「ありがとうございます。」

ケンタ「気の力は鍛えれば鍛えるほど無限の力を発揮するんだ。」

タケル「でもラブからは既にかんりのオーラを感じるぞ？」

ラブ「え！？」

祈里「じゃあさっき感じた力は・・・」

アキラ「気力だな、鍛えればさらに強力になる。」

祈里「・・・・・・」

ラブ「あれ？どうしたのブッキー？」

祈里「え！？何でもないわ、少し疲れちゃって・・・」

アキラ「じゃあ、確か空き部屋が2つあったな、そこを使ってくれ。」

祈里「はい・・・」

・・・部屋の中

祈里は部屋のベッドに小さく寝転んでいた。

祈里「私には、力がないって・・・事なのかな？」

・・・

タケル「というわけだ。」

そこには2人の女、ハルカとモモコがいた、そして1人の男、光戦隊マスキマンの指揮官・姿三十郎もいた。  
タケルは事情を説明した。

ハルカ「へえ、確かに強いオーラは感じるわね。」

モモコ「とりあえず明日からオーラパワーを高める修行をしましょう。」

三十郎「オーラパワーは人間の体の中に無限に秘められている、誰でも努力すれば手に入れられる。」

アキラ「というわけだ、焦る必要はない。」

ラブと祈里は明日から修行を始めるようだ。

・・・

ラブ「ブッキー、どうしたの？元気ないよ？」

祈里「え！？いや・・・大丈夫よ、心配しないで。（もっと、もっと強い力が・・・ほしい。）」

その夜、ラブは爆睡していたが祈里はなかなか寝れないでいた。

祈里（どうすれば・・・どうすれば・・・）

その時、不気味な声が頭に鳴り響いた。

（強くなりたいか？）

祈里「だっ、誰！？」

（答えろ、強くなりたいか？）

祈里は一瞬戸惑ったが・・・

祈里「強く・・・なりたい。」

（ならこれを使え。）

すると何かが落ちた。

祈里「えっ！これって・・・」

それは以前現れたフィリップから聞いたガイアメモリだった。

（それを使えば誰よりも強くなれる、強くなりたくないのか？）

祈里はガイアメモリには絶対に手を出すなと言われていたが、頭の

中は強くなりたい強くなりたいという欲望に支配され、ガイアメモリを手にしてしまった。

.....

翌日、修行が始まった。まずはラブと祈里を戦わせてお互いの戦闘力を理解しようという事から始まった。

ピーチ「はあ!!」

パイン「たあ!!」

修行後・・・

2人は変身を解いた。

ラブ「はあはあ、ブッキー強い!!」

祈里「ふう、ラブほどじゃないよ。」

アキラ「でもラブに比べてあまり疲れてないみたいだな?」

ラブ「本当に!? 私もつと頑張んなきゃ!!」

祈里「う・・・うん。」

タケル「?」

.....

様々な修行を終え、2人は部屋に戻った。

祈里の部屋・・・

祈里「くっ・・・うつ！！！」

祈里の首から何かが出てきた、ガイアメモリだった。

「ストロング！！」

祈里「ストロングのガイアメモリ・・・凄い力・・・。」

ストロングのガイアメモリは人間の姿を変える事はないが並みの人間以上の力を発揮できる。

祈里「これなら、みんなの力になれる！！」

・・・

ルミナス「まさかあなたが直々にガイアメモリを渡すとはね。」

???「奴に暗示をかけるためにはな。」

ルミナス「暗示？」

???「私は奴に暗示をかけた、ガイアメモリを使えば奴の仲間の力になれるとな。」

ゼバダ「しかし、あのガイアメモリは力は強力ですが・・・。」

「??? ああ、普通のガイアメモリよりはるかに依存性が高く、一度使えばもうガイアメモリのとりこだ。」

ルミナス「ふふふ、あなたは本当に悪い奴ね。」

「???」 ははは、これでキュアパインは葬ったと同じだ。」

つづく



### 第32話 オーラパワー（後書き）

???「あの・・・」

翔太郎「ん？君は？」

フィリップ「君からは特別な力を感じる、プリキュアだね？」

???「はい、月影ゆりと言います、依頼届きました？」

翔太郎「あの依頼は君からか。」

ゆり「はい、名前を書き忘れてて・・・仲間が大変なんです、引き受けてください！」

翔太郎「当たり前だ、あいつらは大切な仲間だからな。」

フィリップ「君も来るんだね？」

ゆり「はい、みんなを助けたいから。」

翔太郎「よし、行くぞ！」

フィリップ「待っててね。」

### 第33話 恐怖

ラブと祈里がマスクマンの世界に来て一週間、祈里に違和感を持つラブ。

モモコ「どうしたのラブ？」

ラブ「4日前からブッキーの様子が可笑しい気がする・・・」

・・・

ラブ「ブッキー！ご飯だよ、行こう！」

祈里「・・・ごめん、私はいいわ。」

ラブ「え・・・わかった、具合が悪かったら言ってね？」

・・・

ラブ「あれ？ブッキーまだ寝てないの？」

祈里「なんだか眠くないから、心配しないで。」

ラブ「う・・・うん。」

・・・

モモコ「まさか祈里ちゃん4日前から寝ても食べてもないの!？」

ラブ「うん、やっぱり可笑しいよね？」

タケル「・・・それについて、ちょっと思っ事があるんだ。」

モモコ「タケル！」

ラブ「どうしたの？」

タケル「昨日の夜、ちょっと喉が渴いたから水を飲みに行ったら祈里の部屋から苦しそうな声が聞こえたんだ。」

ラブ「ブツキーが？」

タケル「ああ、最近部屋からも出てこないし修行の時は元気だし・

・」

モモコ「嫌な予感がするわね。」

その時、外から爆発音が鳴り響いた。

タケル「何だ！？」

モモコ「外よ、行きましようー！」

ラブ「ブツキー！先に行ってるよー！」

・・・

外にはビッパ―軍団が待ち構えていた。

アキラ「タケル！」

ハルカ「早く変身よー!!」

タケル「おうー!!」

そして祈里が遅れてきた。

祈里「ご・・・ごめん、遅れたわ。」

ラブ「ブッキーー!!変身よー!!」

「オーラマスクー!!」

「チェインジー!!プリキュア・ビートアップー!!」

7人は変身した。

タケル「レッドマスクー!!」

ケンタ「ブラックマスクー!!」

アキラ「ブルーマスクー!!」

ハルカ「イエローマスクー!!」

モモコ「ピンクマスクー!!」

「光戦隊ー!!マスクマンー!!」

ピーチ「ピンクのハートは愛あるしるし、もぎたてフレッシュー!!」

キュアピーチ！！」

パイン「……………」

ピーチ「ってパイン！？」

パイン「……あつ、ごめん。」

レッドマスク「来るぞ！！」

ビッパ―軍団が一斉に襲いかかってきた。  
しかし7人の敵ではなかった。

ブル―マスク「楽勝楽勝！！」

その時ブラックマスクがある事に気がついた。

ブラックマスク「！！！！、おいパイン！！その首のあざはなんだ！？」

パイン「！？」

ピーチ「本当だ、どうしたのパイン！？」

パイン「あつ……こ……これは……！？」

その時パインに異変が起こった。

いきなり体が震えだし、首のあざを手で抑え苦しみはじめた。

パイン「あつ！！ああああ！！」

イエローマスク「ちよつと・・・どうしたの!？」

ピンクマスク「一体何が!？」

そしてパインは何かを取り出した。  
ガイヤメモリだった。

ピーチ「パイン!？それは!？」

そしてパインはガイヤメモリを鳴らし首に差し込んだ。

「ストロング!！」

パイン「くっ・・・!？」

一瞬落ち着いたかと思うとまたパインに異変が起こった。

パイン「あああああああ!!!!!!!!!」

パインはそのまま倒れ込んだ。

ピーチ「パイン!？」

そしてパインはゆっくりと起き上がる。

ピーチ「パイン!!なんでガイヤメモリを・・・」

その時パインはいきなりピーチに襲いかかってきた。  
パインはピーチの首を締め上げる。

ピーチ「なっ!・・・パ・・・イン」

レッドマスク「やめろ!!」

レッドマスクとピンクマスクはパインをピーチから引き離れた。

ブラックマスク「どうなっただ!?」

ピーチ「パイン!!なんでガイアメモリを持つてるの!?」

パイン「……………」

パインは何も言わずまたピーチに襲いかかる。  
それをイエローマスクが受け止める。

イエローマスク「凄い力……まずはパインをどうにかしないと!!」

マスクマンは強力な気をパインに送り気絶させた、パインは変身が解けた。

ピーチ「はあはあ、パイン……どうして?」

気づけばビッパ軍団は消えていた、一同は変身を解いた。

タケル「まずは祈里だな、また暴れたらやばいから部屋に閉じ込めておこう。」

ラブ「そんな……でも、仕方ないよね。」

一旦一同は戻り、祈里を部屋に閉じ込めた。

果たして祈里は元に戻るのか。

つづく



### 第33話 恐怖（後書き）

次回、祈里は助かるのか！？

第34話 みんなのために（前書き）

本編へ

### 第34話 みんなのために

祈里「うあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

祈里は部屋の扉を壊そうと暴れていた。

.....

ラブ「どうしよう・・・一体どうしたら・・・」

タケル「ラブ、ガイアメモリって何なんだ？」

ラブはタケル達にガイアメモリについて説明した。

アキラ「じゃあ祈里はもうガイアメモリに依存しているのか。」

モモコ「メモリを壊すにはその仮面ライダーがいないと壊せないんじゃない・・・」

ハルカ「厄介ね、どうすれば・・・」

するとケンタが慌てて一同の所に駆けつけた。

ケンタ「大変だ!! 扉が保ちそうにない!!」

一同は慌てて祈里の部屋に行く。

祈里「くっ!! うあああああああ!!」

ラブ「ブツキー、苦しんでる。」

タケル「ああ、早くメモリから解放してほしいんだろう。」

祈里はメモリに手を出した事に後悔し、その罪悪感がメモリの暴走を悪化させていたのだ。

ハルカ「早く解放させないと!!」

そしてついに扉が突き破られた。

祈里「ああああ!!」

一同は一旦外に出た。

タケル「気を送ってみよう!!」

タケルとアキラは祈里に気を送りメモリに何か影響を与えられるかどうか調べてみた。

しかし祈里に変化はない。

???「ははは、無駄よ!!」

何やら後ろから声が聞こえ一同は振り返った。  
ルミナスだった。

ラブ「ルミナス!?!?!その姿は!?!」

ルミナス「我はプリキュアとスーパー戦隊に憎しみを持つ者だ。」

ラブ「そんな・・・なんで!？」

タケル「ラブの仲間か？」

アキラ「そうらしいけど今は違うみたいだ。」

ルミナス「祈里はもう元には戻らん、欲望にのまれた愚かな奴よ。」

ラブ「ブツキーを侮辱しないで!!」

祈里「うああああああ!!」

祈里はタケル達をなぎ倒し、ラブを押し倒した。

ラブ「きゃあ!?ブツキー!!」

祈里「ご・・・めん・・・ラブ・・・ちゃ・・・ん!」

ラブ「!!!」

見ると祈里は涙を流していた。

ラブ「まさかブツキー・・・自分は力になれないと思ってるの?」

祈里「あ・・・ああああ!!」

ラブ「ブツキー!!あなたは私達の大切な仲間!!だから・・・力なんて必要ない、ブツキーがいるだけで元気になれるもん!!」

祈里「な・・・ああああ!!」

すると祈里の体に異変が起きた、首のあざが光りだしたのだ。

ルミナス「馬鹿な!？」

なんと祈里の首のあざからガイアメモリが出てきたのだ。

祈里「う・・・」

祈里は倒れかけたがラブは何とか受け止めた。

ラブ「ブツキー!!」

祈里「・・・ラブちゃん・・・ありがとう。」

ルミナス「くっ・・・やむを得ん!!」

ルミナスは手から闇の波動を出しガイアメモリに波動を浴びせたとガイアメモリは怪人・ストロガランに変化した。

ラブ「ブツキー行くよ!!」

祈里「うん!!」

「チェインジ!!プリキュア・ビートアップ!!」

2人はプリキュアに変身したが何やら違和感を感じた。

ピーチ「あれ？」

パイン「力が・・・湧き出る!!」

その時

タケル「俺達をほったらかしにするな!!行くぞみんな!!」

「オーラマスク!!」

タケル達はマスクマンに変身した。

イエローマスク「あれ!?2人のオーラが凄まじくなってる!!!!」

レッドマスク「仲間を思う気持ちが気を強力にしたか!!」

ピーチ「パイン・・・なんか出来そうな気が・・・」

パイン「うん、私も・・・」

そうしている間にストロガランが攻撃を仕掛けてきた。

ストロガラン「グガアア!!」

2人はそれを見て手を突き出す、すると手から凄まじい波動が放たれ、ストロガランを吹き飛ばした。

ピーチ「パイン!!行くよ!!」

パイン「うん!!」

レッドマスク「俺達も行くぞ!!!!」

ピーチとパインは手を互いに握り片手に気を集める。

次第にピーチの片手は桃色に

パインの片手は黄色に

変わっていく。

ピーチ＆amp;パイン「プリキュア・オーラ・ストリーム!!」

レッドマスク「ジェットカノン!! クロスターゲット!! メディテーション!! 発射!!」

プリキュアの技とマスクマンの必殺武器「ジェットカノン」がストロガランに炸裂しストロガランは爆発した。

ルミナス「ちつ、やむを得んひとまず引き上げよう。」

ルミナスは消えると同時に慌てたのか虎のメダルを落としていきピーチがそれを拾い上げた。

ピーチ「ルミナス・・・一体何で？」

・・・

ルミナス「すまない、失敗した。」

???「いや、我も正直驚いた結果だった。」

ルミナス「・・・そういえばあんた、名はなんて言うんだ？」

???「お前になら教えても良いだろう、我は・・・モーフアだ。」



ルミナス「なっ!？」

ルミナスは驚愕した、以前自分を含めたプリキュア、仮面ライダーそしてウルトラマンが協力し倒したモーフアが目の前にいたからだ。

モーフア「安心しろ、手はうつてある。」

ルミナス「……………」

……………

祈里「良かったねラブちゃん!!無事に氣の力を習得できて……………  
って何それ?」

ラブ「さっきルミナスが落としていった虎のメダル。」

祈里「ルミナス……………いつきに何かあったのかな?」

ラブ「うん……………」

つづく

第34話 みんなのために（後書き）

次回、咲&amp;mp;舞side

### 第35話 高校生になってる！？（前書き）

佐藤健太さんは良い声してますよね？

せ  
か  
い  
じ  
ゅ  
う  
に  
ひ  
と  
り  
し  
か  
い  
な  
い  
ゝ



舞「自分の見ないとわかんないでしょ!!」

咲はポケットに手を入れ学生証を取り出した。

武蔵野学園高校

2年A組 日向咲

咲& a m p ; 舞「ええええええええ!! 一つ下あああああ!!?」

そう咲と舞はまったく知らない学園、しかも高校生になっていたのだ。

舞「なんで高校生に・・・とりあえず学校に行ってみよう、学生証にマップもついてるし、えゝと登校時間は8時30分までね・・・」

咲「今何時だろう?」

咲は腕時計を見た。

9時30分・・・

咲& a m p ; 舞「遅刻だああああ!!!!!!!!」

2人は思いっきり走った、咲はともかく舞は遅刻など一度もしたことがないからだ、たぶん。

舞「1時間でしゃれにならないわよ!?!」

咲「絶不調なりいいいい!!!!!!!!」

そして2人は武蔵野学園高校に着いたは良いが

開校記念日  
・  
・  
・

咲&amp;舞「休みだああああああ！！！！！！！！！！」

何やら叫びっぱなしの2人であつた。

舞「ダメ……叫びすぎて喉痛い……」

咲「とりあえず……どうしようか？」

そこに昭和くさいチンピラが咲と舞にからんできた。

チンピラ1「ねえねえ、君達ちよつと俺達と遊ばない？」

舞「けっ、結構です！！・・・行こう咲。」

「うん。」

しかしチンピラ達は2人を阻む。

咲「ちよつとどいてよ!」

チンピラ2「この強気なところがまたかわいいなあ。」

チンピラは2人の腕を引っ張り出した。

舞「痛っ！！放して！！」



男に惨敗したチンピラ達は立ち去った。

咲「助かった。」

舞「ありがとうございます。」

???「まあね、世界を救うって人に協力するのは当たり前だからな!!」

咲「ですよね。」

舞「うんうん・・・って」

「ええええええええええ!!!!!!」

2人は驚愕した。

???「俺は炎力!!事情は妖精から聞いてるから。」

咲「妖精?」

舞「フラッピとチヨッピはいるわよね?」

力「違う違う、俺達ターボレンジャーには妖精がついてるんだよ。」

咲「え!?戦隊なの!?!」

舞「それによく見たらその制服・・・」

力「そう!!ターボレンジャーは全員この学校の高校生!!」



色々ありすぎて疲れた2人はとりあえず休み場所を見つけないと力をお願いした。

.....

モーフア「ははは、ルミナスよ、ゼバダはどうなっている?」

ルミナス「部屋に閉じこもってるわ、何かできる事はないのかしらね?」

モーフア「まあ良い、幹部はもうゼバダを含めあと2人・・・その内1人はまだ完成していない、こいつで繋ごう。」

ルミナス「これは・・・使えるわね。」

.....

とりあえず咲と舞は力の自宅で待機した。

力「プリキュアは驚いたよ、それにしてもなんでうちの学校の制服を?」

咲「さあ?」

舞「それがわからなくて・・・」

????「・・・この世界では高校生になって暮らせて事じゃない?」

突然女の声が聞こえ三人は飛び上がった。

力「うおっ！！・・・なんだよはるなかよ。」

現れたのはターボレンジャーのピンクターボ・森川はるなだった。

はるな「そこまで驚く事ないでしょ？その子達がプリキュアね？」

咲「はっ・・・はい。」

舞「え〜と・・・はるなさん？」

はるな「あれ？ああ、さっき力が言ってたもんね、その前に力・・・今日みんなで集まる約束だったじゃない、みんなカンカンよ？」

力「やべ！忘れてた、丁度良いや2人も来て！！」

4人は集合場所に急いだ。

???「遅いじゃないか力！！」

???「散々待ったぞ！！」

力「ごめんごめん！！」

???「え〜と、その子達がプリキュア？」

はるな「そうよ、妖精が言ってた。」

その時、咲は質問した。

咲「あの、あなた達は？」

????「俺は山形大地。」

????「浜洋平だ。」

????「日野俊介だよ。」

舞「妖精というのは一体？」

大地「シーロンっていう滅んでしまった妖精の生き残りだよ。」

咲「滅んじゃったんだ。」

俊介「人間の環境破壊のせいだね。」

洋平「大丈夫、人間は環境の事を考えているから。」

舞「その妖精に会わせてもらえますか？」

はるな「そうね、実際に話した方が早いわね。」

力「じゃあ早速・・・」

しかしその時、ビッパが現れ攻撃を仕掛けてきた。

舞「きゃあ！何！？」

はるな「シーロンが言ってた新しい悪の組織ね！！」

咲「えええ！！悪の組織！？」

「オレタチビッパ、オマエタチタオス！！」

力「誰が倒されるか！！」

五人は腕のプレスを使った。

力「レッドターボ！！」

大地「ブラックターボ！！」

洋平「ブルーターボ！！」

俊介「イエローターボ！！」

はるな「ピンクターボ！！」

五人は体が光り出し姿を変えた。

「高速戦隊！！ターボレンジャー！！」

咲「舞！！」

舞「うん！！」

咲と舞は手をつなぎ変身アイテム・クリスタルコミュニケーションを使った。

「デュアル・スピリチュアル・パワー！！」

咲「花開け！！大地に！！」

舞「羽ばたけ！！空に！！」

2人はプリキュアに変身した。

ブルーム「輝く金の花！！キュアブルーム！！」

イーグレット「煌めく銀の翼！！キュアイーグレット！！」

「2人はプリキュア！！」

イーグレット「聖なる泉を汚す者よ！！」

ブルーム「悪戯な真似はお止めなさい！！」

7人はビッパ軍団を簡単に一掃し、全滅させた。  
しかし、1人の人物が立っていた・・・キュアサンシャインだった。

イーグレット「サンシャイン！？なんで！？」

そしてサンシャインはイーグレットに攻撃を仕掛けてきた。

イーグレット「きゃあ！！」

ブルーム「イーグレット！！」

レッドターボ「仲間なのか！？」

ブルーム「うん、キュアサンシャインは私達の仲間・・・でもなんで!？」

その時ブラックターボはある事に気づいた。

ブラックターボ「ん？透明の系？・・・そうか、操られているんだ!！」

透明の系が太陽の光で反射し一瞬だけ見えたのだ。

ブラックターボ「キュアサンシャインは透明の系で操られているんだ!！」

ピンクターボ「じゃあその系を切れば!！」

しかしサンシャインはそうはさせるかと思わせる動きで一同を攻撃する。

イエローターボ「なかなか近づけないなあ!！」

ブルーターボ「とりあえず動きを止めよう!！」

レッドターボは専用武器・GTソードを構えている。

レッドターボ「系を切るのは俺にまかせてくれ!！」

イーグレット「私達はサンシャインの動きを止めなきゃ!！」

ブルーム「行くよイーグレット!！」

2人の体は光り輝き姿を変えた。

「天空に満ちる月、キュアブライト!!」

「大地に薫る風、キュアウィンディ!!」

キュアブルームはキュアブライトへ

キュアイーグレットはキュアウィンディ

へとフォームチェンジした。

ウィンディ「精霊の光よ!!命の輝きよ!!」

ブライト「希望へ導け!!2つの心!!」

「プリキュア・スパイラル・スター・スプラッシュ!!」

2人の必殺技はサンシャインに直撃した。

だがさすがは力のあるサンシャイン、まだ立っていた。

しかし攻撃が効いていないわけではなく、立つのもやっとのようだ。

レッドターボ「うおりゃ!!」

レッドターボはGTソードでサンシャインを操っている糸を切った、それと同時にサンシャインはいつきの姿に戻りその場に倒れ込んだ。

ブライト「いつき一体誰に?」

レッドターボ「とりあえず研究所に運ぼう。」

レッドターボはいつきを背負い一同は研究所に向かった。

つづく



第35話 高校生になってる！？（後書き）

またレッドが主題歌歌ってくれないかなあ

### 第36話 妖精の力（前書き）

竜「絶望がお前のゴールだ。」

ターザン「君今作でないよ？」

竜「何！？」

### 第36話 妖精の力

モーフア「キュアサンシャインがやられたようだな。」

ルミナス「もう少し粘れると思ったのに・・・あの役立たずが。」

既にそれは心優しいひかり・ルミナスの口調ではなかった、完全に心が悪に染まってしまったようだ。

モーフア「そう言っな、新たな幹部が出来た。」

ルミナス「へえ、楽しみね。」

・・・

いつき「・・・うん・・・あれ？」

いつきが目を覚ました、そこは見慣れない風景が広がっていた。そこに咲、舞、はるながいた。

咲「あっ！！目を覚ました！！」

舞「良かった。」

はるな「みんな心配してたわよ？」

いつきは戸惑っていた、何故別の世界に行ったはずの咲と舞が目の前にいるのか、そしてその隣にいる女は一体誰なのかと。

いつき「あの・・・何がどうなってるの？」

事情説明中・・・

いつき「そうか・・・そうだ！！ひかりが！！」

咲「ひかりに何かあったの！？」

いつき事情説明中・・・

舞「そんな・・・ひかりが・・・」

はるな「その子も早く闇の力から解放してあげないと・・・」

???「聞かせてもらいました。」

4人は声のする方を見た。

はるな「みんな！！それにシーロン！！」

しかし咲と舞といつきは

咲「え！？シーロンどこ！？」

舞「どこにいるの！？」

いつき「声は聞こえるけど姿は見えず。」

三人はプリキュアの力で妖精シーロンの声を聞く事は出来たが姿は見えなかった。シーロンを見る事が出来るのはターボレンジャーの五人だけなのだ。

力「そうだった、博士！！博士！！」

そこにターボレンジャーを支える太宰博士が駆けつける。

太宰「三人はこの妖精グラスをかけるんだ。」

妖精グラスとは普通の人間も妖精の姿を見る事ができるメガネである。

咲「わっ！見えた！！」

舞「小さい・・・」

いつき「羽がはえてるね。」

意外と反応の薄い三人だった。

力「シーロンはこの子達が来るのをわかって地球に戻ってきたのか？」

シーロン「そうです、妖精の力を授かりに来ると、ですが妖精の力を与える事はできません。」

一同はシーロンの言葉に驚愕した。

舞「なんですか！？」

シーロン「私にはそんな力はもう残っていないのです、地球に来るのに大分力を消費してしまいました。」

咲「そんな・・・」

いつき「僕は太陽の力を手に入れる事が出来なかった・・・何か力になれば。」

いつきは何か2人の力になれないかと思っていた。

咲と舞は妖精の力を手に入れる方法を見つけるためにしばらく高校生活を過ごす事にした。

いつきは研究所のお手伝い。

・・・

教師「え、動物細胞はまず中心体が星状体になって・・・」

咲「・・・？」

一方舞は・・・

舞（なんとか分かるわ！！）

力「・・・？」

こうして3日が過ぎた。

咲「ダメ！！もう何がなんだか訳わかんない！！」

舞「そう？私はなんとかわかるけど。」

力「驚異の頭脳だ・・・」

・・・

モーフア「こいつが新作の幹部、マルグだ。」

モーフアには他に幹部がいたのだが、好みに合わず処分したのだ。

マルグ「何？俺そんなに気に入られてんの！？」

ルミナス「何よこいつ・・・気に入らないわ。」

ルミナスはマルグを気に入らず、ホールから出て行った。

ついでに言うとモーフア達はどこかの闇の中にある城にいるのだ。

ルミナスはズカズカと廊下を歩く。

ルミナス「全く・・・あいつは何であんな奴ばかり・・・ゼバダを除いては。」

するとルミナスはずっと気になっていた部屋の前にいた。

ルミナス「・・・そういえば、ここ誰も入れてくれなかったわね。」

ルミナスはモーフアの仲間になりその部屋を見つけ、心の中でその部屋を『開かずの間』としてずっと興味を抱いていた。

ルミナス（誰もいない・・・今なら・・・）

ルミナスは手に入れた闇の力で開かずの間を開けて中に入った、狭い通路が先に延びていた。

ルミナス「暗いわね・・・」

すると先にほんの少しだけ光が見えた、ルミナスが近付くと段々光が大きくなっていった。

ルミナス「何？何なの？・・・胸騒ぎがする。」

そして通路を抜けるとそこは実験室のような所だった、そこでルミナスは見えてはいけな物を見てしまった。

ルミナス「な！？・・・ああ・・・」

・・・

大地「それにしてもどうすれば妖精の力を手に入れられるんだ？」

舞「うん・・・」

その時、謎の空間から怪人・マルグが現れた。

マルグ「よお！」

咲「何！？」

力「どうやら悪の組織の怪人みたいだな、行くぞみんな！！」

咲「舞！！」

舞「うん！！」

咲と舞はプリキュアに  
力、洋平、大地、俊介、はるなはターボレンジャーに



変身した。

マルグ「俺と戦うつもりか？」

マルグは体は赤く、スマートで口調は若々しく、足にローラーのよ  
うな物がついていた。

ブルーム「当然よ!!」

イーグレット「行くわよ!!」

2人は真っ先に攻撃を仕掛けたが・・・

マルグ「どこに攻撃仕掛けてんだ？」

2人は一瞬唖然とした、さっきまで目の前にいたマルグが気づけば  
後ろにいたからだ。

レッドターボ「でやあ!!」

ブルーターボ「だああ!!」

レッドターボとブルーターボも攻撃を仕掛けるが気づけばマルグは  
別の場所に移動していた。

レッドターボ「どうなっているんだ!？」

ブルーターボ「レポートか!？」

しかし頭の回転が速いブラククターボは気がついた。

ブラクターボ「そうか、奴は足のローラーで移動しているんだ！  
！」

ピンクターボ「そうか、だから普通より速いんだ。」

マルグ「気づいたってこの速さについて来れるのかあ！？」

しかし、ブルームとイーグレットには考えがあった。

ブルーム「よし、行くよ！！」

イーグレット「うん！！」

2人はキュアブライトとキュアウィンディにフォームチェンジした。

ウィンディ「はああ！！」

キュアウィンディは風のプリキュア、その力で突風を起こした。  
その風はマルグの走る方向と正反対の方向に起こった。

マルグ「うお！走りづら！？」

マルグはほんの少しだが原則した。

ブライト「まだまだ！！」

ブライトは月のプリキュア、その力で月の眩い光を放ちマルグを目  
眩ましをした。

マルグ「ぬお！？眩しー！！」

あまりの眩しさにマルグは足を止めた。

レッドターボ「よし、今だー！」

「ターボレーザーー！！プラズマシースー！！」

ターボレンジャーはレーザーを上空の一点に打ち上げエネルギー球が形成されプラズマシースーでエネルギー球をマルグに浴びせた。

マルグ「ぎゃーすー！！」

だがマルグは何とかまだ生きていた。

レッドターボ「しぶといなあー！！」

マルグ「だあもおー！！何でいつもこいつも邪魔すんだよー！！」

ブライト「はっ、はあー？」

ウィンディ「そんな事当たり前でしょー！？世界を征服させるなんて絶対止めてやるわよー！！」

マルグ「はあー？痛た、俺は奴に自由に滑れるからプリキュアとスーパー戦隊を倒せて言われたんだぜ？世界征服なんて知らねえよー！！」

ピンクターボ「へ？」

ブラックターボ「自由に滑れる？」

マルグ「よし、教えてやる！！俺のとても悲しい過去を！！」

.....

「よし、今日も張り切って滑るぞ！！」

彼はローラースケートのプロと呼ばれるほどの実力を持つ人間であった。

「おっ？よし、今回もこの大会で優勝だぜ！！」

彼はローラースケートの大会の広告に飛びついた。

そして大会当日・・・

「新しい技も生み出したし、今回も優勝だああ！！」

その時・・・

「強盗だあ！！」

「おっ？優勝前に人助けだぜ！！」

彼は強盗を捕まえてやろうと強盗に立ち向かった、しかし・・・

「あれ？」

気づけば彼の腹部には包丁が刺さっており、血まみれだった。

「捕まえたぞ!!」

「おい!!君大丈夫か!?今、病院に・・・」

(は?何言ってるの、俺は大会に出るんだぞ?優勝するんだぞ?)

そして段々声が遠のいていった。

・・・

マルグ「ひでえよなあ、せっかく新しい技生み出したのに大会会場行けなくて気づけばせっかくのイケメン顔とナイスバディがこんなんだぜ?」

レッドターボ「自分で言うんかい!!」

ブライト「・・・でも、なんか悲しいね。」

イエローターボ「まあな、でもどうすんの?」

ウィンディ「その新しい技見せてくれない?」

マルグ「まじ!?披露して良いの!?!」

ピンクターボ「良いんじゃない?」

マルグ「よっしゃあ!!燃えてきたあ!!」

ブラックターボ「意外と熱血だな。」

まず一同は変身を解き、マルグを広い場所に連れて行った。

マルグ「なんか丁度良く足にローラー付いてんな、よっしゃあ行くぜえー!!」

マルグは思う存分滑った、今までの未練を発散するように。

マルグ「行くぜ必殺・竜巻ぐるぐる大回転!!」

マルグは空中で体を捻らせ大回転した。

力「もう少し名前かんがえろお!!」

洋平「全部同じ意味じゃん!!」

咲「でも凄い!!」

舞「何回回ってるのかしら!？」

名前はともかく技に感動した一同、するとマルグは滑るのを止め

マルグ「次はお前達と一緒に競争だぜ!!」

舞「は?へ?」

咲「走るの!？」

マルグ「当然俺に追いついてみる!!」

とりあえず2人はマルグと走り始めた。

マルグ「なかなか速いなお前達!!」

咲「当たり前よ!!」

舞「待つて!!速いわよ2人共!!」

するとマルグに光が漏れ出した。

マルグ「はっはっはっ!!走るのは楽しいぜえ!!」

大地「なんか俺に似てるな。」

力「いやいや、それよりあの光だろ!?!」

俊介「あれは妖精の光だ!!」

洋平「そうか、ケンイチのようにマルグは妖精の光を浴びた経験のある人物だったのか!!」

その光は少しずつ咲と舞の体に入っていく。

咲「これは!?!」

舞「妖精の光!?!」

マルグ「はっはっはっはっはっ!!」

マルグから出てくる光が段々大きくなっていく。  
そしてマルグの姿はかつて人間だった頃の姿に戻っていく。

はるな「ああ！！人間になっていく！！」

カ「本当にイケメンでナイスバディだなあ、おい。」

そして全ての光が咲と舞の体に入っと思ったと思うとマルグ（人間）は空に向かって走り去っていった。

マルグ「ありがとよおお！！感謝するぜええ！！」

咲「あつ……」

舞「何？このファンタジー溢れる結末……」

そして研究所へ……

シーロン「あら、妖精の力を手に入れましたね？」

咲「え！？いつの間に？」

舞「もしかしてさっきの光は……」

俊介「マルグも妖精の光を浴びていたんだな。」

カ「まあ、無事に妖精の力を手に入れたな。」

いつき「僕も早く太陽の力を手に入れられるように頑張らなくちゃ。」

……



ルミナスは若干震えながら廊下を歩いていた。

ルミナス「あれは・・・一体・・・」

そこにゼバダが

ゼバダ「ルミナスさん、見てしまったのですね・・・あれを」

ルミナス「じゃああなたも!？」

ゼバダ「はい・・・奴には逆らわない方が良いでしょう。」

ルミナス「そうね・・・」

つづく

第36話 妖精の力（後書き）

タツクル「電波人間！タツクル！！」

ターザン「君でもないよ？」

タツクル「何ですって！？」

第37話 あと半分!! (前書き)

実はまだターボレンジャー編

### 第37話 あと半分!!

無事妖精の力を手に入れ安心していった咲と舞だがターボレンジャーの世界に来て5日目2人はシーロンに呼び出された。

咲「どうしたのシーロン？」

舞「何かあったの？」

シーロン「2人に謝らなければならない事があります。」

2人は何だろうと首を傾げた。

シーロン「実は2人はまだ・・・完全に妖精の力を手には入れていないのです。」

咲「・・・え？」

舞「え・・・」

咲&amp;舞「ええええええええええ!!!!!!!!!!!!」

2人は飛び上がった、マルグを浄化し妖精の力を手に入れたと思ったがそれはまだ半分だけだったという。

シーロン「私も2人が急に力を持っていたからつい完全に手に入れたように言ってしまったて、すいません!!」

咲「でも半分って・・・」

「残りの半分はどうやって手に入れるの!？」

「シーロン、ちっ、ちあ？」

咲&amp;舞「うわあああああああ！……！！！」

[illegible]

その頃、ルミナスとゼバダは2人で話し合っていた。

ルミナス「あれはとんでもない物よ、まだ力は戦闘員ほどだけど・  
・いつかは世界を飲み込む可能性があるわ。」

ゼバダ「確かに、あれから感じられる殺気のようなものは今まで感じた事ありません。」

ルミナスとゼバダは開かずの間と呼んでいた部屋で見たとんでもない物について話していた。

ルミナス」とにかく、しばらく奴の様子を見ましょう。」

ゼバダ「わかりました。」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

武蔵野学園高校の屋上

咲と舞とはるなは三人で弁当を食べていた。

はるな「大変ねえ、あと半分なんて……。」

咲「どうしたら良いんだろう?」

舞「うゝん……。」

三人は弁当のハンバーグを頬張りながら考えていた。  
そこに他の生徒の話が聞こえてきた。

A「なあ、知ってるか? 最近、近くの森で変な紫色の怪物が人を喰らうって噂……。」

B「知ってる知ってる、でも所詮は噂だろ?」

C「怖いな、噂なら良いけど。」

咲「……きつ、聞いた?」

舞「人を……喰らう?」

はるな「気味が悪いわね。」

はるなは先に教室に戻り力、大地、洋平、俊介に伝えた。

大地「うえ、気持ち悪!!」

洋平「まさか行こうと言っくんじゃ?」

はるな「馬鹿ね、そんなの……。」

力「行くよな？」

「は？」

俊介「俺も興味あるな。」

はるな「ちよつと、まじで言ってるの？」

力「何びびってたんだよ、男ならどんな恐ろしい事にでも立ち向かってみせろ！！」

はるな「誰が男よ！！」

結局ターボレンジャー一同と咲、舞、そして研究所でもその噂を聞いたいつきはその森に行く事になった。その噂の森・・・

咲「なんか気味悪いわね、あれ？」

咲は何かに気づいた。

舞「どうしたの？」

力「なんかあったか？」

咲「あそこに人が三人ほど・・・」

咲が指差した方向には三人の男がいた。

力「何やってんだ？」

男A「あ？噂の真相を解明にな？」

男B「まあ俺達は信じてねえけどな！！」

男C「早く明日学校で担任からかいてえなあ。」

その三人の男は学生で自分達のクラスの担任をいじめているとんでもないやからだった。

俊介「・・・行こうぜ。」

舞「うん。」

一同は呆れてその場を去ろうとしたがその時

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

突如後ろで叫び声が聞こえ一同は振り向いた。

そこには三人いたはずの男が2人になっていた。

いつき「え！？さっきの人は！？」

男C「知らねえよ！！なんか突然姿消して・・・」

すると突然男Cは何か足をとられたように転び草村に引きずり込まれた。

男C「なっ・・・あっ・・・ぎゃあああああああ！！」

叫び声と同時に草むらから大量の血が飛び散った。



洋平「なっ！何だ！？」

大地「一体何が！？」

男B「ひiiiiiiiiiiii！！！！」

男Bはあまりの恐怖にその場から逃げようとした。

力「おい！！危険だ！！」

しかし時既に遅し、木から何かが出て男Bに絡みつきの引き上げた。

咲「何なの！？」

舞「助けなきゃ！！」

2人は走り木に近づいた。

はるな「ダメ！！」

その時、男Bの断末魔が響いた。

男B「ぎゃああああああ！！」

それと同時に咲と舞に大量の血が降り注いだ。

咲「うわ！！」

舞「！！」

そして男Bの体が落ちてきた、その体は血で真っ赤に染まり、関節は有り得ない向きに曲がり、白目を向いていた。

咲「なんてひどい事を！！舞、変身よ！！」

舞「あっ・・・いや・・・」

しかし舞は震えていた。

咲「ま・・・い？」

舞は血で赤く染まり、男の残酷な死体をガタガタと震えながら見ていた。

舞「きゃああああああああああああああああ！！！！」

舞は今までに聞いた事のない叫び声を出し森の奥に逃げてしまった。

咲「なっ！舞！！」

そして木から何かが落ちてきた。

その口、爪は血にまみれ、その姿はひとまわり大きい紫色のおぞましい獣のようだった。

洋平「咲！！下がって！！」

咲「うつ、うん！！」

「ターボレンジャー!!」

「プリキュア・オープンマイハート!!」

力、大地、洋平、俊介、はるなはターボレンジャーに、いつきはキュアサンシャイン変身した。

レッドターボ「はるなと咲といつきは舞を探してくれ!!」

ピンクターボ「わかったわ!」

サンシャイン「必ず見つけてきます!!」

咲「舞、無事でいて!!」・・・・・・・・

舞「はあはあ・・・」

舞は草むらに身を隠していた、その体は恐怖で震えていた。

舞「いや・・・いや。」

その時、何かの足音が聞こえた。

舞は一瞬ビクツとしたが咲達ではないかと思い草むらを出た。

舞「あれ?・・・何もない。」

その時、突如後ろから何かが飛びついてきた。

舞は腕を噛みつかれた。

舞「きゃああああ!!」

その何かは、先ほどの獣より小型の獣だった。  
獣の牙は舞の腕に段々深く刺さっていきその腕は血にまみれていた。

舞「いや！！いやあああああ！！！！」

・・・・・・・・

咲「舞！！どこなの！？」

ピンクターボ「かなり深く行ったのかもね。」

サンシャイン「無理もないわ、あんな残酷な間近で見たらさすがに気が動転しちゃうわよ。」

舞を搜索する三人だが一向に手がかりがない、しかしサンシャインが何か気づいた。

サンシャイン「この落ち葉赤いわ・・・えっ、血！？」

サンシャインは赤色の落ち葉を拾い上げたがそれは血がついた落ち葉であった。

サンシャインの手には血がべっとりとついた。

サンシャイン「まさか・・・舞？」

咲「そんな！？」

ピンクターボ「まだ間に合うかもしれないわ、急ぎましょうー！！」

三人は舞を必死に探す、するとピンクターボは木の影から何かを聞こえるのに気づいた。

「いや、いや・・・」

ピンクターボはその声が舞のものだとすぐわかった。

ピンクターボ「舞!!」

ピンクターボは舞の姿を見て愕然とした。

いたるところを噛みつけられ血まみれになり、腕からは大量に血が出ていた。

舞「あ・・・は・・・さん・・・」

舞は精神的にダメージを受け言葉を話すのもやっとだった。

ピンクターボはすぐさま2人を呼び、舞を連れてみんなの所に戻ることにした。

咲「ひどい・・・舞、大丈夫?」

舞「・・・う・・・」

舞は恐れるようにガタガタと震えていた。

????「はるな!!」

そこにレッドターボ達が駆けつけ舞を心配そうに見つめながらピンクターボに言った。

レッドターボ「急ごう、あいつが追ってくる。」

ピンクターボ「あの怪物は？」

ブラックターボ「怯ませて逃げるのが精一杯だった。」

ブルーターボ「！？、来た！！」

またしても紫色の獣が現れた、そこには小型の獣もいた。

舞「あああ！？」

舞は小型の獣を見て怯えだした。

咲「まさかあれが舞を襲ったの！？」

舞は震えながら頷いた。

サンシャイン「まずは舞を安全な所に！！」

咲は舞を肩に抱え木の影に隠れた。

レッドターボ「しかし2体は厄介だな。」

ブルーターボ「できる限りの事はやらないと！！」

・・・

咲「舞、戦え・・・ないよね。」

舞の体の傷を見て咲はそう悟った。  
舞はなんとかしゃべった。

舞「わ・・・たし・・・怖い・・・私も・・・みんな・・・なも・・・あの・・・  
男みたい・・・なるんじゃないか・・・って。」

咲は同情した、確かにあんな残酷な物を間近で見たうえに自分まで  
そうなりかけたと思うと体が震えた、しかし

咲「舞は私に言ったよね？・・・みんな苦しんでる、今みんなを助  
けられるのは私達だけだって。」

舞「・・・!!」

・・・

イーグレット「見なよ!!みんな傷ついてるじゃない!!苦しんで  
るじゃない!!」

・・・

舞「・・・咲、どう・・・するの?」

咲「決まってる!!みんなを助ける!!」

舞「わかった!!」

舞は勇気を振り絞り、咲と共にキュアブライト、キュアウィンディ  
に変身した。

その時、妖精の光が出始めた。

ブライト「え？何！？」

イーグレット「妖精の光・・・前より強くなってる！！」

ついに2人は完全に妖精の力を入れた。

・・・

レッドターボ「きついなあこの怪物！！」

ブルーターボ「ん？何だあの光！？」

ピンクターボ「まさか！？」

「はあああああ！！！！！！！！」

そのまさかだった、キュアブライトとキュアウィンディが怪物を蹴りで押し倒した。

ブラックターボ「その光は！？」

イエローターボ「妖精の力を完全に手に入れたか！！」

小型の獣がキュアウィンディに襲いかかってきた。

ウィンディ「はあ！！」

ウィンディは小型の獣を殴り飛ばした。



ブライト「まだまだ!!」

ブライトは追撃を掛け小型の獣を倒した。  
そして残った獣は一同に襲いかかってくるが

レッドターボ「よっしゃあ!!俺達も負けてらんねえ!!」

レッドターボはGTソードで獣の足を斬りつけた。

ピンクターボ「今よ!!」

ブライト&amp;ウィンディ「プリキュア・スパイラル・スター・  
スプラッシュ!!」

2人の必殺技で獣は吹き飛んだ。

ブルーターボ「やった!!」

ブライト「やったね!!」

ウィンディ「うん!!」

ついに2人は妖精の力を手に入れた、その頃・・・

・・・

ルミナス「何?なんか用?」

ルミナスはモーフアに呼び出された。

モーファ「お前・・・幹部を作ってみないか？」

ルミナス「え!？」

つづく

第37話 あと半分!! (後書き)

次回はつぼみとえりか side

第38話 大爆発！！（前書き）

ダイ ダイ ダイ ダイ ダイナマン！

ダイ ダイ ダイ ダイ 大爆発だあゝ

ダ  
ダ  
ダ  
！

ダイナマンは本当によく爆発しますよね。

### 第38話 大爆発！！

ルミナス「私が幹部を？どういう事？」

モーファ「今まで私が作った幹部は全て倒された、プリキュアの事を良く知っているお前ならと思ってな。」

ルミナス「・・・」

・・・つぼみ&amp;えりかside・・・

つぼみ「何もありませんねえ。」

えりか「うーん、何かドカーン！！と来ても良い雰囲気だけど・・・」

その時爆発音が響いた。

つぼみ「なっ！何ですか！？」

えりか「向こうよ！！行ってみよう！！」

2人は爆発音のした所へ急いだ、そこには5人の戦士がいた。

つぼみ「あれは！？まさか！！」

えりか「きつとそっだよ！！」

・・・

「ダイナレッド!!」

「ダイナブラック!!」

「ダイナブルー!!」

「ダイナイエロー!!」

「ダイナピンク!!」

「爆発!!科学戦隊!!ダイナマン!!」

それはこの世界の戦隊、科学戦隊ダイナマンだった。

ダイナレッド「よく分かんないのが出てきたな!!」

ダイナイエロー「とにかく片付けよう!!」

ダイナマンはビッパに襲われていた。

しかし、ダイナマンはビッパを一掃した。

.....

つばみ「うわあ、凄いですね。」

えりか「何か変なの全員倒しちゃった。」

つばみとえりかは物影からダイナマンを観察していた。  
するとダイナマンは2人の存在に気づいた。

ダイナレッド「誰だ!？」

つぼみ「あっ!見つかってしまいました!！」

えりか「あちゃゝ、偵察失敗。」

ダイナブラック「何者でござるか君達は?」

ダイナピンク「敵ではなさそうね。」

ダイナレッド「見ない顔だし、でも怪しいな。」

ダイナレッドは疑い深いようだ。

つぼみ「けっ!決して怪しい者ではありません!！」

つぼみは慌てて叫んだ。

えりか「つぼみ、落ち着いて・・・まずは事情説明しなきゃね。」

ダイナブルー「何か事情があるのか・・・」

ダイナピンク「その前に変身解かないとダメじゃない!！」

ダイナマン4人はダイナピンクの一言にはっとした。

ダイナマンは変身を解いた。

???「えゝとダイナレッド・弾北斗ね。」

???「拙者は星川竜でござる。」

「???「俺は島洋介な。」

「???「南郷耕作です、よろしくね。」

「???「私は立花レイよ。」

つぼみ「花咲つぼみです!」

えりか「来海えりかよ。」

するとダイナマンメンバーは再びはつとした。

レイ「もしかして、あの変な戦闘員が言ってたプリキュア?」

つぼみ「ええ!?!」

えりか「あいつら私達の事知ってるの!?!」

つぼみとえりかは今までの事を説明し、ダイナマンは戦闘員との戦闘中の事を説明した。

竜「なるほど爆発の力というのはダイナマンの力の事でござるな?」  
耕作「でも爆発なんて手に入れられるのか?」

えりか「一樣私達爆発系の技は持つてるんだけどね?」

北斗「じゃあまずはその技を見せてよ。」

つぼみ「あつ、はい。」



つぼみとえりかはプリキュアに変身した。

「プリキュア・オープンマイハート!!」

ブロッサム「大地に咲く、一輪の花!キュアブロッサム!!」

マリリン「海風に揺れる、一輪の花!!キュアマリン!!」

竜「おお。」

ブロッサム「行きます!!」

「プリキュア・大爆発!!」

辺りは爆発に包まれる、ダイナマンメンバーは爆発に巻き込まれない所に待機していた。

レイ「うゝん、良いかなとは思っけど・・・」

北斗「確かにこれではまだまだだな。」

ブロッサム「そうですか・・・」

マリリン「何が足りないんだろう?」

北斗「まあ、とりあえず夢野博士の所に行ってみるか。」

ブロッサム&amp;マリリン「夢野博士?」

・・・

ルミナス「モーファ、これでどう?」

ルミナスはメデムの新たな幹部を作り上げた。

モーファ「これは使えるなあ、さすがはダークライトルミナス・・・  
我が忠実なる下部。」

ルミナス（・・・チツ）

ルミナスはモーファの部屋を出た。  
そして廊下をズカズカと歩いていった。

ルミナス「・・・偉そうに・・・私はゼバダのためにメデムに入った  
のに・・・」

ゼバダ「ルミナスさん・・・」

ルミナスの後ろにはゼバダがいた。

ルミナス「ゼバダ・・・」

ゼバダ「なぜそこまで私に尽くしてくれるのですか?」

ルミナス「・・・あなた・・・悔しくないの?」

ゼバダ「何がです?」

ルミナス「モーファよ、あなた自分の思いを利用されてるのよ?」

ゼバダ「そうですか・・・あの方はモーフアと言つのですか・・・悔しいですよ、何故感情を無くしたのにこんな思いができるのですかね？」

ルミナス「・・・・・・」

・・・・・・

夢野発明センター・・・

ここには夢野九太郎というダイナマンの協力者である科学者がいるのだ。

夢野「ほほう、その子達がプリキュアとやらか・・・そうだ、あの戦闘員についても調べたぞ、どうやらメデムという悪の組織の奴らしい。」

つぼみ「メデム・・・ですか？」

北斗「また厄介なのが出来たな。」

夢野「うむ、急いで彼女達にダイナマンの力を授けた方が良さそうだな。」

そしてダイナマンの特訓が始まろうとしていたのだが

レイ「そもそも特訓なんかで力を手に入れられるの？」

えりか「確かにね、どうすれば良いんだろう?」

竜「悩むな。」

つぼみ「うーん・・・」

一同が悩む中、耕作が何かを思いついた。

耕作「ダイナブレスを夢野博士に作ってもらうなんて言うのは？」

「・・・おおおおおお！！！！」

一同はまたまた夢野発明センターに引き返した。

夢野「ダイナブレスをか・・・北斗、お前のダイナブレスを貸してくれ、4日あれば作れるかもしれない。」

北斗「そうか、そのかわり俺は4日間変身は禁止か。」

つぼみ「すみません、北斗さん。」

北斗「気にするな。」

・・・・・・

つぼみ「はああ、何だか爆発音ばかり聞いている気がします。」

えりか「まあ、ダイナマンだからね？」

「???」じゃあYou達もdynamicにbomberするかい  
「!!」

つぼみとえりかは目を丸くして声のする方をみた、そこにはギターを片手にノリノリな姿をした怪人だった。

つぼみ「あなたは!？」

???「meはナイダだぜえ!!ベイベー!!」

ナイダはギターを演奏し始めた。

えりか「ぎゃあああ!!何この騒音!？」

つぼみ「ひどい演奏ですう!!えっ、えりか!!」

えりか「おっ、オッケ!!やつ、やるっしゅ!!」

2人はココロパヒュームでプリキュアに変身した。

ブロッサム「たあ!!」

マリン「てえい!!」

2人はナイダに蹴りを浴びせた。

ナイダ「ぎゃあ!!何するんだベイベー!!」

マリン「あんたうるさい!!一度ドレミからやり直さない!!」

ブロッサム「そうです!!耳が痛いです!!」

ナイダ「meのhotなheartがunderstandできないとは困ったぜベイバー!!」

ナイダの英語混じりのしゃべり方に腹が立った2人。

マリン「だあああ!!うるさあああ!!」

ブロッサム「私、頭にきましたあああ!!」

2人はナイダに本格的に攻撃を仕掛け始めた。

マリンは連続蹴りで相手を攻撃するがナイダはそれを素早く交わす。  
そこにブロッサムが

ブロッサム「ブロッサム・シャワー!!」

ナイダ「What!?oh!!」

ブロッサム・シャワーがナイダに炸裂した。

ナイダ「おのれ、見ておきなさい!!ベイベエエエエエ!!  
!!!!!!」

ナイダは再び強烈な音色を放った。

マリン「うええええええ!!!!!!!!」

ブロッサム「頭がクルクルしますううう!!!!!!!!」

ナイダ「のってるかいベイバー!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

ルミナス「何であんなハイテンションなの作っちゃったんだろう・  
・はあ。」

つづく

第38話 大爆発！！（後書き）

次回、騒音だらけ



### 第39話 騒音祭（前書き）

さてさて話数は前作を超えようとしております。

### 第39話 騒音祭

ブロッサムとマリンはメデムの新たな幹部・ナイダと戦っていた。  
しかし

ナイダ「goだぜえ!!」

ナイダはギターを演奏し続けた。

ブロッサム「うううう」

マリン「あああう」

2人はそのギターの強烈な音色に圧倒されのびてしまっていた。

???「だりや!!」

ナイダ「ぎゃあ!!」

そこにレッドを除くダイナマンが駆けつけた。

ダイナピンク「大丈夫!？」

マリン「むっ、無理っばい・・・」

ブロッサム「ううう、レイさんが三人ですか?」

ダイナイエロー「駄目だこりゃ。」

ナイダ「おのれ〜！！You達、よくもmeの演奏を・・・」  
ダイナブラック「あんな騒音聞いてられないでござる!」

ダイナブル「どんな音が聞かせてやる!」

ダイナマンはナイダの周りに爆発を起こした。

ナイダ「ぎゃあ!!no!!meの演奏はこうだああ!!」

ナイダはまた演奏し始めた。

ブロッサム「ひえええええ!!」

マリリン「いやめてえええ!!」

ダイナピンク「やめなさい!!」

またまた爆発を起こした。

ナイダ「no!!no!!」

ナイダはまた演奏し始めた。

ダイナブラック「やめるでござる!」

また爆発

ナイダ「no!!no!!no!!」

演奏

ダイナブルー「負けるかああ!!」

爆発

ナイダ「no!!no!!no!!」

演奏

「プリキュア・大爆発!!」

爆発は全てを巻き込んだ。

ダイナマン・ナイダ「なあああああ!!」

マリン「ドカン!!ドカン!!ギューン!!ギューン!!うるさあ  
ああ!!嫌がらせか!？」

ブロッサム「実際私、自分の声もみなさんの声も聞こえません!!」

ダイナマン& amp ;ナイダ「すいません・・・」

そんな訳の分からないやりとりを止めたハートキャッチプリキュア、  
そして演奏や爆発音で溜まったストレスを発散させるように2人は  
ナイダを尋問にかける。

気づけばそこは暗い部屋になっており、机に椅子、そして机には1  
つのテーブル電気があり、ナイダは椅子に座りつばみはナイダの後  
ろにたたずみ、えりかは四角いメガネにちよびひげ、さらに2人は  
スーツを着ていた。

えりか「聞くわよ、あんた何なの？」

ナイダ「meはメデムの幹部のナイダだぜえベイバー!!」

ナイダはまたギターに手をかけたがえりかはギターを奪い壁に叩きつけぶち壊した。

ナイダ「no!! meのmy guitarが!？」

えりかはナイダの胸ぐらをつかみ電気を浴びせながら叫んだ。

えりか「しゃべり方とはかくそのテンション止めるゴルア!! そして二度とギター手にするなゴルアゴルア!!」

つぼみ「えりか!？キャ、キャラが違います!!」

ナイダ「イツ!？YES・・・」

ナイダは半分泣きべそかいていた、そして続けた。

ナイダ「meは先ほどもsayしとおりbadなgroup・メデムの幹部で・・・meはプリキュアをknock outして来いと命令を。」

つぼみ「誰がそんな事を？」

ナイダ「meが目を覚ました時にはそのようなwordが頭にうかんでただけ・・・」

そこにえりかはナイダの表情かは何かを悟り、また胸ぐらをつかみ

電気を浴びせた。

えりか「吐かんかいゴルアアアアア!!」

ナイダ・つぼみ「ひiiiiiiiiiii!」

ナイダとつぼみの2人はえりかの恐怖に絶叫せざるおえなかった。

えりか「悪いな、取り乱しちまったぜ・・・まあ、カツ丼でも食いな。」

・・・

北斗「・・・おい、その茶番いつ終わる？」

えりか「えへへ、ゴメーン一度やってみたかったんだよね、こういう刑事ドラマみたいな。」

つぼみ「話を戻します、あなたに命令したのは誰なんですか？」

ナイダ「・・・ルミナス様です。」

2人は驚愕した、仲間であるはずのルミナスが敵の組織の仲間になつてしていると知ったからだ。

えりか「何で・・・ルミナスが？」

つぼみ「信じられませんが、事実のようですし・・・」

レイ「その前にこいつどうする?」

洋介「研究所で管理しておこう。」

一同はナイダを縄で縛り上げ、研究所に連行した。

ナイダ「guitar弾きたいぜ、ベイベー。」

.....

ビッパ「ルミナスサマ、ナイダガトラエラレマシタ。」

ルミナス「分かったわ、下がって。」

ビッパはナイダがダイナマンに捕らえられたのを知り、ルミナスに報告した。

ルミナス「・・・仕方ないわ、他に幹部を・・・」

そこにゼバダがルミナスの後ろから話かけてきた。

ルミナス「わっ！！ゼバダか、びっくりさせないでよ。」

ゼバダ「ルミナスさん、あなたは私のためにメデムに入ったのですよね？」

ルミナス「そうよ。」

ゼバダ「ならもうこのような事はやめてください、私はなんの望み也没有ません。」

ルミナス「そんな事はできないわ、私はあなたを解放させたいの。」

ゼバダ「・・・実は私は近々メデムを脱退するつもりなんです。」

ルミナス「はあ！？何言つて・・・」

するとゼバダはルミナスに緑色のメダルを渡した。

ルミナス「これは？」

ゼバダ「私はあなたからも、奴からも離れます・・・これを私と思つて持つていてください、いずれ何か役に立つはずです。」

ルミナス「ゼバダ・・・」

ゼバダ「私がこんな気持ちを得られたのもあなたのおかげです・・・さあ、仲間の所へ。」

そしてゼバダはルミナスの目から姿を消した。

ルミナス「・・・バッタのメダル。」

・・・

ゼバダ「さて・・・これからどうしましょうか。」

その時、壁から鎖が放たれゼバダを拘束した。

ゼバダ「なっ！？これは！？」



すると声が響いた、モーファだった。

モーファ「ははは、愚かな奴だ。」

ゼバダ「モーファ！？」

モーファ「貴様にはまだ働いて貰わなくてはならない。」

ゼバダを拘束している鎖から強力なエネルギーが流れた。

ゼバダ「うわあああああああ！！」

・・・

その頃研究所・・・

ナイダ「hey、guitar弾かせてくれよ。」

竜「駄目でごさる！！」

えりか「そんなに弾きたいならアジト教えなさいよ。」

ナイダ「oh～no・・・」

こんなやりとりが4日が過ぎた。

夢野「みんな！！新たなダイナブレスができたぞ！！」

レイ「本当に！？」

夢野「まだ出来は分からないがなんとかな。」

つぼみ「やりました!!」

その時、えりかが血相を変えて一同に向かって走ってきた。

えりか「大変大変大変!! 大変よおおおお!!」

つぼみ「どうしたんですかえりか!？」

えりか「ナイダが縄ちぎってにげちゃったの!!」

一同「なああああああにiiiiiiii!!!!!!?????  
??」

つづく

第39話 騒音祭（後書き）

次回、大爆発！！

第40話 大爆発だあああ!!!!!! (前書き)

どーぞ

## 第40話 大爆発だああ！！！！

えりかからナイダが脱走した知らせを聞き、一同は急いでナイダを追う。

耕作「発信機が役に立ったな。」

レイ「ここよ！！」

そこには発信機が落ちていた。

つぼみ「ここで外れたんですね。」

えりか「まだ近くにいます！！」

そこにナイダが新たなギターを手に姿を現した。

ナイダ「ははは、さあ、liveのstart！！」

ナイダはギターを演奏し始めた。

えりか「ぎいやあああ！！」

北斗「前よりひどいぞ！？」

あまりの演奏に変身できない一同。

ナイダ「ヤッホオオオオオ！！！！」

その時、つぼみとえりかは何とか変身した。

「プツ、プリキュア・オオプンマイハアト!!」

演奏を止めずさらにエスカレートするナイダ。

ナイダ「最高だぜええええ!!」

しかし何とかナイダに攻撃するブロッサムとマリン。

ナイダ「oh!？」

マリン「ああ、耳なりやばいよ。」

ブロッサム「ギターを壊しましょう!!」

ナイダ「させないぜ、guitar・ボム!!」

ギターから音符が飛び出し爆発し2人を吹き飛ばした。

ブロッサム&amp;マリン「きゃあああ!!」

北斗達はダイナマンに変身し、ナイダに攻撃を仕掛ける。

ダイナブルー「たあ!!」

ダイナブラック「せい!!」

しかし音色の衝撃波が2人を吹き飛ばした。

ダイナブラック「うあー!!」

ダイナブルー「近づけない。」

するとブロッサムとマリンは必殺技で攻撃を仕掛ける。

「プリキュア・ダブルシュート!!」

ナイダ「無駄だぜえベイバー!! guitar・shoot!!」

ギターから音符が無数に飛び出し、ダブルシュートおろかプリキュアとダイナマンをも襲った。

ブロッサム&amp;マリン「きゃあああ!!」

ダイナマン「うああああ!!」

ナイダ「meにかなう奴はいないぜベイバー!!」

その時ブロッサムはあることに気がついた。

ブロッサム「そうだ、マリン!! さっきの・・・」

マリン「忘れてた! やってみよう!!」

ブロッサムとマリンは開発したダイナブレスを腕につけた。

ブロッサム「え〜と・・・どうやるんですか?」

マリン「とりあえずこのスイッチ押してみよう。」

2人はスイッチを押した。

ブロッサム「わわ！？体が光り出しました！？」

マリン「うわ！？姿が変わっていく！？」

2人の姿はみるみる変わっていった。

ダイナレッド「ついに力を得た！」

ナイダ「何だと！？」

ブロッサム「凄い姿ですね、あつ！名前名前・・・決めました！！」

マリン「私も決めた！！」

ブロッサム「大地を揺るがす一輪の花！！キュアボンバー！！」

マリン「津波を起こす一輪の花！！キュアバースト！！」

「ダイナマイト！！プリキュア！！」

ダイナピンク「私達も戦わないと！！」

ダイナレッド「おう！！」

「爆発！！科学戦隊ダイナマン！！」

ナイダ「負けないぜベイバー！！奥義・guitar big b



ang!!」

ギターの音色がとてつもない力を放った。

ボンバー「バースト!!行きますよ!!」

バースト「やるっしゅ!!」

2人は体に溜まった力を合わせた。

「プリキュア!!ダイナマイト!!大爆発!!」

その強烈なエネルギーはビッグバンを押し返し、ナイダを巻き込んだ。

ナイダ「そっ!そんな馬鹿なベイエエエエエエエ!!!!!!!!」

ナイダはその爆発で消し飛んだ。  
一同は変身を解いた。

つぼみ「ついにやりました!!」

えりか「やったね!!」

.....

その頃ルミナスはゼバダから貰ったメダルを指ではじきながら黄昏  
ていた。

ルミナス「・・・結局、何もしてあげられなかった。」

????「おい。」

ルミナス「何よバルイーグル！！大人しく牢屋で座ってなさいよ！！」

ルミナスが捕らえた太陽戦隊サンバルカンはメデムのアジトのルミナスの部屋の牢屋に入れられていたがどうやら暇らしい。

バルパンサー「ひよひよ、ルミナス怖いな。」

バルシャーク「ゼバダから聞いたよ、そんな過去があつたなんてな。」

ルミナス「そうよ、それなのにあんた達はゼバダを攻撃して・・・」

バルイーグル「あの時は仕方ないだろう？・・・まあ、良いや。」

ルミナス「何が？」

バルイーグル「何でもない、とりあえず・・・お前がゼバダを救ったんだ、ちゃんとあいつに何かしてやれたじゃないか。」

ルミナス「・・・ふん。」

ルミナスは部屋から出ていった。

バルイーグル「正直じゃないなあ。」

・ ・ ・ ・ ・

北斗「引き続きこの世界でメデムについて調べるのか？」

えりか「うん、多分他の人もそうしてるだろうし。」

つぼみ「頑張ります!!」

レイ「頼もしいわね。」

2人はダイナマンの世界で調査を続けるらしい。

つづく

第40話 大爆発だああ！！！！（後書き）

ダイナマン何もしてない気が・・・まあ良いや。

???「そういうところイライラするんだあよお。」

ターザン「ひっ！？朝倉！？」

朝倉「俺は本編にでるのかあ？」

ターザン「出ないよ。」

朝倉「祭を始めよう。」

ターザン「ぎゃああああああ！！！」

## 第41話 時間の戦士（前書き）

タイムレンジャーは小さい頃主題歌わからなくて「ベッ」やら「デ  
イ」とか言って歌ってた記憶があります。

もうあれから十年、早いものですね。

## 第41話 時間の戦士

美希&amp;せつなside・・・

せつな「美希、ここ何？」

美希「何も・・・ない？」

そこは何もない「無」だった。

色も音も景色も何もない、存在するのはせつなと美希だけだった。

美希「これが戦隊の世界？」

せつな「可笑しいわ、一体何が・・・」

そこにある若者の声が聞こえてきた。

???「そこは何もない未来・・・」

美希「だっ！誰!？」

辺りを見渡すがどこもかしこも「無」だった。

???「過去・・・そこに答えが・・・ある。」

せつな「過去？どういう事!？」

しかし声は消え、戸惑い始める2人。  
するとせつなは

せつな「もしかしてこの世界の過去に何か起こったんじゃない……」

美希「だからこの世界の未来は無になったって事？」

確かに納得できる推測だった。

せつなはアカルンを取り出す。

せつな「アカルンで過去に行ってみよう。」

美希「でも過去って言うてもどのくらい前の過去に行けば……」

????「1000年よ。」

せつな「え？」

そこには1人の茶色い服の女と髪が白い男がいた。

????「1000年前に行けば良いんだよ。」

美希「あなた達は？」

????「私はユウリ、あなた達が探しているタイムレンジャーのタイムピンクよ。」

????「僕はシオン、タイムレンジャーのタイムグリーン。」

2人は驚愕した、初対面の相手が自分達の目的を知っていたからだ、話によると自分達もよく分からなく頭に2人が来るという情報が入ってきたという事らしい。

ユウリ「私達は西暦3000年の未来人なの。」

美希「さっ！3000年・・・」

シオン「僕達は未来を変えるために1000年前の世界に行って、そこで出会った人と一緒にタイムレンジャーとして過去で戦っていたんだ。」

ユウリ「無事に未来は変えたのだけど、その未来は私達も誰も知らない・・・だからこんなふうに何も無いの。」

せつな「つまり、未来を知れば何かが生まれる？」

シオン「そう、そしてプリキュアと協力すれば未来を知る事が出来ると思ったんだ・・・まだ3人仲間がいるんだ、1人は1000年前のひと2人は僕達と同じ未来人、後から過去で合流するんだ。」

せつな「じゃあ先かどうか分からないけど1000年前に行きましよう。」

せつなはアカルンをつかい、自分、美希、ユウリ、シオンと共に過去に行った。

・・・

その頃ルミナスはまた新たな幹部を作っていたのだがふと手が止ま



る。

ゼバダ（あなたのおかげです。）

（さあ、仲間の所へ。）

ルミナスの頭にゼバダの言葉がぐるぐるとまわる。

ルミナス「・・・だあー！もうー！！イライラする！・・・幹部は出来たし、部屋に戻ろう。」

ルミナスは部屋に戻ると

ルミナス「なっ！？」

牢屋の中のサンバルカンが変身を解き、食事のたくあんをボリボリと食べながら寝そべっていた。

ルミナス「どんだけリラックスしてんのよ！？」

欣也「だって暇なんだもん。」

ルミナス「だからってここは私の部屋よ！？」

高之「へえ。」

高之がルミナスを見るなり何か関心した。

ルミナス「なっ、何よ？」

高之「お前も・・・ゼバダみたいに、改心しかけてるな。」

ルミナス「はあ!？」

朝夫「確かに前までは我とかなんとか言ってたけど・・・」

欣也「今は元の口調に戻りかけてるな。」

ルミナスは少し顔を赤くした。

ルミナス「うつ!うつさい!!ふん!」

ルミナスは何やら次元を開いた。

朝夫「何これ?」

ルミナス「サンバルカンの世界に戻れば?あんだ達がいるとますますイライラするわ!!」

高之「良いのか?勝手に・・・」

欣也「お前は どうする?ゼバダもいなくなつて、ここで何するんだ?」

ルミナス「関係ないでしょ!?!早く行け!!」

高之達は「やれやれ」と思いながら次元をくぐり抜けサンバルカンの世界に戻った。

ルミナス「・・・元の自分・・・か。」

・・・

西暦2000年・・・

せつな「凄い、1000年さかのぼるとこんなに変わるのね。」

美希「さっきの世界が嘘みたい・・・」

そこは先ほどの風景とは比べものにならず、人、建物、自然、全て活気溢れていた。

シオン「とりあえず・・・」

???「なっ!？」

シオン「え？」

そこに1人の若者が口をぱっくりと開け突っ立っていた。

シオン「た・・・」

ユウリ「た・・・」

「竜也あああああ!（さああああん）!!!!!」

2人はその若者に飛びついた。  
その若者は竜也と名前らしい。

竜也「何で2人が!?!未来に帰ったはずじゃ!?!」

せつな「あの・・・」

竜也「ん？」

美希「私達が説明します。」

とりあえず一同は状況を説明した。

竜也「はは、またまた厄介な・・・じゃあこの前見た変なのが関係してるのかも。」

ユウリ「どういう事？」

竜也「この間変な戦闘員が俺を襲ってきてさ・・・なんとかまいたけど。」

その時、再びあの声が聞こえてきた。

???「それは悪の組織・メデムの戦闘員ビッパーだ。」

せつな「またあの声！」

すると竜也とユウリとシオンは真っ先に反応した。

竜也「この声・・・まさか!？」

ユウリ「そんなはずは!？」

シオン「でもこの声は確かに!！」

美希とせつなはなにがなんだかさっぱりわからなかったがその声の主に尋ねた。

美希「ねえ、メデムって何？」

???「メデムは世界を破滅させ新たに世界を作ろうとする組織だ、今仲間のルミナスがその組織に入ってしまった。」

せつな「ルミナスが・・・どうして」

???「はメデムの幹部について説明した。」

そしてルミナスがメデムに入った事も説明した。

美希「どうにかしないと。」

???「では、これで・・・」

そして声は消えた。

竜也「あの声は間違いなくあいつだ。」

せつな「声の主を知ってるんですか？」

シオン「うん、でも今は言わないでおくよ。」

ユウリ「色々あったから。」

美希「わかりました、じゃあ残りの2人を探しましょう。」

・・・・・・・・

その頃・・・

モーファ「サンバルカンを逃がしたか。」

ルミナス「悪いわね、でも新しい幹部を送り込んだから。」

モーファ「そうか、期待しているぞ。」

ルミナス「・・・・・・・・」

ルミナスはただ黙っていた、ゼバダがいない今自分は何のためにメデムに身を置いているかわからなかったからだ。  
だが、彼女はまだ本当の事実を知らない・・・。

つづく

## 第41話 時間の戦士（後書き）

果たしてルミナスの知らないメデムの実態とは！？

## 第42話 時の魔人（前書き）

なんかイエスタデイ・ドリーパントみたいな奴登場です。



## 第42話 時の魔人

ルミナスは新たに作った幹部をタイムレンジャーの世界に送り込み自分の部屋で一息つくはずだったが・・・

ルミナス「私・・・何でメデムに入ったんだっけ？」

やはりゼバダがいない今自分がメデムにいる意味はあるのかと考えていた。

確かにプリキュアと戦隊には憎しみはあるがその感情は当初よりかなり薄れていた。

ゼバダがメデムに入った意味そのものだったからだ・・・その頃、モーフアの間では

モーフア「ルミナスにはもうしばらく監視をつけておこう。」

ビッパ「キキッ!!」

モーフアは心を闇にしメデムに入っただとしてもルミナスは元はプリキュアの仲間、あらかじめ監視をつけておいた。

モーフア「ふふっ、これから面白くなりそうだな・・・ゼバダよ。」

ゼバダ「・・・ソウデスネ。」

そこにはメデムを辞めたはずのゼバダがいた、しかし以前のゼバダとは違っていた。

・・・

その頃美希達は竜也達の会社で話していた・・・

美希「うーん、そのクロノチェンジャーっていうのは私達には使えないの？」

ユウリ「使えなくはないけどもうないのよ私達5人の分しか作らなかったから。」

せつな「時の力が・・・やっぱり時間を操れるのかな？」

シオン「どうだろう？」

竜也「よし、こうなったら・・・」

一同「こうなったら？」

一同に緊張が走る。

竜也「腹ごしらえしよう。」

一同は新喜劇のように崩れ倒れる。

一同はとりあえず外に出たその時

????「ダ〜イム!!」

竜也「のわ!!なんだあ!？」

そこにはルミナスが送り込んだ新たな幹部・ダイムがいた。

ダイム「俺はダイムだダイム、お前達を倒すダイム!!」

美希「倒されるのはあんたよ!!せつな!!」

せつな「うん!!」

「チェインジ!!プリキュア・ビートアップ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし、摘みたてフレッシュ!!キュアベリー!!」

「真っ赤なハートは幸せのあかし!!熟れたてフレッシュ!!キュアパッション!!」

すると竜也、ユウリ、シオンは突然服を脱ぎ捨て奇妙な全身タイツのような姿になった。

パッション「ええ!?!」

ベリー「何その格好!?!」

「クロノチェンジャー!!」

2人が驚愕しながら竜也達は変身した。

竜也「タイムレッド!!」

ユウリ「ピンク!!」

シオン「グリーン!!」

???「ブルー!!」

???「イエロー!!」

「タイムレンジャー!!」

タイムレッド「……ってあれえ!？」

そこには残りのタイムレンジャーのタイムイエロー・ドモンとタイムブルー・アヤセがいつの間にかいた。

タイムグリーン「いつの間に……」

タイムイエロー「まあまあ細かい事は気にしない。」

タイムブルー「来るぞ!!」

ダイムは手から黄色い光線を放ち、ベリーに直撃した。

ベリー「きゃっ!!」

パッション「ベリー!?大丈夫?」

しかしベリーの様子が可笑的い。

ベリー「何も……ない?」

パッション「ベリー?」

ベリーが何やら聞いた事のある言葉を言った。

ベリー「ここが戦隊の世界？」

タイムレッド「おいおい、どうなってんだあ？」

ベリー「だっ！だれ！？」

タイムピンク「まさかあの光線は！？」

ダイムが嬉しそうに説明し始める。

ダイム「その通りダイム！！俺の黄色い光線は人に少し前の行動をさせられるのダイム！！」

タイムグリーン「どうすれば元に戻るんだ！？」

ダイム「今までにたどり着くまで戻らないダイム！！」

パッション「ええ！？どうすれば！？」

ダイム「隙ありダイム！！」

ダイムは今度は紫色の光線をパッションに向けて放った、タイムレッドがパッションをかばい光線を浴びた。

タイムレッド「うわああ！！」

パッション「竜也さん！！」

タイムレッドがゆつくりと立ち上がるが

タイムレッド「あれ？なんだ！？腰が・・・痛い！？」

ダイム「ははは！！紫色の光線は老化効果のある光線ダイム！！」

タイムピンク「この！！」

パッション「はあ！！」

タイムピンクとパッションが攻撃をしかける。

タイムイエローとタイムブルーがダイムの後ろから追い討ちをかける。

ダイム「ダイム！！」

ダイムは今度は緑色のバリアーのようなものはった。

よろけながらダイムに近づいたタイムレッドを含め5人はバリアーに触れた。

タイムピンク「きゃあ！！？」

パッション「あああ！！？」

タイムブルー・イエロー・レッド「うわああ！！」

ダイム「はははは！！未来に飛ばしてやったダイム！！」

タイムグリーン「たあ！！」

タイムグリーンは重火器・ボルユニットでダイムを攻撃し、怯んだ隙にベリーを連れて身を退いた。

・・・・・・・・

未来・・・

一同は変身が解けてしまっていた。

せつな「また何も無い所に・・・」

竜也「これが未来か・・・痛た、腰が。」

ユウリ「でもせつなのアカルン・・・だっけ？それを使えば戻れるんじゃない。」

せつな「そうだわ・・・ってあれえ？」

ドモン「どうしたんだ？」

アヤセ「まさか・・・」

せつな「アカルンが・・・ない!？」

「ええええええええええ!？」

そう、ダイムの緑色のバリアーに触れた反動でパッションはアカルンを落としてしまったのだ。

せつな「どうしよう、これじゃあ戻れない。」

.....

その頃・・・

ベリー「ブルーのハートは希望のしるし、摘みたてフレッシュ！！  
キュアベリー！！・・・ってあれ？」

シオン「あつ、治った。」

ベリーは変身を解き状況を把握したかったがなにがなんだかさっぱりわからなかった。

美希「わっ、私何してたの!？」

シオンは今ある状況を説明した。  
すると美希は顔を赤くした。

美希「つまり私はずっと1人であなた達に出会う前から今までの出来事をしゃべってたの?」

シオン「そう・・・なるね。」

美希「／／／／、絶対許さないわあの時計怪人!!」

つづく



## 第42話 時の魔人（後書き）

タイムファイヤーは出たとき、色じゃない!?!?ってびっくりしました。

### 第43話 時の助っ人と力（前書き）

ダイムの特徴言い忘れてました

- ・ 語尾に「ダイム」をつける怪人

- ・ 腹に大きな時計、針を動かす事で時を操れる。

- ・ 大柄

### 第43話 時の助っ人と力

ダイムは町中で暴れまわっていた。

町の人「うわああ！何でカレーうどんががカレー粉と小麦粉に！？」

町の子供「うわああん！！ゲームの記録消えちゃったあ！！せつかく伝説のポケ ン捕まえたのに！！！」

町の子供「プラモが最初から出来てる！？」

町中時間が戻ったり進んだりで大パニックになっていた。

ダイム「はははははは！！楽しいダイム！！！」

美希「やめなさい！！！」

ダイム「ん？」

そこに美希とシオンが駆けつける。

シオン「クロノチェンジャー！！！」

美希「チェインジ！！プリキュア・ビートアップ！！！」

2人は変身しダイムに立ち向かう。

ダイム「無駄だダイム！！！」

ダイムは黄色い光線を放った。  
2人は光線をかわした。

ベリー「悪いの悪いの飛んでいけ！！プリキュア・エスポワールシヤワー！！」

ベリーの必殺技がダイムに直撃する。

ダイム「ぐっ！！」

タイムグリーン「ボルユニット！！」

タイムグリーンはボルユニットでダイムを撃ち抜く。

ダイム「ダイム！！怒ったダイム！！」

ダイムは赤い光線を2人に放った。  
範囲が予想以上に広く直撃してしまった。

ベリー「きゃあ！！」

タイムグリーン「うわあ！！」

すると2人は動く事が出来なくなった。

ベリー「うっ！動けない！？」

タイムグリーン「赤い光線は時間を止めるんだ！！」

ダイム「その通りダイム！！」

ダイムは次は黒い光線を放ち、2人を攻撃する。  
黒い光線は攻撃専用のようなのだ。

ベリー「きゃあ!!どうすれば!?!」

タイムグリーン「落ち着いて!!さっきの事、忘れた?」

ベリー「・・・あつ、そうだったわね。」

ダイム「何をごちゃごちゃとぬかしているダイム・・・!?!」

その瞬間、動けるようになったベリーとタイムグリーンは瞬時にダイムの懐に移動し、そして腹の時計の針を動かした。

ダイム「あああ!?!やめるダイム!!」

その時、ある次元が開かれそこから未来に移動させられた5人が現れた。

竜也「ふう、戻ってきた・・・腰が。」

せつな「作戦成功ね。」

ダイム「何故!?!何故ダイムの秘密を!?!」

ベリー「そんな大きい時計お腹につけてたら普通わかるわよ。」

・・・

少し前・・・

竜也「そろそろ腰が限界だ・・・」

せつな「アカルンがないと私達でれないわよ？」

5人は未来で途方にくれていたその時

???「みんな!!」

ユウリ「え!？」

そこには映像が現れ、美希とシオンが映し出されていた。

ドモン「おお!？なんで!？」

アヤセ「どうなってんだ？」

シオン「プリキュアの力を僕の作った機会に組み込んで時間を超えて交流できるようにしたんだ。」

せつな「凄い・・・美希？アカルンをどこかで落としてしまって、拾ってない？」

美希「アカルンを？」

シオン「大丈夫、さつき途中で拾って置いたよ、でもそっちに送りたいけど無理みたいだ。」

ユウリ「じゃあどうするの?」

シオン「実は気づいた事があるんだ。」

アヤセ「何だ？」

シオン「ダイムのお腹の大きい時計、美希に光線を浴びせた時長針が逆回りして、みんなを未来に送ったとき短針が回ったんだ。」

美希「つまり、ダイムが時間を操るにはお腹の時計を回す必要が？」

シオン「そう、だから僕達があの時計を回せばみんなをここに帰らせる事ができるかもしれないって事。」

.....

竜也「見事にビンゴってわけだ!!」

ダイム「ていうかお前自分で気づいてるとか言って気づいてなかったんじゃないかダイム!!」

ベリー「そんな事どうでも良いのよ!!私に恥をかかせた事後悔させてやるわ!!」

竜也「行くぞ!」

一同は変身しダイムに立ち向かう。

ダイム「許さないダイム!!」

タイムレッド「腰痛も気づいたら治ってたぜ!!」

ベリー「プリキュア・エスポワールシャワー!!」

ベリーの必殺技がタイムを襲うが

タイム「ダアアイムウウ!!」

タイムは黒色の光線を放ちエスポワールシャワーを打ち消した。

タイムレンジャー「ボルユニット!!」

タイムレンジャーはボルユニットを一点に集中して放ち威力を倍増させタイムに放った。

タイム「ダアアイムウウ!!」

しかしタイムは赤い光線を放ち攻撃を打ち消し、その光線は一同を襲った。

タイムレッド「なっ!?!体が・・・」

パッション「動かない!?!」

ベリー「またこれ!?!」

そしてタイムは黒い光線を出し一同を吹き飛ばした。

一同「うわああああ!!」



ダイム「はははははは！このままたばるダイム！」

タイムイエロー「くっ、どうすれば・・・」

タイムレッド「せめて・・・あいつがいてくれれば・・・」

ダイムが再び黒い光線を放とうとしたその時

???「長針を回せ！！」

またあの声が聞こえた。

ベリー「また！？」

???「ダイムの長針を逆回りに回せ！！」

パッション「一体何なの！？」

タイムレッド「一か八かやってみよう！！」

タイムレンジャーは素早く移動しダイムを押さえつけ、プリキュアはダイムの長針を逆回りに回した。

???「やっと出番だ。」

すると声のする方が光輝く。

タイムレッド「なっ！？何だ！？」

???「プリキュア！！必殺技を光に放て！！」

ベリー「なにがなんだか・・・」

パッション「とりあえずやってみよう!!」

ベリーはベリーソードでプリキュア・エスポワールシャワー・フレッシュを

パッションはパッションハープでプリキュア・ハピネスハリケーンを光に向かって放った、光はいつそう激しく輝き人の形に変わっていった。

ダイム「何だダイム!？」

タイムイエロー「まさか!？」

タイムグリーン「間違いないよ!!」

タイムレッド「直人!!」

そこにはかつてタイムファイヤーとして戦い、死ぬ間際に竜也に自分の変身アイテムを託した滝沢直人だった、ダイムとプリキュアの力で蘇ったのだ。

直人「久しぶりだな。」

タイムレッド「直人、嬉しいよ!!」

直人「ふん、それより・・・ん。」

直人はタイムレッドに手を差し出す。

タイムレッド「へ？」

直人「ブイコマンダーだよ！！」

タイムレッドは「あ！！」という形相でブイコマンダーを直人に投げ渡す、その勢いで直人はブイコマンダーを装着する。

直人「タイムファイヤー！！」

直人はコマンドを入力しタイムファイヤーに変身した。

タイムファイヤー「D Vディフェンダー！！D Vチェンジ！！」

タイムファイヤーは専用武器・D Vディフェンダーをディフェンダーガンに変形させる。

タイムファイヤー「プリキュア、武器を構える。」

プリキュアは一瞬戸惑ったが言われた通りに武器を構える、するとタイムファイヤーはディフェンダーガンをベリーソード、パッションハープに光線を当てた。

ベリー「ちよっ、何を！？」

しかし武器は光輝いていた。

パッション「これは！？」

タイムファイヤー「竜也、お前達もやれ。」

タイムレッド「おつ、おう!!」

タイムレンジャーは5人共にボルユニットを構えプリキュアの武器目掛けて放った、プリキュアの武器は神々しい光が放たれた。

ベリー「すつ、凄い力!？」

パッション「これは・・・時の力!？」

そう、2人は武器にタイムレンジャーの技の力を吸収させることで時の力を手に入れた。

ダイム「無駄ダイム!!」

ダイムは再び黒い光線を放ったが

タイムファイヤー「させるかよ!!」

タイムファイヤーはディフェンダーガンをバルカンモードに切り替え光線を連射し黒い光線を打ち消した。

タイムファイヤー「一発でダメなら十発、十発でダメなら百発つてな。」

タイムレンジャー「ボルユニット!!」

タイムレンジャーはダイムが怯んだ隙にボルユニットで腹の時計を破壊した。

ダイム「ダイム!？」

タイムレッド「今だ!！」

プリキュアの2人は時の力を使った。

ベリー & パッション「悪いの悪いの時空の彼方へ飛んでいけ!」

プリキュアは光輝く武器をダイムに向けた。

「プリキュア!!!タイム・ストリーム!」

2つの武器から光線が放たれ、その光線は合体し時計となり長針と短針が高速に回りはじめ強烈なエネルギーの竜巻が起こった。

ダイム「ダツ!?!ダイムウウウウウ!」

ダイムは吹き飛ばされ空の彼方で爆発した。

ベリー「やったあ!」

パッション「ついに、手に入れた!」

タイムレンジャーとプリキュアは変身を解き、互いに喜びあった。

ついにひかり、いつきを除くプリキュアは戦隊の力を手に入れた、しかしまだ苦悩があるとは誰も知らなかった。

u u u  
< u >

### 第43話 時の助っ人と力（後書き）

次回、プリキュア集合！！

近々オリジナル戦隊登場させる予定なのですが皆さんの意見を聞きたいと思います。

作者オリジナル戦隊登場についてどう思いますか？

第44話 ルミナスを取り戻せ！！（前書き）

キャラ被ったかも



#### 第44話 ルミナスを取り戻せ！！

それぞれ戦隊の力を手に入れたプリキュア達はその頃・・・

ゲキレンジャーの世界

くるみ「え！？gogogo拳で時空を超えられるの！？」

シャーフー「そうじゃ、お互いの技をぶつけ合い次元をこじ開けるのじゃ。」

マスターシャーフーは手持ちのトライアングルを鳴らした。

ジャン「お前達力チ力チからヤワヤワになった！！俺達見送る！！」

かれん「みんな、お世話になりました。」

かれんとくるみはみんなに見送られながら変身しgogogo拳をぶつけ合い次元をこじ開け、次元に飛び込んだ。

ギンガマンの世界

のぞみ「これから私達どうすれば良いんだろい？」

リョウマ「確かに・・・」

その時、声が響いた。

????「星獣の力を使うんだ。」

りん「誰！？って木がしゃべったあ！？」

サヤ「言い忘れてたね、こちらは知恵の樹モーク、私達の仲間よ。」

リヨウマ「色んな事を教えてくれるんだ。」

のぞみは「ハッ」とした。

のぞみ「じゃああの時星獣について教えてくれたのって・・・」

りん「モークって事になるね。」

モーク「プリキュア、星獣の力で次元を超えるんだ。」

その時、伝説の星獣・ギンガイガー、ギンガラゴンが吠えた。

のぞみ「ギンガイガーどうしたの？・・・俺達に任せろ？」

りん「ギンガラゴン？・・・次元を超えるのは朝飯前だ、だって。」

リヨウマ「見送るよ、また何かあったら駆けつける。」

のぞみ「ありがとう！！」

りん「頑張るわ！！」

2人は星獣と共に次元を飛んだ。

マジレンジャーの世界

こまち「お寿司おいしかったです。」

翼「とほほ、財布空っぽ。」

ヒカル「君達はこれからどうするの？」

うらら「みんなの所に戻ります、魔法で移動します。」

魁「頑張つて！！すぐに応援しに行くから！！」

こまち「ありがとうございます。」

2人は魔法の力で次元を飛んだ。

ターボレンジャーの世界

力「すぐに行くのか？」

咲「はい。」

舞「必ず世界を救ってみせます。」

いつき「僕もできる限りの事はするよ。」

力「気をつけろよ。」

咲、舞はいつきと共に妖精の力で次元を飛んだ。

マスクマンの世界

タケル「準備はできた？」

ラブ「はい、必ずみんなで幸せをゲットしてきます。」

祈里「必ずできるって私信じてる。」

モモコ「私達も信じてるわ。」

2人はオーラパワーで次元を開き飛び込んだ。

ジェットマンの世界

竜「みんな無事を祈るよ。」

凱「頑張れよ。」

なぎさ「はい。」

ほのか「みんなや伝吉さんのためにも頑張ります。」

2人は鳥の力で変身し次元を開きその翼で次元を飛んだ。

ダイナマンの世界

北斗「必ず生きろよ。」

つばみ「当たり前です！」

えりか「死んでも死にきれないわよー!!」

北斗「頑張つて!!」

2人は爆発の力で変身し爆発を起こし次元を切り開き次元を飛んだ。

タイムレンジャーの世界

竜也「信じてるよ。」

美希「はい、絶対に世界を救います。」

せつな「行くわよ。」

2人は唯一戦隊の力ではなくアカルンで次元を渡った。

一同が行き着いた場所、血祭りドウコクと激戦を繰り広げた場所、つまりそれぞれ戦隊の世界に飛んだ場所だ。

かれん「みんな!!無事で良かった!!」

のぞみ「うわあ!!みんな元気そうで何よりだよお!!」

せつな「どうやらみんな力を手に入れたみたいね。」

いつき「・・・実はその件で言わなきゃいけない事があるんだ。」

咲「いつき・・・」

つばみ「何ですか?」

こまち「そっいえばひかりさんは?」

いつきは自分はまだ戦隊の力を手に入れていない事、そしてひかりがメデムの幹部になってしまった事を伝えた。

のぞみ「そんな!!」

いつき「既に知ってる人もいるんだ。」

せつな「うん、戦隊の世界で聞いたわ。」

祈里「なら早く取り戻さなきゃ!!」

???「その必要はないわ。」

一同「!?!」

一同は聞いた事のある声を聞き振り向いた、その先にはルミナスがビッパ―軍団と共にいた。

りん「ルミナス、なんて姿に・・・」

えりか「必ず元に戻すわよ!!」

「デュアル・オーロラウェーブ!!」

「デュアル・スピリチュアルパワー!!」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ・トランスレイト!!」

「チェインジ！！プリキュア・ビートアップ！！」

「プリキュア・オープンマイハート！！」

一同はプリキュアに変身しビッパ―軍団を蹴散らす。  
いくら数が多くてもビッパ―はプリキュアの敵ではなかった。

ルミナス「へえ、なかなかやるわね・・・でも！！」

ルミナスは暗黒の波動でプリキュアを吹き飛ばした。

プリキュア「きゃああああ！！」

ルミナス「さあ、自分達の愚かさに気づきなさい！」

そこにドリームが

ドリーム「聞いたよ・・・メデムの幹部の・・・過去の事・・・」

ルミナス「ならわかるでしょ！？あなた達が何を相手に戦っていたか！！」

しかしブラック、ブルーム、ドリーム、ピーチ、 Blossam が

ブラック「でも、その幹部の中には・・・私達と許しあえる人もいた！」

ブルーム「私達は幹部がどんな人か分からないけど・・・でも、あなたのやり方は間違ってる！！」

ドリーム「幹部の人達もかわいそうだけど、どうしてその時みんなに相談しなかったの!？」

ピーチ「あなたは前しか見えなかった、だから道を間違えた!！」

ブロッサム「まだ間に合います!！」

ルミナスは震えていた。

ルミナス「何よ・・・話も聞かず・・・ゼバダを痛めつけて・・・そのうえ説教?・・・ふざけないで!！」

ルミナスは手をかざし暗黒のエネルギー弾を連射した。

あまりの多さにプリキュアはかわしきる事ができなかった。

ルミナス「あんた達なんか!!あんた達なんか!!あんた達なんか  
あああ!！」

ルミナスが攻撃を止めた時にはプリキュア達は倒れ動けなかった。

ホワイト「く・・・どうすれば・・・」

イーグレット「このままじゃ・・・」

ルミナス「はあはあ、あなた達なんか・・・消えてしまえ!！」

ルミナスが手から巨大な暗黒のエネルギー球を作り出しプリキュアにとどめをさそうとしたその時、サンシャインが前に出る。



マリン「サンシャイン!？」

サンシャイン「ルミナス!!目を覚まして!!」

ルミナス「目を覚ませ?笑わせないで!!全部あんな達のせいなのよ!!」

ルミナスはエネルギー球をプリキュアに向けて放った、サンシャインはサンシャイン・イージスで受け止める。

サンシャイン「くっ!!・・・うう!？」

しかし威力は絶大、触れた瞬間にサンフラワー・イージスに亀裂が走った。

パイン「無理しちゃ駄目よ!!サンシャイン!!」

サンシャイン「大丈夫!!・・・くっ!!」

ルミナス「馬鹿ね、さっさと消えなさいよ!!」

サンシャイン「ルミナス!!あなたの心の闇・・・私の光で照らしてみせる!!」

ルミナス「やってみなさいよ!!」

ついにはサンフラワー・イージスは砕け散りサンシャインとプリキュアもろともエネルギー球の餌食になってしまった。

プリキュア「きゃああああああああああ!!!!!!!!」

プリキュア達は既に限界に近づいていた、戦隊の力を使えばもしかしたら勝てるかもしれないがその力は邪悪な存在を倒すために手に入れたもの、仲間を傷つけるために使ってはいけないとプリキュアは思っていた。

ルミナス「あんた達がいかに愚かで・・・残虐な存在か・・・あの世で実感しなさい!!」

ルミナスがまた同じ技を使おうとしたその時

???「待て待て!!」

ルミナス「!？」

何やら赤い服を着た青年が現れた。

???「駄目だつて、仲間傷つけたら・・・少し穏便に。」

ルミナス「なつ、何よあんた!？」

すると気づけばルミナスは5人の若者に囲まれていた。

一人は赤い服を着た見るからにマイペースな男

一人は青い服を着た非常にぶりっこな女

一人は黄色の服を着た冷静な男

一人は緑の服を着た小太りな見るからに食いしん坊な男

一人は白い服を着た礼儀正しい女がいた。

ドリーム「だつ、誰!？」

ベリー「見た事ない・・・人達？」

ルミナス「あんた達何なの？」

「???」俺？俺は炎次だよ。  
「

「???」私は波香です  
「

「???」俺は・・・雷人だ。  
「

「???」おらは森太郎って言いますねん。  
「

「???」私は雪恵と申します。  
「

ルミナス「名前じゃないわよ！！部外者は引っ込んでなさいよ！！」

炎次「それはできないよ、どの世界でも地球を汚す奴は俺達が許さない。」

波香「それにあなた自分の間違いに気づいてないんでしょ？」

雷人「なら、俺達がプリキュアの代わりにあんたを元に戻すまでだ。」

森太郎「おら達に任せておくんなせえ。」

パイン「待つて！あなた達一体！？」

雪恵「今にわかります。」

ルミナス「だああ！！イライラする！！何なのあんた達！！」

炎次「母なる大地・地球を守る戦士だ！！行くよみんな！！」

炎次達は何やらそれぞれ色の付いた正四角形のメモリを取り出し、腕のプレスにはめ込みふたを閉じ、スイッチを押した。

つづく

第44話 ルミナスを取り戻せ！！（後書き）

ついにオリジナル戦隊登場！！

## 第45話 属性戦隊（前書き）

俺の夢が叶った！

## 第45話 属性戦隊

炎次達はメモリをプレスにはめ込みふたを閉じ、スイッチを押した。

「エレメンジャー！！トランスフォーム！！」

それと同時に炎次達の体が輝いた。

ドリーム「なっ、何！？」

ルミナス「何よあれ！？」

炎次の体は炎に包まれ赤い体に頭部は黒いV字のゴーグルが付いた赤のヘルメットに包まれた。

炎次「燃えたぎる炎！！フレイムレッド！！」

波香は波に包まれ水色の体に、頭部は水色に丸みをおびた黒いV字のゴーグルがついたヘルメットに包まれた。

波香「打ちつける波！！ウェイブブルー！！」

雷人の体は雷に包まれ黄色の体、頭部は黄色に尖った形の黒いV字の形をしたゴーグルのついたヘルメットに包まれた。

雷人「降り注ぐ雷！！エレキイエロー！！」

森太郎は木の葉に包まれ緑色の体、頭部に緑色でV字ではなく丸い楕円形のゴーグルがついたヘルメットに包まれた。

森太郎「広がる緑の森！！ジャングリン！！」

雪恵は体が吹雪に包まれ白い体に、頭部は白く黒いひし形が2つつきV字になっているゴーグルがついているヘルメットに包まれた。

雪恵「凍てつく雪！！スノーホワイト！！」

フレイムレッド「母の力は属性の源！！属性戦隊！！」

「エレメンジャー！！」

そこには見たことのない戦隊が現れた。

ルージュ「見たことない戦隊・・・」

ローズ「属性戦隊・・・」

パッション「エレメンジャー・・・。」

ルミナスは戸惑っていた。

ルミナス「何なの！？あんた達はデータになかった！！」

エレキイエロー「データ？知らねえよそんなもん。」

ジャングリン「おらたちはどの世界でも、その世界を滅ぼそうとする奴らを許さないんだあ。」

ウェイブブルー「あなたは心を閉ざしちゃったんでしょ？」



スノーホワイト「プリキュアの皆さんは休んでいてください。」

フレイムレッド「君の心は必ず開いてみせる!!」

エレメンジャーは戦闘体制にはいる。

ルミナス「やってみなさいよ!!」

ルミナスはビッパ軍団を再び呼び出した。  
エレメンジャーはビッパ軍団に飛び込む。

フレイムレッド「ふっ!はっ!!」

ウェイブブルー「えい!!とお!!」

ジャングリーン「多いでやんす!!」

エレキイエロー「確かに素手じゃきついかもな。」

スノーホワイト「炎次さん!!あれを使いましょう!!」

フレイムレッド「よし!!行くよ!!」

エレメンジャーはブレスの変身の際に押したスイッチとは違う色のついたスイッチを押した。

するとブレスからそれぞれ武器が出てきた。

フレイムレッド「炎の追撃!!フレイムランス!!」

ウェイブブルー「波の強襲！！ウェイブバズーカ！！」

エレキイエロー「雷の打撃！！エレクトンファア！！」

ジャングリーン「森の怒り！！ジャングルハンマー！！」

スノーホワイト「吹雪の斬撃！！スノーツインソード！！」

フレイムレッドは炎の赤い模様が彫られている槍

ウェイブブルーは体系に似合わない大きな水色のバズーカ

エレキイエローは2本の黄色い雷の模様が彫られているトンファア

ジャングリーンは大きな緑色のハンマー

スノーホワイトは2本の白く刃が灰色の双剣を  
手にとりビッパ軍団を一掃する。

フレイムレッド「てやあ！！」

ウェイブブルー「どかんどかんどか〜ん！！」

エレキイエロー「ふっ！てい！！」

ジャングリーン「どすこいどすこいどすこい！！」

スノーホワイト「えい！！はっ！！」

エレメンジャーはあっという間にビッパ軍団を全滅させた。

アクア「なんて強いのか？」

パイン「あっという間に全滅させちゃった。」

ルミナスは怒りに震えていた。

ルミナス「くっ！・・・消えなさい！！」

ルミナスは暗黒のエネルギー球を連射しエレメンジャーを襲うが

ジャングリーン「まかせるでやんす！！」

ジャングリーンは前に立つ。

ルミナス「受け止める気？馬鹿じゃないの！？」

しかしジャングリーンはジャングルハンマーを持ち大きく振りかぶる。

ジャングリーン「どす！！こおおおおおい！！」

ハンマーを地面に叩きつけると地面がひび割れ石の塊が無数に飛び出た。

暗黒のエネルギー球は全て石の塊に直撃し防がれた。

ルミナス「そんな！？馬鹿な！？」

フレイムレッド「よし！！行くぞ！！」

ウェイブブルーはウェイブバズーカを構えフレイムレッドはフレイムランスをバズーカの発射口にはめ込み、スノーホワイトはスノーツインソードをバズーカの側面に装着、エレキイエローはエレキトンファアーをツインソードの下部に装着しジャングリーンはジャング

ルハンマーを土台としバズーカを支えそれをルミナスに向ける。  
砲撃主がフレイムレッドに変わり、エレメンジャーはバズーカを支えるように構える。

フレ임レッド「母なる地球の力！！アース・バニッシャー！！」

ルミナス「私が……私が負けるはずない!!」

フレ임レッド「母なる地球の一撃、受けてみる!!」

「アース・エレメント・エンドー！」

アース・バニッシャーからそれぞれの属性の力が放たれ合体し地球の力となった。

ルミナス「そんなもの!!」

ルミナスはプリキュアを倒した技を放ったが地球の力には適わずあ  
っけなく打ち消され、ルミナスに直撃した。

ルミナス「きゃあああああああああああ！……！！！」

ルミナスは吹き飛ばされた。

「ミント・ルミナスが!？」

フレ임レッド「大丈夫、地球の力は善の心を少しでも持っている人にはダメージだけですむから。」

エレキイエロー「死んではないから、安心しな。」

プリキュア達は戸惑いながら頷いた。

フレイムレッド「さて・・・後は君達の役目だ。」

ウェイブブルー「私達は、先に行くね。」

ジャングリーン「またでござす。」

スノーホワイト「さようなら。」

そして、エレメンジャーはいつの間にかプリキュアの前からいなくなっていた。

つづく

## 第45話 属性戦隊（後書き）

次回、衝撃の展開

第46話 大切なもの（前書き）

ついに全員

## 第46話 大切なもの

ルミナス「くっ・・・」

ドリーム「凄い、あのルミナスをあつさりと・・・」

ブルーム「エレメンジャー・・・か。」

するとルミナスが叫びながら立ち上がった。

ルミナス「ふざけるなあああ！！なんなのよ！！あんた達なんかああ！！」

その時、ある声が響きわたった。

???「ルミナス・・・お前の出番は終了だ。」

ルミナス「なっ！？モーファ！？」

ルミナスの後ろからモーファが姿を現した。

ブラック「あれは！？」

レモネード「モーファですか！？」

ドリーム「何で！？土先生とダイゴさんと私で倒したはずじゃ！？」

モーファは不気味に笑いながら答えた。



モーファ「ふっふっふっ、貴様らに倒される瞬間に我はある怨念を一つだけ放った、そして数ヶ月に渡ってあらゆる怨念を集め復活したのだ。」

ピーチ「ならまた倒すまでよ!!」

ブロッサム「覚悟してください!!」

モーファ「ふっふっふっ、面白い奴らだ・・・ゼバダ行け。」

ルミナスは自分の耳と目を疑った、そこにメデムを辞めたはずのゼバダがいたからだ。

ルミナス「ゼバダ!? 何で!?!」

しかし

ゼバダ「ジャマダ、ドケ。」

ゼバダはルミナスを突き飛ばした。

ルミナス「ゼバダじゃない!?!」

モーファ「何を言っている、お前の大好きなゼバダだ・・・少し細工をさせてもらったただけだ。」

ルミナス「そんな・・・」

プリキュア達は

ホワイト「ルミナスがかばった怪人ね？」

サンシャイン「でも様子が変だ。」

ゼバダはいつも敬語で礼儀正しい紳士のような怪人だが、今は全くの別人だ。

ゼバダ「オマエラ、コロス。」

ルミナス「ゼバダ！！こいつらは私が・・・」

するとゼバダはルミナスの首をつかみだした。

ルミナス「なっ・・・ゼ・・・バダ」

ゼバダ「オマエヲサキニコロス。」

モーファ「はははは、見ものだ。」

ゼバダはルミナスを投げ飛ばした。

ローズ「ルミナス！！」

ベリー「駄目よローズ！！」

ベリーはルミナスを助けようとするローズを引き止める。

ローズ「何よ！！このままじゃルミナスが！！」

ベリー「これは彼とルミナスの問題よ！！」

アクア「そう、私達が手を出しては駄目よ。」

ルミナス「ゼバダ！！目を覚まして！！」

ゼバダ「シネ。」

ルミナスは必死にゼバダを止めようとするが

モーフア「無駄だ、そいつはもう元には戻らない。」

ルミナス「うるさい！！私が・・・私が元に戻してみせる！！」

ゼバダ「・・・シネ。」

アクア（？、反応が遅れた？）

ルミナスは必死になりゼバダを止めようとする。

そのたびにゼバダの反応が徐々に遅れ途切れ途切れになる。

ゼバダ「・・・オマエ・・・コ・・・ロス」

ルミナス「ゼバダ！！ゼバダ！！」

ゼバダはルミナスにひたすら攻撃するがルミナスは反撃せず攻撃を素直に受ける。

ゼバダ「・・・ル・・・ミナス・・・さ・・・コ・・・ロス」

ルミナス「私の名前を呼んだ？もう少しなのね。」

ゼバダは意識を取り戻しはじめるが

モーフア「ゼバダ、奴らを消し炭にしろ。」

ゼバダ「い・・・や・・・カシコ・・マリマシタ。」

ゼバダは手から手をかざし暗黒の波動を放った。

ルミナス「く・・・ゼバダアアアアア！！！！！！！！！！」

・・・・・

ゼバダ「かつ・・・はっ・・・」

ルミナスの手には闇の剣が握ってあった。

ルミナスは暗黒の波動もろともゼバダの腹を切り裂いていた。  
ゼバダは倒れ込む。

ルミナス「ゼバダ！！」

ルミナスはゼバダに寄り添う。

ゼバダ「ルミナス・・・さん・・」

ゼバダは意識を取り戻した。

ルミナス「ゼバダ・・・ごめんなさい・・私・・」

ルミナスは涙を浮かべる。

ゼバダ「泣いて・・・はいけません・・・」

ルミナス「でも・・・でも・・・」

サンシャインがルミナスに寄り添いゼバダに言った。

サンシャイン「ごめんなさい、私も・・・あなたの事を知らずに・・・」

ゼバダ「良いんです・・・サンシャインさんは世界を救うためにやった事・・・ルミナスさん・・・あなたは私の希望・・・太陽でした。」

その瞬間ルミナスはダークライトルミナスからシャイニールミナスに戻った。

ルミナス「ゼバダさん・・・」

ゼバダ「ルミナスさん・・・私に優しい気持ちを思い出させてくれてありがとうございます・・・サンシャインさん、相手を思いやる心をくれてありがとうございます・・・」

ゼバダは光となりルミナスとサンシャインを包み込み消えた。

サンシャイン「これは・・・」

ルミナス「太陽みたいに暖かいです。」

そう、ゼバダ自らは太陽の力となりルミナスとサンシャインに力を授けたのだ。

モーフア「馬鹿な奴だ・・・ルミナスなどにやられるとは・・・行け、メテオビッパ―軍団!!」

モーフアは通常のビッパ―より強力なメテオビッパ―を呼び出した。

ミント「こんなときに!?!」

イーグレット「まだ完全に動けるわけじゃないのに!?!」

するとルミナスとサンシャインは

サンシャイン「行くよ!!ルミナス!!」

ルミナス「はい!!」

ルミナスとサンシャインは叫び出した。

ルミナス「太陽の心!!」

サンシャイン「太陽の光!!」

ルミナスの手に光の剣・ルミナリオセイバー  
サンシャインの手に光の杖・シャインロッド  
が現れた。

ルミナス「これは!?!」

サンシャイン「太陽の力!!」

ルミナスはルミナスセイバーでメテオビッパ軍団を斬りつけ一掃する。

サンシャインはシャインロッドを振りかざしプリキュア達を太陽の光で回復させる。

ドリーム「あれ?体が軽くなった!!」

パイン「凄い力・・・」

サンシャイン「ルミナス!!」

ルミナス「はい!!」

2人は手をつなぎ剣と杖に光を溜め同時に振り下ろした。

「プリキュア・ゴッドサン・ルミナリオ!!」

神々しい太陽の膨大な光線がメテオビッパを襲い全滅させた。  
残るはモーフアのみになった。

つづく

## 第46話 大切なもの（後書き）

戦隊の力を手に入れ勝利が見えたプリキュア達、しかしまだつらい  
試練が待ち受けていた！！



## 第47話 試練（前書き）

またまた衝撃の展開

## 第47話 試練

ついに戦隊の力を手に入れモーファを追いつめたプリキュア達。

ブラック「ここまでよ!!」

ブルーム「今度こそ!!」

ドリーム「あなたを倒す!!」

ピーチ「私達の力!!」

ブロッサム「受けなさい!!」

プリキュア達は力を溜める。

アクア「g o g o 拳!! 水水天龍激!!」

ローズ「g o g o 拳!! 花花旋風龍弾!!」

アクアとローズから2つのg o g o 拳が放たれた。

ドリーム「闇をも照らす銀河の希望!! ホーピングドリーム!!」

ルージュ「闇をも焼き尽くす銀河の炎!! バーニングルージュ!!」

「プリキュア・ギャラクシーリジェクト・ハーベスト!!」

ホーピングドリームとバーニングルージュから銀河の光が放たれる。

ミント「レモネード!!」

レモネード「はい!!」

「プリキュア・マージ・ゴル・ゴジュナ!!」

2人は魔法の力を放つ。

ブラック「光の鳥人!!キュアクロウ!!」

ホワイト「光の鳥人!!キュアフェニックス!!」

「プリキュア・クロス・ボンバー!!」

2人は光輝く鳥を放つ。

サンシャイン「もう一度行くよ!!」

ルミナス「はい!!」

「プリキュア・ゴッドサン・ルミナリオ!!」

膨大な光の光線が放たれた。

ピーチ「行くよパイン!!」

パイン「うん!!」

「プリキュア・オーラ・ストリーム!!」

気の力が放たれる。

ブルームとイーグレットはブライトとウィンディにフォームチェンジした。

「プリキュア・スパイラル・スター・ターボ・スプラッシュー!!」

2人から妖精の力でパワーアップした技が放たれる。

ブロッサム「大地を揺るがす一輪の花!!キュアボンバー!!」

マリン「津波を起こす一輪の花!!キュアバースト!!」

「プリキュア・ダイナマイト・大爆発!!」

爆発の力が2人から放たれる。

ベリー「パッション!!」

パッション「わかったわ!!」

「プリキュア・タイム・ストリーム!!」

時の竜巻が2人から放たれる。

モーフア「……ふん。」

プリキュアの必殺技はモーフアを襲い膨大な爆発を起こした。

フェニックス「・・・やった？」

サンシャイン「やったよ！！」

プリキュア達から喜びの音が響く。

ホーピングドリーム「やった！！やったよ！！」

バーニングルージュ「やっと終わったね。」

ボンバー「これで世界は救われましたね！！」

ピーチ「本当に、終わったあゝ。」

・・・

「？？？何が終わったって？」

プリキュア達は「えっ！？」と思い振り向いた。

爆発の際に起きた土煙から5人の影とモーファの影があった。

ミント「モーファ！？」

アクア「何で！？あれだけの技を！？」

モーファは不気味に笑いながら答えた。

モーファ「ふっふっふっ、さすが我の最強の下部だ。」

プリキュア達は5人の影に目を向けた。

「???」闇の炎、レッドダーク。」

「???」闇の水、ブルーダーク。」

「???」闇の雷、イエローダーク。」

「???」闇の森、グリーンダーク。」

「???」闇の花、ピンクダーク。」

レッドダーク「最強の闇の下部・・・」

「ダークファイブ!!」

そこには黒がかった色の戦隊がいた。

ピーチ「モーフアの・・・」

ルミナス「最強の下部・・・」

バースト「ダーク・・・ファイブ・・・」

プリキュア達は一瞬戸惑ったが

ホーピングドリーム「みんな!! 私達は戦隊の力を頑張って手に入れたんだよ!？」

バーニングルージュ「こんな所で止まってるられないのよ!!」

プリキュア達はその言葉に自信を持ちダークファイブに戦隊の力を  
駆使して立ち向かった。

．．．．．

???「彼女達を助けなければ、彼女達だけでは．．．」

一方ある男がプリキュアの下に急いでいた。

???「ここだ．．．なっ!？」

ある男が見たのは．．．ボロボロで傷だらけになり意識が無くなり  
倒れているプリキュア達だった。

つづく

## 第47話 試練（後書き）

次回、あの戦士達登場！！



## 第48話 敗北と突入（前書き）

手違いでルミナスがMaxheart組ではなくハートキャッチ組にいますが気にせず閲覧ください。

## 第48話 敗北と突入

プリキュア「う、うん・・・？」

プリキュア達は次々に目を覚ます変身が解かれていた、目の先には赤い姿をした者がいた。

のぞみ「だっ、誰！？」

祈里「敵！？」

???「ははは、敵なんかじゃないよ。」

なぎさ「あなた誰なの？」

???「私は赤き魂を受け継いだ戦士、アカレッド！！」

アカレッド、歴代スーパー戦隊を率いて戦った赤い戦士の思いから生まれた戦士だ。

舞「アカレッド！？」

かれん「そもそも私達は何をしていたのかしら？」

つぼみ「え」と・・・」

うすら「思い出しました！！」

・・・

プリキュア達は戦隊の力を駆使してダークファイブに立ち向かった。

キュアクロウ「たあ!!」

キュアフエニックス「はあ!!」

キュアクロウとフェニックスはピンクダークに連携攻撃を仕掛ける。

ピンクダーク「あら?この程度の速さで精一杯?」

ピンクダークはキュアクロウとフェニックスの必死の攻撃を足を一歩も動かさずに上半身だけで避ける、ならばとフェニックスが足目掛けて攻撃を仕掛けるがピンクダークは空高く飛び上がった。

ピンクダーク「うふふ、突っ立っていて平気?」

2人の周りには無数の花びらが散っていた、それが一斉に爆発した。

キュアクロウ & フェニックス「きゃああああ!!」

そして2人がふらついている間にピンクダークはキュアクロウにかかと落として地面に叩きつけ、フェニックスの頭をつかみ地面に叩きつける。

アクア「水水天龍激!!」

ローズ「花花旋風龍弾!!」

アクアとローズはブルーダークにgogogo拳で攻撃するが、攻撃を

片手で受け止めた。

ブルーダーク「へえ、こんなものですか。」

そこにミントとレモネードが後ろから攻撃を仕掛ける。

ミントは蹴りを

レモネードはブルーダークを殴りつけるが

ブルーダークは素早くかわし2人の後ろに回り込む。

ブルーダーク「遅い!!」

2人はブルーダークに殴り飛ばされた、アクアとローズが2人を受け止める。

ホーピングドリーム「ドリーム・フラッシュ!!」

バーニングルージュ「バーニング・エキサイト!!」

不意にホーピングドリームとバーニングルージュはブルーダークに個人技を使いブルーダークを攻撃するがその技もブルーダークが片手で弾き返した。

ブルーダーク「ブルー・シャーク!!」

ブルーダークはホーピングドリームとバーニングルージュの後ろに青と黒のサメを2体召喚した、そのサメは2人に噛みつきそのままプリキュア5のメンバーを襲った。

プリキュア5「きゃああああああ!!」

ブライト「行くよ!!!ウィンディ!!!」

ウィンディ「うん!!!」

2人はイエローダークをターゲットに空高く飛び上がり旋回し攪乱させる作戦にでた、しかし

イエローダーク「なめんなよ。」

イエローダークは瞬時にブライトの目の前に移動した。

ブライト「なっ!?!」

ブライトは妖精の力で強化したバリアを張るが

イエローダーク「無駄だよ。」

そのバリアはイエローダークの拳で簡単に打ち砕かれ、そのままブライトはイエローダークの蹴りで懷をやられた。

ブライト「!!!」

ブライトは落下するがウィンディが受け止める。

イエローダーク「スパーク・ホール!!!」

ブライトとウィンディは緑色の球体に包まれ、中で強力な稲妻が走った。

ブライト&ウィンディ「きゃああああ!!!」

ピーチ「みんながやられてる!？」

ベリー「私達だけでもこいつを倒そう!」

パイン「わかった!」

パッション「行くわよ!」

フレッシュプリキュアはグリーンダークをターゲットにした。

グリーンダーク「俺の速さについて来れるか？」

グリーンダークは目にも止まらぬ速さで移動しながらプリキュア達を攻撃する。

ピーチ「きゃあ!はっ、早い!？」

ベリー「くっ!パッション!!時の力で動きを止めよう!」

パッション「ああ!くっ、速すぎて捕らえない!」

パイン「きゃあ!ピーチ!!気の力を送ってみよう!」

ピーチ「わかった!」

ピーチとパインはオーラパワーをグリーンダークに送った、グリーンダークの動きが大分鈍くなった。

グリーンダーク「ほう。」

ベリー & a m p パッション「プリキュア・タイムストップ!!」

グリーンダークが完全に動きを止めた。

ピーチ「クローバーボックスよ!!力を貸して!!プリキュアフオーメーション!!」

プリキュアが構える。

ピーチ「レディ・・・ゴー!!」

プリキュアが一斉にグリーンダークに向かって走り出す。

パッション「ハピネスリーフ、セット!パイーン!!」

パッションはハピネスリーフを作り出しパイーンに投げパイーンがそれをキャッチする。

パイーン「プラスワン!!プレアリーフ!!ベリー!!」

ベリー「プラスワン!!エスポワールリーフ!!ピーチ!!」

ピーチ「プラスワン!!ラブリーリーフ!!」

ピーチが完成したクローバーを上空に投げるとクローバーは巨大化、中心にグリーンダークを囲むようにそれぞれの立ち位置につく。動きを止めたグリーンダークが結晶の中に閉じこめられる。

「ラッキークローバー!!グランドフィナー・・・」

しかし動きを取り戻したグリーンダークが結晶を片手でいとも簡単に砕いた。

ピーチ「!!!!!!」

パイン「そんな!?!」

グリーンダークは巨大なハンマーを作り出しプリキュアを強烈な力で叩きつける。

フレッシュ「きゃああああああああああ!!!!!!!!!!!!」

ボンバーとバーストはレッドダークをターゲットに攻撃を仕掛けるが

ボンバー「プリキュア・ダイナマイトパンチ!!!!」

バースト「プリキュア・バーストショット!!!!」

2人の技もいとも簡単にかわしレッドダークがボンバーに蹴りバーストを殴りつける。

ボンバー「きゃああ!!!!」

バースト「うわああ!!!!」

レッドダーク「その程度か!?!」

しかし後ろからサンシャインとルミナスが必殺技を繰り出す。



ルミナス「ルミナス！！シャイニングザンバット！！」

サンシャイン「プリキュア・アトミックサンシャイン！！」

レッドダークに直撃したと思ったがそこにはレッドダークはいなかった。

レッドダークはいきなり2人の目の前に現れた。

ルミナス「えっ！？」

サンシャイン「なっ！？」

レッドダーク「うざったいだよ。」

レッドダークは手から炎のような鎖を出し2人を拘束し

レッドダーク「バーニング・ジェット！！」

鎖はジェット噴射を開始し2人もろともボンバーとバーストに突っ込む。

ルミナス「2人が！？」

サンシャイン「まずい！？」

鎖を解き放とうとしたが既に遅かった。

サンシャインとルミナスはボンバーとバーストもろとも爆発した。

ボンバー、バースト、サンシャイン、ルミナス「きゃああああああああああ！！！」

・・・

完敗だった・・・戦隊の力を使っても手も足も出なかった。

りん「ダークファイブ・・・強すぎるよ。」

アカレッド「なるほど、モーフアが作り出した闇の戦隊か。」

えりか「戦隊の力でも勝てなかった・・・一体どうすれば・・・」

???「あきらめるのははいわ。」

ほのか「誰!？」

いつき「あっ!!」

つぼみ「ゆ・・・」

えりか「ゆりさん!？」

突如現れたのはキュアムーンライトの月影ゆりだった。

ひかり「何でゆりさんが？」

ゆり「ある人達に途中まで送ってもらったの・・・私も協力するわ。」

くるみ「本当に!？」

つぼみ「でもゆりさん、戦隊の力を手に入れたプリキュアも敵わなかったですよ?」

ゆり「大丈夫、これを見て。」

ゆりは銀色のペンダントを見せた。

アカレッド「それは!?!」

ラブ「これは何?」

アカレッド「これは戦隊にごく少数にしかない銀色の戦士の力が集められた・・・」

ゆり「そう、ムーンシルバントよ、これで私は銀色の戦士の力を使う事ができるわ。」

こまち「でも・・・」

ゆりはため息をついた。

ゆり「あきれた、そんなに絶望したの? せっかく協力してくれたのに。」

アカレッド「協力してくれた?」

咲「どういう事?」

ゆり「こっとう事よ。」

するとゆりの後ろから4人の銀色の戦士が現れた。

アカレッド「おお、来てくれたのか。」

舞「ゆりさん、あの人達は？」

ゆり「ムーンシルバントに力を与えてくれた人達よ。」

???「地球を浄める宿命の騎士、ゴセイナイト!!」

???「眩き冒険者、ボウケンシルバー!!」

???「閃烈の銀狼、ガオシルバー!!」

???「メガシルバー!!」

アカレッド「頼もしいな、これから奴らのアジトに潜入するんだが・  
・」

ゆり「私には行く方法は分からないわ。」

ひかり「私に任せてください。」

ひかりが前にでる。

なぎさ「ひかり？」

いつき「そうか、ひかりは前までメデムにいたからアジトに行く方法がわかるんだ。」

ひかりは黒い水晶を取り出した。

ひかり「これでこれを使うのは最後・・・」

すると黒い水晶に亀裂が走り砕けると同時に次元が開かれた。

ゴセイナイト「次元が開かれたか！」

一同は変身し体制を整える。

アカレッド「私達も彼女達につかなくてはな。」

アカレッド Max heart組

ゴセイナイト Splash star組

ボウケンシルバープリキュア5組

メガシルバー フレッシュ組

ガオシルバー ハートキャッチ組

そして一同は次元をくぐり抜け敵の本拠地に乗り込んだ。

つづく

第48話 敗北と突入（後書き）

次回、リベンジ！！

## 第49話 闇の炎（前書き）

プリキュア & アカレッド VS 闇の炎・レッドダーク

## 第49話 闇の炎

一同はアジトに突入し5つの扉の前に行き着いた。

一つは赤い扉

一つは青い扉

一つは黄色い扉

一つは緑色の扉

一つは桃色の扉

Blossam「これは恐らく彼らの色と対応  
してると思います。」

アカレッド「赤い戦士達を汚す者は私が許  
さん、私は赤い扉にする。」

ブラック「わかったわ。」

レモネード「あれ？赤の扉以外開きません。」

イーグレット「多分赤の扉の向こう側にいるレッドダークを倒せば  
次の扉が開かれるんだわ。」

ホワイト「これから先は私達にかかっているのね。」

ルミナス「行きましょう！！」

アカレッド、ブラック、ホワイト、ルミナスは赤い扉を開け奥に進  
んだ。

.....



扉の先は長々とした薄暗い通路になっていた。

ルミナス「こんな所私見た事ないです。」

アカレッド「モーフアはおそらくルミナスがプリキュア側に戻るのを想定してこの通路を通らせなかったんだろう。」

ブラック「ん？明かり？」

ホワイト「きつとそこにレッドダークが・・・ていうか、なんだか暑くなってきたない？」

そう、通路を進めば進めほどあきらかに温度が上がっていつているのだ。

ブラック「やつと通路を抜けた・・・って、暑っ！？」

抜けた先は耐えきれないほどの暑さが広がる部屋だった、しかも道は幅が2メートルほどしかなく

ホワイト「嘘！？こんな狭い道の下は溶岩！？」

下は溶岩地獄が広がっていた。

???「そこが貴様らの墓場だ。」

ルミナス「その声は！？」

視線の先にはレッドダークが待ち受けていた。

アカレッド「お前が赤の戦士達を汚す悪の赤い戦士・レッドダークか。」

レッドダーク「ほう、アカレッドか・・・面白い。」

4人は戦闘体制に入る。

ブラックとホワイトは戦隊の力を使いキュアクロウ、キュアフェニックスに姿を変えた。

ルミナスはルミナリオ・セイバーを出した。

アカレッド「行くぞ！」

4人は一斉に攻撃を仕掛ける。

しかしレッドダークはその攻撃をすべてかわしきった。

レッドダーク「はは、こんなもんか!？」

キュアクロウ「くそう!!！」

フェニックス「どうすれば!？」

ルミナス「こっちのスタミナが無くなってしまいます!!！」

アカレッド「はっ!!!やあ!!！」

レッドダーク「全然ダメだ、もっとこうしろよ!!！」

レッドダークはルミナスを殴りつけルミナスは足場から落ちそうになった。

ルミナス「きゃあ！」

ルミナスは何とか手で足場につかまった。

クロウ「この！！プリキュア・クロウ・ガトリング！！」

キュアクロウから真つ黒な羽がはえ、無数の羽をレッドダークに向けて放った。

レッドダーク「馬鹿が！」

レッドダークは羽を全てかわしきり高く飛び上がった。  
しかしフェニックスが待ち構えていた。

フェニックス「プリキュア・フェニックス！！」

レッドダーク「何！？」

フェニックス「エクストリイイム！！」

白い翼を散らしながら白い光線が両手から放たれる。

レッドダーク「ダーク・フレア・ウォール！！」

しかしレッドダーク片手から赤く燃えたぎる円形のシールドを張り  
防ぎきった。

その頃、アカレッドはルミナスを引き上げていた。

アカレッド「大丈夫か！？」

ルミナス「すみません。」

クロウ& amp・フェニックス「きゃあああああ!!」

アカレッドとルミナスは「ハッ!!」とした、2人がレッドダークにおされていたからだ。

レッドダーク「ははは!! 終わりだ!!」

レッドダークは黒く赤く燃えたぎる不死鳥へと姿を変えた。

レッドダーク「ダーク・フレイム・フェニックス!!」

クロウ「プリキュア・クロウ・ガトリング!!」

プリキュア「プリキュア・フェニックス・エクストリーム!!」

しかしレッドダークはプリキュアの攻撃にビクともせず2人に突っ込む。

アカレッド「くっ!! ソウルチェンジ!!」

レッドダーク「死ねえええ!!」

だがレッドダークは何かに攻撃を防がれた。

レッドダーク「何!?!」

クロウ「あれは!?!」

フェニックス「どうして!?!」

アカレッド「マジレッド!!! レッドファイヤー!!!」

アカレッドはソウルチェンジする事で歴代スーパー戦隊の赤い戦士になる事が出来るのだ。

今はマジレッドに姿を変えている。

アカレッドMR「ルミナス!!!」

アカレッドMRはルミナスに指示を出す。

ルミナス「ルミナス!!! シャイニング・ザンバット!!!」

神々しい光を放ちながらルミナリオセイバーは大きく伸び、レッドダークに迫る。

レッドダーク「ふざけんな!!!」

レッドダークは拳で迫るルミナリオセイバーを殴り碎いた、しかし

クロウ「今だ!!!」

フェニックス「うん!!!」

「プリキュア・マール・スクリュー!!! クロス・インパクト!!!」

マールスクリューのエネルギーを拳に溜め込み、レッドダークを殴りつけると同時にエネルギーを発散した、レッドダークは勢いよ

く落下する。

レッドダーク「ぐああああ!!」

レッドダークは叩きつけられる。

レッドダーク「てめらぁ!!」

しかしレッドダークが見上げた瞬間

アカレッド「ソウルチェンジ!!ゲキレッド!!砲砲弾!」

アカレッドはゲキレッドにソウルチェンジしゲキワザ・砲砲弾を放った。

レッドダーク「んなろぉ!!」

レッドダークは砲砲弾をかわすがルミナスが待ち受けていた。

ルミナス「最後です!!」

レッドダーク「なっ!?!」

ルミナスはルミナリオセイバーを輝かせて最強の必殺技を放った。

ルミナス「ルミナス!!シャイニング・スクリュードセイバー!!」

ルミナスはルミナリオセイバーを大回転させレッドダークに投げつける。

レッドダーク「そんな範囲の狭い攻撃が当たるとでも・・・」

しかし、ルミナリオセイバーは光の渦を作りレッドダークを無理やり吸い込んだ。

レッドダーク「なっ！？ぐああああ！！」

ルミナリオセイバーがレッドダークを直撃、レッドダークは吹き飛ばされ溶岩に落ちていった。

アカレッド「やったな。」

クロウ「暑くて汗びっしょりだあ。」

その時、レッドダークを倒したからか奥の壁が崩れ扉が出てきた。

フェニックス「あつ、扉が出てきたわ。」

ルミナス「他の皆さんのためにも進みましょう。」

4人は死闘の末、レッドダークを倒し扉の奥へと進んでいった。

つづく

## 第49話 闇の炎（後書き）

次回、VS闇の水・ブルーダーク



## 第50話 闇の水（前書き）

途中ブルーダークの口調が変わります！！  
ご注意を！！

## 第50話 闇の水

アクア「青い扉から音が聞こえるわね？」

青い扉の鍵が開いた。

レモネード「きっとブラック達がレッドダークを倒したんですよ！  
！」

ガオシルバー「青い扉という事は悪の青い戦士・ブルーダークか・  
・俺が行く。」

ブロッサム「私達もですね。」

マリン「絶対に倒してみせるわ。」

サンシャイン「みんなを導くために、そして・・・」

ムーンライト「世界中の人々のためにもね。」

ハートキャッチ組は青い扉を開け奥に進む、奥にはもう一つ扉があった。

ムーンライト「また扉？」

ブロッサム「なんかギシギシってますよ？」

ガオシルバー「うわあ、開けたくねえ。」

サンシャイン「何言ってるんですか!？」

マリ「開けてあいつ倒さないと次にバトンタッチできないのよ! おりゃああ!!」

マリは勢い良く扉を開けた。

すると大量の水が流れ込みあつという間に通路を飲み込んでしまった。

なんとか5人は空間がある所に頭を出した。

ガオシルバー「ぶはあ!! だつ、だから簡単に開けるなつて!!」

マリ「ぶふう!! っていうか何よこの大量の水!!」

ムーンライト「だから扉がギシギシいていたのね。」

するとサンシャインが辺りをキョロキョロと見渡す。

サンシャイン「ブロッサム? ブロッサムは!？」

そう、頭を出しているのはガオシルバー、マリ、サンシャイン、ムーンライトの4人だった。

ムーンライト「まさか!!」

ムーンライトは水の中に潜り込んだ。

ガオシルバー「あつ!! 待て!!」

ガオシルバーもムーンライトを追って潜り込んだ。

ガオシルバー & amp ; ムーンライト「!？」

ムーンライトの思ったとおり、闇の青い戦士・ブルードークがブロッサムをつかみ沈ませていた。

ブロッサム「!!!!!!!!!!!!!!」

ブロッサムの息はすでに限界に達していた。

ムーンライトが深く潜り手を伸ばしたが届かない。

2人は一旦頭を出した。

ムーンライト「ブロッサムが!水の中で苦しんでる!!!」

サンシャイン「そんな!!!」

マリ「なら私の出番よお!!!」

マリは能力をいかし深く潜り込んだ。

マリはブルードークを何とか振りほどきブロッサムを引き上げる。

ブロッサム「ぶはあ!!!!!!!!!!しっ、死ぬかと思いましたあ!!!」

サンシャイン「水の中じゃ上手く動けないし息も続かないよ!!!」

ガオシルバー「また引きずり込まれるかも・・・」

予想は的中、ガオシルバーは水の中に引きずり込まれた。

ガオシルバー「うわあ!!!」

ブルーダーク「はははっ！！僕は水の中でも息ができるし地上と同じように動けるんですよ！！」

ブルーダークは水の中の行動を得意とする闇の戦士だ。

ガオシルバー（くっ！息が・・・）

水の中は暗く、動きも鈍くなる、圧倒的に不利なガオシルバー。

・・・・・・

サンシャイン「どうすれば良いの！？」

ブロッサム「マリン！！どうにかありませんか！？」

マリン「どうにかって言われても・・・」

ムーンライト「せめてこの水の中を自由に動けなくては・・・そう  
だわー！！」

・・・・・・

ブルーダーク「ガオシルバーも終わりですね。」

ガオシルバー（くそお・・・）

その時、紫色のサメがブルーダークを襲った。

ブルーダーク「おっと！！何ですか？」

紫色のサメがガオシルバーを背中に乗せ水から出た。

ガオシルバー「ガオハンマーヘッド!!」

ムーンライト「銀色の力をさっそく使わせてもらったわ!!」

ムーンライトは自分達の代わりにムーンシルバントの力でガオハンマーヘッドを呼び出したのだ。

ブルーダーク「目障りな・・・ツイン・シャーク!!」

ブルーダークは2匹のサメを呼び出しガオハンマーヘッドと戦わせる。

ガオハンマーヘッドは2匹のサメに圧倒され消えてしまった。

ムーンライト「しまった!!ガオハンマーヘッドの体力が無くなっ  
たわ!？」

ガオシルバー「くそお、どうすれば・・・」

サンシャイン「なら・・・奥の手!!」

・・・

ブルーダーク「奴らは俺に攻撃する事すらできない・・・ん、何だ  
？」

何やら水が泡立ち段々量が減っていつているのだ。

ブルーダーク「熱っ！？熱い！！！」

そう、大量の水が蒸発していつているのだ。

サンシャイン「太陽の力で水を蒸発・・・うわあ熱いいい！！！」

ブロッサム「サンシャイン熱いですううう！！！」

ムーンライト「少しの辛抱よ！！ああ、熱い・・・熱い！！！」

マリン「茹でダコになるよおおおお！！！」

ガオシルバー「早く終われええ！！！」

ブルーダーク「水が減っていく！？？」

サンシャインは太陽の力で水を蒸発させる作戦にでる、さすがに熱いようだ。

ブルーダーク「ああ！？水が全部！？？」

ついに部屋を飲み込んでいた水が全て蒸発した。

ブロッサム「ああ、涼しい・・・」

マリン「はあはあ、汗だか水だかわかんない。」

サンシャイン「やりすぎた・・・かな？」

ムーンライト「終わり良ければ全て良しって事にしましょう。」

ガオシルバー「覚悟・・・しろよお!!」

ブルーダーク「くう!!水が無くたって俺は強いんだよお!!」

ブルーダークは体を黒く輝かせて姿を変えた。

ブロッサム「わっ!」

サンシャイン「姿が変わった!？」

ムーンライト「ついに最終攻撃にでるつもりね。」

マリン「うわあ!!サメ!？」

ガオシルバー「しかもでかい!？」

ブルーダークは体が黒がかった青い色の巨大なサメに姿を変えた。

ブルーダーク「死ねえええええ!!」

ブルーダークはサンシャインに噛みつき飛び回る。

サンシャイン「きゃあああああ!!」

ブロッサム「サンシャインが!？」

ガオシルバーは専用武器・ガオハスラーロッドをサーベルモードにしブルーダークに突き刺す。

しかしなかなかサンシャインを放さない。



サンシャイン「くっ、ううううう!!」

サンシャインも何とか抵抗する、すると

ブロッサム「マリン!!」

マリン「やるっしゅ!!」

ブロッサムとマリンはキュアボンバー、キュアバーストに姿を変える。

ムーンライト「プリキュア・シルバー・フラッシュ!!」

ムーンライトは銀色の光を放ちブルーダークを怯ませる。

ボンバー&amp;バースト「プリキュア・ダブル・インパクト!!」

ボンバーとバーストは手から衝撃波を腹に目掛けて放ちサンシャインを解放した。

サンシャイン「くっ、よくもやったわね!!」

ブルーダークはボンバーとバーストを体当たりで壁に叩きつける。

ボンバー&amp;バースト「きゃああああ!!」

するとサンシャインは戦隊の力最強の技を放った。

サンシャイン「プリキュア・サンシャイン・ゴールド・ゾーマ!!」

巨大な太陽の塊がブルーダークを襲う、ブルーダークの姿は元に戻った。

ブルーダーク「くそう！！ブルー・スプラッシュ・アルティメット！！」

ブルーダークは黒い光に包まれ5人に突っ込む。

ガオシルバー「ムーンライト！！」

ムーンライト「ええ！！」

ガオシルバー「邪鬼玉砕！！」

ムーンライト「銀と花の力よ集まれ！！」

しかしブルーダークはムーンライトに黒いエネルギー波を放ちムーンライトを吹き飛ばす。

ムーンライト「きゃああああ！！」

ガオシルバー「くっ！ムーンライト！！」

ムーンライト「大丈夫！！やって！！」

ブルーダークはそのまま突っ込んでくる。

ガオシルバー「わかった！！破邪星獣球！！」



プリキュア&amp;mp・ガオシルバー「はああああああああああ  
ああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

ブルーダーク「ぐっ！！あああああああああああああああ  
ああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

ブルーダークは吹き飛ばされ消滅した。

ガオシルバー「はあはあはあ……」

ボンバー「やつ、やりましたね。」

サンシャイン「そうね・・・」

「バースト……あああ！！疲れたあ！！」

ムーンスライト「相当な力を使ったけど休んではいけないわね。」

5人はついに闇の水・ブルードークを倒した。

つづく

## 第50話 闇の水（後書き）

次回、闇の雷・イエローダーク

## 第51話 闇の雷（前書き）

V S 闇の雷・イエローダーク

## 第51話 闇の雷

黄色の扉から音が聞こえた。

ゴセイナイト「黄色の扉が開いたという事はブルーダークを倒したのか。」

ブルーム「私達が行く!!」

イーグレット「次は必ず勝つ!!」

2人はイエローダークを倒すために燃えてたぎっていた。

ゴセイナイト「ここからは私達のターンだ・・・行くぞ!!」

ブルーム、イーグレット、ゴセイナイトは黄色の扉の奥に進んで行った。

イーグレット「暗いわね・・・」

その時、いきなり雷が鳴り響いた。

ブルーム「きゃああ!! かつ、雷!？」

ゴセイナイト「落ちて着けプリキュア!!・・・姿を現せイエローダーク!!」

すると雷鳴と共にイエローダークが姿を現した。

イエローダーク「人の領域に土足で入り込んで姿現せ?・・・ふざけんなよ?」

イエローダークは怒りに震えていた。

ブルーム「来る!?!」

するとイエローダークは手を三人に向けて稲妻を放った、三人は何とかかわす。

ゴセイナイト「コンプレッサンダーカード!!!天装!!!」

ゴセイナイトはスカイツ族の技を放った。

イエローダーク「電気には電気つか?」

イエローダークは軽々とコンプレッサンダーをかわし反撃に出る。

イエローダーク「ライトニング・バルカン!!!」

すると突如天井から雷が連続して放たれる。

ブルーム「うわあ!!!危ない!!!」

ゴセイナイト「くっ!予想以上の戦闘能力だ!!!」

イーグレット「くっ!きゃああ!!!」

イーグレットは雷を直撃してしまった。



ブルーム「イーグレット!!」

イエローダーク「よそ見すんな!!」

イエローダークは拳に稲妻を走らせブルームに殴りかかるがゴセイナイトが受け止める。

ブルーム「ゴセイナイト!!」

ゴセイナイト「私の事は良い!!イーグレットの所へ!!」

ブルームはすかさずイーグレットの所へ駆けつける。

イエローダーク「はっ!!友情ごっこか!？」

イエローダークはゴセイナイトを片手で持ち上げ投げ飛ばした。

ゴセイナイト「くっ!レオンレイザー!!」

ゴセイナイトは飛ばされながらもレオンレイザーでイエローダークを攻撃する。

イエローダーク「ぐあ!!てめえ・・・殺す!!」

イエローダークはゴセイナイトを緑色の球体で包む。

ゴセイナイト「なっ!?!これは!?!」

イエローダーク「エレキ・ホール!!」

緑色の球体から強烈な電流が走る。

ゴセイナイト「ぐあああ!!」

ゴセイナイトは倒れ込んでしまった。

ブルーム「ゴセイナイト!!」

イーグレット「許さない!!」

ブルームとイーグレットはブライトとウィンディになり、さらに妖精の力を発揮させ体を輝かせる。

ブライト「プリキュア・ブライト・バルカン!!」

ブライトは妖精の力で強化した高速の蹴りをイエローダークに浴びせる。

ウィンディ「プリキュア・ウィンディ・マシンガン!!」

ウィンディは妖精の力で強化した高速の光弾を連射しイエローダークに浴びせる。

ブライト「なっ!?!」

ウィンディ「どうしたの!?!」

イエローダーク「レベルが違っんだよ!!」

イエローダークはブライトの蹴りを受け止めウィンディに投げつけ

る。

ブライト「きゃああー!!」

ウィンディ「ブライト!! うっ!？」

ウィンディはブライトを受け止めるが共に飛ばされてしまった。

ウィンディ「くっ・・・ブライト、どうしたの!？」

ブライト「はあはあ、あいつ・・・私とウィンディの攻撃全部片手で片付けてた。」

ウィンディ「!？」

そう、イエローダークはブライトの攻撃を右手で、ウィンディの攻撃を左手で全て防いでいたのだ。

イエローダーク「あの程度の攻撃片手で十分なんだよ。」

その時、ゴセイナイトが背後からレオンレイザーでイエローダークを攻撃した。

イエローダーク「がは!？てめえ!!」

ゴセイナイト「イエローダーク・・・ここからは私のターンだ。」

レオンレイザーを剣に変えイエローダークを斬りつける。

イエローダーク「雑魚が!! 調子のもてんじゃ・・・」

しかし、ブライトとウィンディも攻撃にでる。

ブライト「はあ!!」

ウィンディ「だあ!!」

さすがにイエローダークも三人の同時攻撃は対処できないようだ。  
イエローダークは吹き飛ばされる。

イエローダーク「くっ!!ふざけんな!!てめえらは俺に負けるんだ  
よおおお!!!!!!!!!!」

イエローダークは稲妻を体に走らせる。

ゴセイナイト「とてつもないパワーだ!!」

ブライト「どうするウィンディ!？」

ウィンディ「受け止めるしか・・・」

イエローダーク「スパーク・サクリファイス!!」

巨大な稲妻のドリルが三人を襲う。

ゴセイナイト「ロックラッシュカード!!天装!!」

ゴセイナイトはランディック族の技で岩を出すが簡単に砕かれてしまった。

ブライト・ウィンディ「はっ！！」

ブライトとウィンディはバリアーを張るがこれも稲妻が触れた瞬間亀裂が走り砕けてしまい直撃してしまった。

ゴセイナイト「ぐああああ！！」

ブライト&ウィンディ「きゃああああ！！」

イエローダーク「どうだ・・・俺を馬鹿にするとこになるん・・・！？」

イエローダークは目を疑った、三人が自分の最強技をまともにくらって立ち上がっていたからだ。

イエローダーク「なんでだよ！？なんで死なねんだよ！！」

ゴセイナイトが口を開く。

ゴセイナイト「かつてゴセイジャーが言っていた・・・地球を汚してしまったのは人間、ならばその地球を癒やす事ができるのも人間だと！！」

ブライト「だから私達はどの世界でもその世界を破壊しようとする奴を許さない！！」

ウィンディ「だから私達は立ち上がるの！！」

イエローダーク「ならもう一度だ・・・スパーク・サクリファイス！！」

またイエローダークは最強技を繰り出す。

ゴセイナイト「同じ手は二度とくわん！！ナイトメタリック！！」

ブライト「妖精よ！」

ウィンディ「精霊よ！！」

ブライト・ウィンディ「我らに救いの手を！！プリキュア・スクリユー・ターボ！！」

ブライトとウィンディは巨大な光の竜巻を起こす。

イエローダーク「オルアアアアア！！」

ゴセイナイト「はああああ！！」

ブライト・ウィンディ「だああああああ！！」

三人の必殺技はついにはイエローダークの必殺技を打ち負かしイエローダークを襲った。

イエローダーク「ぐああああああ！！」

・・・・・・

ゴセイナイト「・・・やったか？」

ブライト「はああ、わからない。」

ウィンディ「!?!、動いた!?!」

なんとイエローダークはよろよろと立ち上がった。

イエローダーク「ははは・・・俺が敗北なんて・・・有り得ないんだよ。」

ウィンディ「まだやる気!?!」

するとイエローダークは手を掲げた、稲妻が降り注ぎそれはなんとイエローダークに直撃した。

イエローダーク「ぎゃあああああああ!?!」

ゴセイナイト「なっ!?!」

ブライト「自分で!?!」

黒こげになったイエローダークが言った。

イエローダーク「俺はてめえらに負けたんじゃない・・・自分の力に負けたんだ・・・よ」

イエローダークはその場に倒れ込んだ。

ゴセイナイト「哀れな・・・敗北を認めたくないあまり自ら命を断ったか。」

ブライト「これで他の扉が開くんだよね?」

ウィンディ「うん、先に進もう。」

ゴセイナイト、ブライト、ウィンディは気持ちの良くない勝利をしたと思いながら先に進んだ。

つづく



第51話 闇の雷（後書き）

次回、闇の森・グリーンダーク

## 第52話 闇の森

緑色の扉が開いた。

メガシルバー「おつ、開いたな。」

ピーチ「よし！！絶対勝つてみんなで幸せゲットだよ！！」

メガシルバーとフレッシュ組は扉の奥に進んだ。

・・・

メガシルバー「おいおい、ここ部屋の中か？」

部屋はなんと森が広がっていた。

パイン「うわあ、大きな・・・」

するとパインは突如大蛇に襲われた。

パイン「ぎゃあああ！！へっ、蛇iiiiiii!？」

ベリー「パインこっち来て!!」

パッション「なんで大蛇が!？」

すると声が聞こえてきた。

???「あゝ、もう少しで丸飲みだったのになあ。」

5人は声のするほうを見た、グリーンダークだった。

メガシルバー「お前がグリーンダークか？」

グリーンダーク「だったら何だ？」

ピーチ「あんたを倒す！！」

するとグリーンダークは大笑いした。

グリーンダーク「ギャハハハ！！お前達が俺を倒す！？ギャハハハ！！なんの冗談だよ！！」

パッション「今すぐ笑えなくしてあげるわ！！」

パッションはパッションハープを取り出した。

パッション「吹き荒れる！！幸せの嵐！！プリキュア・ハピネス・ハリケーン！！」

竜巻がグリーンダークを襲うがグリーンダークはそれをかわし姿を消した。

パッション「どっ、どこ！？」

グリーンダーク「こっちだよ！！」

グリーンダークはハンマーでパッションを殴りつける。

パッション「きゃああ!!」

パッションは木に叩きつけられる。

ベリー「パッション!？」

ピーチ「どこにいるの!？」

パイン「駄目!!草と色が同じでわからない!!」

メガシルバー「……………」

グリーンダークは草に紛れ攻撃を繰り返す。

ピーチ「きゃああ!!」

ベリー「卑怯よこんなの!？」

パイン「どうすればいいの!？」

メガシルバー「ぐあ!!」

グリーンダーク「どうしたどうした!？」

グリーンダークは5人を痛めつけるのを楽しんでいるようだ。  
ついには立つのもやっとになってしまった。

ピーチ「くっ!足が震えて……立てない。」

ベリー「何も……出来ない。」

パイン「みんな・・・」

パッション「負けるわけには・・・」

するとメガシルバーは何とか立ち上がり

メガシルバー「もうそろそろだろう？グリーンダーク・・・」

メガシルバーは何やらグリーンダークに声をかけた。

グリーンダーク「何がだ!!」

するとメガシルバーは赤い玉を取り出した。

ピーチ「ちよつとこんな時に何して・・・」

メガシルバー「メガシルバー特製!!スーパーペイントボール!!」

メガシルバーは赤い玉を投げると赤い玉は爆発し辺りに赤い粉が撒き散らされた。

パイン「何!？」

グリーンダーク「あれ？草木が!？」

そう、草木が赤色に染まっていくのだ。

メガシルバー「どうだ、今の玉から出た粉は動物以外の物質を赤く染め上げる特性を持つんだ!」

グリーンダーク「げええ!!」

草木は赤く染め上がり、グリーンダークの姿が丸見えになった。

ピーチ「よくも好き勝手殴ってくれたわね・・・パイーン!!」

パイーン「うん!!」

ピーチ&amp;パイーン「プリキュア・オーラ・インパクト!!」

ピーチとパイーンは気の力でグリーンダークを攻撃するが何とかかわす。

グリーンダーク「この!!ジャングル・マシンガン!!」

すると木から木の実が生まれ種がマシンガンのごとく5人を襲った。

メガシルバー「痛い!!あの粉5分しか効果ないから早めにかたつけなと!!」

パイーン「5分!?いたた!!」

ベリー「プリキュア・エスポワールシャワー!!」

ベリーはエスポワールシャワーで種を一掃しベリーソードでグリーンダークに立ち向かう。

ベリー「プリキュア・エスポワールシャワー・フレッッシュ!!」

必殺技はグリーンダークに直撃した。

グリーンダーク「ぎゃあ！！このやろう！！グリーン・ジュロン！！！！」

木から枝が伸び5人に絡みつく。

パッション「きゃああ！！うつ、動けない！？」

メガシルバー「うわあ！！5分たちまった！！！！」

草木が元の色に戻った。

グリーンダーク「ギャハハハ！！全て無駄になったな！！」

グリーンダークは再び草木に溶け込んだ。

メガシルバー「くそお！！動けない！！」

パイン「このままじゃやられる！！」

パッション「くっ！！かハか・・・」

グリーンダーク「ギャハハハ！！最後だあ！！グリーン・クエイク！！！！」

枝にさらに力が加わる。

ピーチ「きゃああ！！」

ベリー「あああー!!」

パッション「くっ!プリキュア・ハピネス・ハリケーン!!」

パッションはハピネス・ハリケーンを放った。

グリーンダーク「この後におよんでまだ無駄な抵抗を!!」

しかし、ハピネス・ハリケーンはグリーンダークに放たれたのではなく、森の草木に放たれた。

ピーチ「あれ!?枝の力が弱くなっていく。」

ベリー「ていうかもうユルユルよ!」

パイン「なんで急に!」

メガシルバーは森の草木がハピネス・ハリケーンによって散っているのに気づいた。

メガシルバー「あゝ、なるほどね。」

ベリー「どういう事?」

メガシルバー「木の力、つまり栄養は補給するのに葉っぱが必要になるんだ・・・葉っぱが無い木は弱ってしまう。」

ピーチ「???」

パイン「つまり葉っぱが無いと木は元気にならないって事よ。」



ピーチ「なるほど！！さすがパッション！！」

メガシルバー「ちなみにグリーンダークの姿も丸見えだ。」

グリーンダークは溶け込めなくなり、戸惑っていた。

グリーンダーク「くそお！！くらえ最強！！グリーン・アース・ジ  
ュロン！！」

すると辺りにあった木が地面から抜け出し5人を襲いだす。

ピーチ「げええええ！！木が歩いてるう！？」

メガシルバー「自然を操るのか！？」

木の攻撃をかわし何とかグリーンダークに近づく。

メガシルバー「ブレイザーインパクト！！」

メガシルバーはシルバーブレイザーで必殺技を放ちグリーンダーク  
を攻撃する。

グリーンダーク「ぐあー！！」

ピーチはいくつかの木を根っこからつかみ動きを止める。

ピーチ「でりゃあああー！！」

そしてピーチは木をブンブン振り回しグリーンダークに投げつける。

グリーンダーク「危なっ!?!」

グリーンダークは木をかわすが体が動かない。

ベリーとパッションがプリキュア・タイムストップでグリーンダークの動きを止めたのだ。

ベリー「よし、止まった!」

パッション「パイン!」

パイン「わかった!」

パインはグリーンダークにオーラパワーを送り吹き飛ばす。

グリーンダーク「ぎゃあああ!」

グリーンダークが立ち上がるといつの間にか結晶に包まれていた。

フレッシュ「ラッキークローバ! グランドフィナーレ!」

グリーンダーク「効かないよ!」

グリーンダークが結晶を壊そうとするが何故か結晶が壊れない。

グリーンダーク「しまった! 葉っぱが!」

メガシルバーが気がついた。

メガシルバー「なるほど、お前も木と同じでこの部屋にある木の葉

っぱが力の源だったのか!!」

フレッシュ「はああああ!!」

グリーンダーク「ぐああああああ!!」

結晶と共にグリーンダークは消滅した。

ピーチ「やったあ!! 幸せゲットだよ!!」

ベリー「リベンジ達成ね!! 私達完璧!!」

パイン「きつと勝てるって私信じてた!!」

パッション「私達頑張ったわ!!」

メガシルバー「よし、もたもたしてられないぞ、先に行こう!!」

5人はグリーンダークを倒し先に進んだ。

つづく

## 第52話 闇の森（後書き）

大蛇はハピネス・ハリケーンでどこかに吹き飛びました。

第53話 闇の花（前書き）

V S 闇の花・ピンクダーク

### 第53話 闇の花

桃色の扉が開いた。

ボウケンシルバー「残るは俺たちだけだな。」

ドリーム「よし、行くぞお!!！」

ルージュ「次はボコボコのけちゃんけちゃんにしてやるわ!!！」

レモネード「その通りです!!！」

ミント「落ち着きも重要よ?」

アクア「そうよ、少しは落ち着きましょう。」

ローズ「転んで怪我するわよ?」

7人は扉の奥に進んでいく。

すると信じられない事に辺りは明るく美しい花畑が広がっていた。

ドリーム「何これ!？」

レモネード「凄い綺麗です!!！」

ドリームとレモネードの目は輝いていた。

ルージュ「あの2人はほつといて・・・これはどういう事?」

ミント「部屋の中の庭かしら？」

アクア「それは無いわよ、空が広がってるし。」

ローズ「謎ね・・・。」

するとボウケンシルバーが花に触れてみる、なんと花は瞬く間に枯れてしまった。

それより辺りは美しい花畑から花が全て枯れた花畑になりさっきまで青かった空は黒い暗雲に包まれていた。

ドリーム「ええ！？何何！？」

レモネード「全て枯れてるのに花びらが散ってます、どうなってるんでしょうか！？」

ボウケンシルバー「誰か来るぞ！？」

花びらが散る中現れたのはピンクダークだった。

ピンクダーク「うふふ、ご機嫌よう。」

ローズ「ピンクダーク！！」

するとピンクダークは花びらに包まれて姿を消した。

アクア「どこにいったの！？」

ピンクダーク「ここよ。」

ピンクダークはいつの間にかアクアの後ろにいた。  
するとピンクダークが問いかけた。

ピンクダーク「ねえ、あなた達・・・何で世界を守るの？こんな汚れて腐りきった世界を。」

ボウケンシルバー「世界を守るのが俺たちにかせられたミッションだからだ！！」

ミント「確かに世界は汚れてるかもしれない、けどだからって世界を破滅させるなんて間違ってる！！」

アクア「そうよ！！世界には憎しみや悲しみに満ち溢れてるけど・・・喜びや人の思いやりにも満ち溢れてるの！！」

ルージュ「だから私達は戦うの！！」

ローズ「大好きな世界や！！」

レモネード「大好きな人達を！！」

ドリーム「守るために！！」

ピンクダークは溜め息をつき言った。

ピンクダーク「くだらないわね・・・まあ、今日で終わりだけど。」

その時ピンクダークは手をかざし花びらを散らす。

ボウケンシルバー「また花びら？」



ピンクダーク「フラワー・アトミック！！！！」

すると花びらは一斉に爆発を起こした。  
7人は慌ててそれかわす。

ローズ「危なかったわ。」

アクア「あれ？ピンクダークは？」

ボウケンシルバー「上だ！！」

ピンクダークは高く飛び上がっていた。

ピンクダーク「フラワー・サイクロン！！」

ピンクは手をかざし花びらを散らす桃色の竜巻を放った。

ローズ「邪悪な力を包み込む、薔薇の吹雪を咲かせましょう！！！！ミルキイローズ・ブリザード！！」

ローズは薔薇の吹雪で対抗するが

ピンクダーク「無駄よ！！」

薔薇の吹雪は桃色の竜巻に打ち消され7人を襲った。

プリキュア5「きゃああああああ！！」

ボウケンシルバー「うわああああああ！！」

ピンクダーク「さあ、あなた達どうする？」

ドリーム「くっ！ルージュ！！」

ルージュ「うん！！」

ドリームとルージュはホーピングドリームとバーニングルージュに姿を変えた。

ホーピングドリーム「はああああ！！」

バーニングルージュ「だああああああ！！」

2人はピンクダークに攻撃を仕掛けるが簡単にかわされてしまう。

ピンクダーク「無駄よ、そんな遅い攻撃当たりやしないわ。」

ピンクダークはホーピングドリームの後ろに回り込み殴りつけ、バーニングルージュを真っ正面から蹴りつけた。

ホーピングドリーム「ああああああ！！」

バーニングルージュ「きゃああ！！」

アクアとローズが2人を受け止め、攻撃にでる。

アクア「プリキュア・サファイアアロー！！」

ローズ「ミルキイローズ・ブリザード！！」

しかしピンクダークはそれをもかわしてしまふ。

ピンクダーク「あはは、あなた達は私には勝てないわ。」

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー!!」

レモネード「プリキュア・プリズムチェーン!!」

ピンクダークをプリズムチェーンで拘束するが簡単に引きちぎってしまいエメラルドソーサーはかわされてしまふ。

アクア「攻撃がかわされる!!」

レモネード「一体どうすれば!？」

ピンクダーク「終わりよ。」

その時

ボウケンシルバー「スコープショット!!」

ボウケンシルバーは飛び上がって飛んでいるピンクダークを後ろから攻撃した。

ピンクダーク「きゃああ!!」

ピンクダークは地面に何とか着地した。

ピンクダーク「この・・・よくも!!」

ボウケンシルバー「今だ!!」

ホーピングドリーム「プリキュア・ドリーム・ギャラクシー!!」

バーニングルージュ「プリキュア・ルージュ・ギャラクシー!!」

上からホーピングドリームとバーニングルージュが必殺技を繰り出す。

ピンクダーク「なっ!?!」

ピンクダークは間一髪かわすが

アクア「水水天龍激!!」

ローズ「花花旋風龍弾!!」

アクアとローズの必殺技はピンクダークに見事直撃。

ピンクダーク「くっ!有り得ない、私がおされるなんて!?!」

その隙を見逃さないミントとレモネード。

ミント「プリキュア・ミントマジネ!!」

レモネード「プリキュア・レモネードマジネ!!」

ミントとレモネードも必殺技でピンクダークをおす。



ピンクダークは消滅した。

ホーピングドリーム「これでダークファイブを全員倒したね。」

バーニングルージュ「後はモーフアだけ。」

ボウケンシルバー「よし、行くぞ！」

ついにダークファイブを倒したプリキュア達、果たして一同を待ち受けているものは？

つづく

## 第54話 再会（前書き）

再会します。

## 第54話 再会

ダークファイブを倒した一同は奥に進み一つの部屋に集まった。

ホーピングドリーム「あつ！！みんな！！」

クロウ「ここは？何もないみたいだけど・・・」

ゴセイナイト「油断するな！！何かいるぞ！」

その先には全ての根源・モーファがいた。

モーファ「ついに来たか。」

フェニックス「あきらめなさい！！」

レモネード「あなたの野望は私達が打ち砕きます！！」

モーファは不気味に笑う。

モーファ「そうか、ならやってみろ。」

すると辺りは一変、崖が広がる場所に変わった。

ボウケンシルバー「何だ！？」

バーニングルージュ「場所なんて関係ない！！」

ピーチ「私達はモーファを倒す！！」



プリキュアは一斉にモーフアに襲いかかった。

アカレッド「まっ、待て！！」

モーフア「馬鹿め。」

モーフアは手から黒い球体を出しプリキュアを包み込む。

ブライト「なっ、何！？」

そして黒い球体はどこかに消え去った。

メガシルバー「消えちまったぞ！！」

ガオシルバー「とりあえず今は俺達が！」

・・・

レモネード「ここは？」

プリキュアが行き着いた場所はさっきと似ている場所だった、そこには一万を超えるビッパー軍団がいた。

バースト「ビッパー！？」

サンシャイン「多いけどやるしかない！！」

プリキュアはビッパー軍団に立ち向かうがそのビッパーは強化されたメテオビッパーで先ほどのダークファイブとの戦いで疲労したプ

リキュアにはきつかった。

ボンバー「くっ！体が思うように動きません！！」

ルミナス「きゃああ！！」

プリキュアはメテオビッパ軍団に歯が立たなかった。

ホーピングドリーム「このままじゃまずいよ！！」

パイン「でも戦える状況じゃ・・・」

メテオビッパ軍団がプリキュアに襲いかかるうとしたその時

???「だああああああああ！！」

大勢の何者かがメテオビッパ軍団を一掃した。

バースト「なっ、何！？」

すると1人の男が

???「来てやったぜ・・・ドリーム。」

ホーピングドリームはその男と大勢の者を見て驚愕した。

ホーピングドリーム「っ・・・士・・・先生！？」

そう、それは前回の戦いでプリキュアと共に世界を救った門矢士と仮面ライダーディケイド、そしてオールライダーだった。

ディケイド「Wから聞いて来たぜ。」

W「キュアムーンライトから依頼だな。」

ボンバー「ムーンライトが!？」

ムーンライト「ええ、あなた達の所に送ってもらったのも彼よ。」

ディケイドとW以外のオールライダーはメテオビッパ―軍団を倒していく。

W「俺達はプリキュアを送っていく!（頼んだよ!!）」

ディケイド「よし、行くぞ!!！」

ディケイドとWはプリキュアをある場所に連れて行く。

ウィンディ「ここは?」

W「ここから元の場所に戻る。」

ディケイド「さつさとやるぞ・・・」

しかしその時、謎の怪人が一同の前に現れた。

バーニングルージュ「何あれ!？」

W「（おそらくメデムの大幹部だろう。）まじかよ。」

ディケイド「何でも良い、行くぞ!!」

ディケイドとWは怪人に立ち向かう。

W「だあ!!おりゃ!!」

ディケイド「はっ!!おりゃ!!」

しかし怪人にはびくともしなかった。

怪人「フンッ!!」

怪人は衝撃波を放ち2人は吹き飛ばされる。

W&amp;ディケイド「うわああ!!」

ホーピングドリーム「私達も戦おう!!」

プリキュアも怪人に立ち向かうがまるで歯が立たず衝撃波で吹き飛ばされた。

プリキュア「きゃあああ!!」

吹き飛ばされると同時にキュアクロウ、キュアピーチ、ルミナスからメダルが落ちる。

ルミナス「!!!、ゼバダのメダルが!!」

クロウ「結局何なのよあのメダルは!?!」

ピーチ「やられる!？」

そう思ったその時

????「あつたあああああ!!」

一人の男が猛スピードでこちらに向かってくる。

W「(翔太郎!!彼は!?)ああ、でも何で？」

????「いやあ、君達が持ってくれてたんだ・・・って、大丈夫!」

謎の男は状況を把握した。

????「なるほど。」

ホーピングドリーム「あ・・・あなたは？」

????「俺?俺は火野映司。」

すると怪人が

怪人「人間が1人増えたからって問題はない、この世界はモーフア様の物になるのだ!!」

映司「そうはさせない・・・助かる命がないのは、どこも一緒だな!!」

映司はベルトを装着しメダルをベルトにはめ込み、横に付いている

丸い物を右手に取り斜め下にメダル一つ一つかざし左手を顔の所まで持っていく。

映司「！！変身！！」

「タカ！トラ！！バッタ！！タ・ト・バ！！タトバ！！タ・ト・バ！！」

奇妙な歌と共に映司は姿を変えた。

これがメダルの戦士、仮面ライダーオーズだ。

オーズ「ここは俺に任せて。」

レモネード「仮面ライダーですか！？」

ベリー「見た事ない！！」

オーズは武器・メダジャリバーにメダルを三枚入れた。  
そしてメダジャリバーで怪人を斬りつける。

オーズ「せいやあ！！」

怪人「ぐふっ！？」

パッション「効いてるわ！！」

オーズ「一気にとどめだ！！」

オーズはメダジャリバーを地面に突き刺し、丸いスキャナーでベルトのメダルにかざす。

「スキヤニング・チャージ!!」

オーズは飛び上がり目の前に赤、黄、緑の光が浮かび上がりそれをキックで貫きながら怪人を蹴り飛ばした。

怪人「ぎゃあああ!!」

怪人は爆発した。

パッション「強い・・・」

サンシャイン「感心してる場合じゃないよ、早く戻らないと!!」

ディケイド「というわけだ、オーズも協力しろ。」

オーズ「良いよ。」

W「よし、行くぜ!!」

Wは鳥の形のエクストリームメモリをベルトにさしこんだ。

「エクストリーム!!」

ディケイドはケータッチを使った。

「ファイナル・カメンライド!! ディケイド!!」

Wはサイクロジョーカーエクストリームに  
ディケイドはコンプリートフォームに

なった。

オーズ「いくよ!!」

オーズはメダジャリバーのメダルをスキャンした。

「スキヤニング・チャージ!!」

その剣で空を斬った。

「サイクロン!!ルナ!!ヒート!!ジョーカー!!マキシマムド  
ライブ!!」

「ファイナル・アタックライド!!ディディディケイド!!」

W「ビッカーファイナリュージュン!!」

Wはビッカーファイナリュージュン  
ディケイドはディメンションシュート  
を空を斬った所に集中させ時空をこじ開けた。

アクア「これで戻るわ!!」

しかし突如上空から飛行怪獣軍団が現れた。

オーズ「うわっ!!」

バーニングルージュ「また敵!？」

ルミナス「大きいし多い!？」



ディケイド「骨が折れるな。」

その時突如8つの光が現れた。

W「何だ!？」

ホーピングドリーム「あつ、あれは!？」

その光は人の姿に変わった。

それは前回の戦いでプリキュアと共に戦ったウルトラ8兄弟だった。

ホーピングドリーム「ダイゴさん!！」

ティガ（ここは任せて!！）

ダイナ（行くぜえ!!

）

ガイア（よし!！）

ウルトラ兄弟はそれぞれの光線を放ち怪獣を一掃していく。

ムーンライト「彼らに任せて行きましょう。」

その時

ディケイド「ドリーム!！」

ホーピングドリーム「えっ!？」

ディケイド「お前なら・・・やれるさ。」

ホーピングドリーム「・・・うん!!」

そしてプリキュアは次元を超えていった。

・・・

アカレッド「ぐああああ!!」

ゴセイナイト「うあああ!!」

メガシルバー「どわあああ!!」

ガオシルバー「ぐああああ!!」

ボウケンシルバー「うあああ!!」

アカレッド達はモーフアの力に圧倒されていた。

モーフア「無駄だ、貴様らに勝ち目はない。」

しかし次元を超えてプリキュアが戻ってきた。

モーフア「何!？」

ホーピングドリーム「戻ってきたわよ!!」

ブライト「あなたを絶対倒す!!」

モーフア「何故だ、何故貴様らは力もないくせに立ち上がる！？1人では何も出来ない愚かな人間のクセに！！！」

モーフアはプリキュアに聞いた。だした。

クロウ「1人じゃ何も出来ないけど！！」

ブライト「私達は1人じゃない！！」

ホーピングドリーム「世界中の人達が応援してくれている！！」

ピーチ「だから私達は何度でも・・・何度でも何度でも！！」

ボンバー「立ち上がるんです！！」

プリキュア「あなたの思い通りには、させない！！」

アカレッド「その通りだ！！やあ！！」

アカレッドは剣を取り出し、空を斬り次元を開いた。

フェニックス「えっ！？アカレッド！？」

ウィンディ「どうしたの！？」

アカレッド「見るが良い！！人々に支えられ、命をかけて世界を救うために戦った・・・誇り高き勇者達を！！！！！！」

333

## 第54話 再会（後書き）

次回、ダイスオー状態！！

## 第55話 スーパー戦隊魂（前書き）

名乗り間違ってるかもしれないし

メンバー欠けてるかもしれないです。

追加メンバーが欠けてたら主役メンバーに混ざってるって事で

## 第55話 スーパー戦隊魂

アカレッド「見るが良い！人々に支えられ、命をかけて世界を救うために戦った・・・誇り高い勇者達を！！」

すると切り裂いた次元から100を超える勇者が現れた。

モーフア「馬鹿な！？」

クロウ「あれは・・・」

ピーチ「歴代の・・・スーパー戦隊・・・。」

「5人揃って、ゴレンジャー！！」

「我ら！！ジャッカー電撃隊！！」

「バトルフィーバー！！」

「見よ！！電子戦隊デンジマン！！」

「輝け！！太陽戦隊！！サンバルカン！！」

「戦え！！大！戦隊！！ゴーフファイブ！！」

「爆発！！科学戦隊！！ダイナマン！！」

「ワン！！ツー！！スリー！！フォー！！ファイブ！！超！電子！バイオマン！！」

「電撃戦隊！！チェンジマン！！」

「超新星！！フラッシュマン！！」

「光戦隊！！マスクマン！！」

「超獣戦隊！！ライブマン！！」

「高速戦隊！！ターボレンジャー！！」

「地球戦隊！！ファイブマン！！」

「鳥人戦隊！！ジェットマン！！」

「恐竜戦隊！！ジュウレンジャー！！」

「天に輝く5つ星！！五星戦隊！！ダイレンジャー！！」

「キバレンジャー！！吼新星！！コウ！！」

「人に隠れて悪を斬る！忍者戦隊！！カクレンジャー！！見参！！」

「超力戦隊！！オーレンジャー！！」

「キングレンジャー！！」

「戦う交通安全！！激走戦隊！！カーレンジャー！！」

「電磁戦隊！！メガレンジャー！！」

「銀河を貫く伝説の刃！！星獣戦隊！！ギ



ンガマン！！」

「人の命は地球の未来！！燃えるレスキュー魂！！救急戦隊！！ゴー！！ゴー！！ファイブ！！」

「タイムレンジャー！！」

「命ある所、正義の雄叫びあり！！百獣戦隊！！ガオレンジャー！！」

「忍風戦隊！！ハリケンジャー！！あつ、参上！！」

「闇に向かいて闇を斬り、光に向かいて光を斬る！！電光石火！ゴウライジャー！！見参！！」

「I am ニンジャ オブ ニンジャ！！天空忍者！！シュリケンジャー！！」

「荒ぶるダイノガッツ！！爆竜戦隊！！アバレンジャー！！」

「特捜戦隊！！デカレンジャー！！」

「溢れる勇気を魔法に変える！！魔法戦隊！！マジレンジャー！！」

「果てなき冒険魂！！轟轟戦隊！！ボウケンジャー！！」

「燃え立つ激は正義の証！！獣拳戦隊！！ゲキレンジャー！！」

「正義のロードを突き進む

！！炎神戦隊！！ゴー！！オンジャー！！」

「テイクオフ！！ゴーオンウィングス！！」

「天下御免の侍戦隊！！シンケンジャー！

！参る！！」

「地球を守るは天使の使命！！天装戦隊！！ゴセイジャー！！」

アカレッド「我ら！！」

「！！スーパー戦隊！！」

そこに100を超える歴代のスーパー戦隊が揃ったのだ。

ホーピングドリーム「あんなにたくさん・・・」

モーフア「馬鹿め！！」

モーフアは紫色の球体を出した。

ベリー「何あれ？」

ボンバー「何か入っています。」

ルミナス「！！！！、あれは！？」

モーフア「ルミナス！！貴様の恐怖が現実になったのだ！！」

球体からおぞましい姿の怪人が出てきた。

怪人「グルル・・・キシヤア！！」

しかしその怪人はプリキュア達を襲うどころかモーフアに食らいついた。

モーフア「ぎゃああ！！なっ、何をする！？」

怪人「腹減った。」

モーフア「ぎゃああああああ！！」

モーフアは怪人に食われてしまった。

クロウ「あつ、ありえない・・・何あれ！？」

ルミナス「おそらくメデムの最終兵器です！！」

それはルミナスがメデムの開かずの間で見つけた恐ろしい怪人だった。

怪人「モーフアの力で俺は最強の力を得た、死ね。」

片言だった怪人はモーフアを食らった事で完全に言葉を話し、おぞましい力でプリキュア達が見た事のある巨大な化け物になった。

ブライト「あれは、まさか！？」

バーニングルージュ「バイオル・サターン！？」

しかし

???「違うなあ、正式には私はバイオル・サターンのデータとモーフアのデータを融合させた究極の存在・・・ディオガ・サタルゴンだ！！」

確かにそれはバイオル・サターンよりはるかに強力な力に満ち溢れている化け物だった。

ディオガ「死ね!!」

ディオガ・サタルゴンは巨大な爪を振るい一同を襲う。

プリキュア「きゃああああ!!」

スーパー戦隊「うわああああ!!」

ディオガ「貴様らは私には勝てない!!」

ディオガ・サタルゴンはメテオビッパを強化したアルティメットビッパを呼び出した。

アクア「こんな時に!?!」

ムーンライト「このままではやられてしまっわ!!」

アカレッド「安心しろ!!」

アカレッドはプリキュア達に向かって叫んだ。

スピードエース「みんな!!プリキュアに魂を送るんだ!!」

レッドフラッシュ「言わなくてもそのつもりだ!!」

レッドファルコン「行くぞ!!!!」

アバレッド「待ってるよ!!」

ボウケンレッド「今を力を送る!!」

「スーパー戦隊魂!!プリキュアに力を!!」

スーパー戦隊から輝く力が放たれプリキュア達にそそがれる。

ピーチ「これがスーパー戦隊の力・・・」

サンシャイン「スーパー戦隊魂!!」

クロウ、フェニックス、ルミナスが天に力を捧ぐ、すると赤い鳥をモチーフにしたマシンが現れた。

クロウ、フェニックス&ルミナス「マックス・クロス・バード!!」

ブライトとウィンディが大地に力を捧ぐ、すると白虎をモチーフにしたマシンが現れた。

ブライト&ウィンディ「スプラッシュ・タイガー!!」

ホーピングドリーム、バーニングルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズは同じく大地に力を捧ぐ、すると黄色のライオンをモチーフにしたマシンが現れた。

「ローズ・ファイブ・ライオン!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションは海に力を捧ぐ、するとサメをモチーフにした青と紫のマシンが現れた。

「フレッシュ・シャークブルー&amp;バイオレット!!」

ボンバー、バースト、サンシャイン、ムーンライトは風に力を捧ぐ、すると黒いヒョウをモチーフにしたマシンが現れた。

「ハートキャッチ・パンサー!!」

それぞれ現れたマシンに乗り込む。

唯一2つマシンが出てきたフレッシュ組はシャークブルーにピーチ、パイン

シャークバイオレットにベリー、パッションが乗り込む。

クロウ「何これ!？」

ブライト「凄い・・・」

ホーピングドリーム「これなら奴と戦える!」

ピーチ「行こう!!」

ボンバー「世界を守るために!!」

それぞれディオガ・サタルゴンに立ち向かう。

ディオガ「貴様らに未来は無い!!」

マックス・クロス・バードはミサイルを浴びせる。

スプラッシュ・タイガーはその爪で切り裂き、

ローズ・ファイブ・ライオンと

ハートキャッチ・パンサーは両腕に噛みつく。

ディオガ「目障りな!!」

それぞれディオガの光線を受ける。

クロウ「きゃああ!!」

フェニックス「攻撃範囲が広すぎる!!」

ルミナス「やはり世界を飲み込むほど強くなっています!!」

ブライト「さっきの攻撃もあまり効いてないみたい。」

ウィンディ「何か他に方法があれば!!」

ボンバー「せめてあれと同じ大きさになれば!!」

バースト「無理言わないでよ!!きゃああ!!」

サンシャイン「くっ!!」

ムーンライト「マシンがもつのも時間の問題よ!!」

フレッシュ・シャークがディオガ・サタルゴンに体当たりをするが簡単にはじかれる。

ピーチ「きゃああー!!」

パイン「どうしよう!?!」

ベリー「くっ!このままじゃ負ける!!」

パッション「あきらめちゃダメよ!!」

そしてローズ・ファイブ・ライオンがディオガ・サタルゴンの頭に  
噛みつく。

バーニングルージュ「おらおらおら!!」

ホーピングドリーム「ルージュ・・・適当に動かしてる。」

ローズ「でもなかなか効いてるわ!!」

ディオガ「この屑があ!!」

ディオガはローズ・ファイブ・ライオンを引き剥がし地面に叩きつ  
けた。

アクア「きゃああー!!」

レモネード「どうすれば倒せるんでしょうか!?!」

ミント「このままでは!?!」

その頃スーパー戦隊はアルティメットビッパと戦っていた。  
さすがはスーパー戦隊、次々と倒していく。



すると

ハリケンレッド「大丈夫か!？」

ハリケンレッドは通信機能でマシンの中のプリキュアに話しかける。

ボンバー「全然大丈夫じゃないですう!!!」

パイン「どうすれば良いの!？」

すると

デカブレイク「だったら合体です!！」

ウィンディ「合体!？」

リュウレンジャー「元々それはスーパー戦隊とプリキュアの力が組み合わさってできた物だ!！」

チェンジドラゴン「きっと合体能力はあるはずだ!！」

・・・

クロウ「合体って言われても・・・どうやって?」

ピーチ「だあもお!!ヤケクソよ!!」

ブライト「ちょっとピーチ何する気!？」

ピーチはがむしゃらに叫び出した。

ピーチ「プリキュア・フォーメーション!!」

するとマシンに何かが起こった。

ホーピングドリーム「何々!？」

ミント「ドリームも何か叫んでみて!!」

レモネード「何か起こるかもしれません!!」

ホーピングドリーム「よっ・・・よし。」

ホーピングドリームは腕と人差し指を天に伸ばし叫んだ。

ホーピングドリーム「戦隊魂!! スタート・アアアアップ!!」

するとマシンが変形し始めた。

サンシャイン「なっ、何!？」

ブライト「うわああああ!？」

まずスプラッシュタイガーとハートキャッチパンサーが足のような形になり

次に空中浮遊しているフレッシュシャークブルー & バイオレットが口を開きそこから黒い手が出てくる

次にローズファイブライオンが変形しそれを胴体にするようにパーツが付き、

最後にマックスクロスバードが変形し顔が現れ合体した。

プリキュアはひとつの操縦室に集まった。

バースト「あっ！みんな！！」

アクア「これが合体！？」

ブライト「あれ？」

ルミナス「頭に名前が浮かんできます！！」

ピーチ「本当だ！！」

「奇跡の巨人・キュアジャイアント！！」

つづく

第55話 スーパー戦隊魂（後書き）

次回、ロボバトル!!

## 第56話 巨人对巨獣

「奇跡の巨人！！キュアジャイアント！！」

プリキュア達はスーパー戦隊魂を発揮しキュアジャイアントを誕生させた。

ディオガ「だから何だ！？大きさでは私の方が一回りも二回りも大きいぞ。」

ホーピングドリーム「言っただでしょ！！あなたの思い通りにはさせないって！！」

キュアジャイアントはプリキュアによって操縦され様々な力を発揮出来る。

ベリー&amp;パッション「奇跡の剣！！」

ピーチ&amp;パイン「バリアブルセイバー！！！！」

キュアジャイアントは聖剣・バリアブルセイバーを手に取りディオガ・サタルゴンに攻撃を仕掛ける。

ディオガ「そんなもの・・・ガハッ！？」

バリアブルセイバーによって斬られた箇所は多大な光が放たれる。

ピーチ「これが私達の力よ！！」

クロウ&amp;フエニックス&amp;ルミナス「出でよ！！光の弾丸！！ホーリーリボルバー！！」

キュアジャイアントは聖剣から巨大な拳銃に持ち替え、光の弾丸の連射した。

ディオガ・サタルゴンは暗黒のエネルギー弾を放つが全て打ち消され残った光の弾丸が頭を直撃した。

ディオガ「ギャア！！きつ、貴様らあああああ！！」

ディオガ・サタルゴンはキュアジャイアントを掴み握り潰そうとする。

ホーピングドリーム「なんかミシミシいつてるよぉー！！」

ブライト「輝け！！」

ウィンディ「羽ばたけ！！」

ブライト&amp;ウィンディ「神の翼！！セイントウィング！！」

するとキュアジャイアントから神々しい光が放たれると共に神々しい翼が生えていた。

その光にディオガ・サタルゴンは手をはなす。

ディオガ「なっ！？なんだこの光は！？」

バーニングルージュ「今度は私達の番ね！！」

アクア&amp;ローズ「一撃必殺！！」

ミント＆amp・レモネード「聖なる一撃!!」

ホーピングドリーム＆amp・バーニングルージュ「受けてみなさい!!」

ホーピングドリーム＆amp・バーニングルージュ＆amp・レモネード＆amp・ミント＆amp・アクア＆amp・ローズ「ナツクル・バニツシャー!!」

キュアジャイアントの拳に聖なる光が放たれるメリケンが付き、デイオガ・サタルゴンの懷を力の限り殴りつけた。

デイオガ「が・・・はっ!？」

ボンバー「次は私達の番です!!」

バースト「やるっしゅ!!」

サンシャイン＆amp・ムーンライト「太陽と月!!」

キュアジャイアントは両手を天に掲げると両手から太陽と月のようなエネルギー球が生み出された。

ボンバー＆amp・バースト「ツインスターダイナマイト!!」

キュアジャイアントは2つのエネルギー球をデイオガ・サタルゴンに投げつけ、エネルギー球は直撃すると同時に大爆発した。

デイオガ「ぎゃあああああ!!」

ディオガ・サタルゴンは動かなくなった。

パイン「倒した？」

しかしディオガ・サタルゴンは再び動きだした。

ディオガ「何故だ！！この私が人間に負けるなぞありえん！！うああああああ！！」

するとディオガ・サタルゴンは巨大な手でアルティメットビッパを何百、何千体と掴みなんと食らい始めたのだ。

ホーピングドリーム「なっ！？仲間を！？」

ディオガ「仲間などではない、こいつらは私の力だ！！」

するとディオガ・サタルゴンはおぞましい鎧をまとい、手が剣と化した。

ブライト「何なの！？」

ディオガ「くたばれえええええ！！」

ディオガは剣を振り下ろす、キュアジャイアントは間一髪かわし、地上にいたスーパージ戦隊もそれをかわしたが剣は地面に直撃し地面は真っ二つに割れた。

アカレッド「なんて威力だ！？」



アカレンジャー「今は彼女達に任せよう。」

キュアジャイアントはバリアブルセイバーを再び手に取り攻撃を仕掛ける。

パッション「これでどう!」

バリアブルセイバーでディオガ・サタルゴンを斬りつけるが

ディオガ「ぐおおああああ!」

ディオガ・サタルゴンはキュアジャイアントを押し返した。

ホーピングドリーム「きゃああ!」

ローズ「何なの!?!いきなり姿変えて様子まで変に!?!」

するとウィンディが

ウィンディ「もしかして・・・あの巨獣、自分を制御できないんじゃない?」

ピーチ「どういう事?」

ウィンディ「あれは元タルミナスが見たって言う怪人がモーフアを取り込んだった姿なんですよ?」

アクア「なるほど、モーフアを取り込んだうえアルティメットビッパを取り込んだ事で自我を保てなくなったのね?」

ウィンディ「おそらく。」

ディオガ・サタルゴンは剣をがむしゃらに振り回している。

バーニングルージュ「もしかして今なら隙が見つかるんじゃない！？」

レモネード「探してみましよう！！」

キュアジャイアントはディオガ・サタルゴンの様子をうかがう。  
がむしゃらに振り回す剣は森を切り払い、大地をかち割るとんでもなく強力な威力だった。

ミント「なかなか隙が見つからないわ。」

その時アカレッドが通信機能を使いプリキュアに話しかけた。

アカレッド「プリキュア！！」

ベリー「アカレッド！！大丈夫なの！？」

アカレッド「ああ、今スーパー戦隊はメガレンジャーの宇宙船・メガシップに乗って待機してる、それより奴はプリキュアとスーパー戦隊の両方の力を持った君達にしか倒せない！！」

サンシャイン「なかなか攻撃の隙が見つからないの！！」

アカレッド「なら良い作戦がある、足にありったけの攻撃を当てるんだ！！」

パイン「足に？」

アカレッド「そうだ、それが奴に隙を作らせる唯一の手だ、健闘を祈る。」

アカレッドは通信を断った。

ムーンライト「何故足に？」

バースト「考えてる時間はないよ！！」

キュアジャイアントはホーリーリボルバーに持ち替え、足を集中的に打ち抜く。

するとディオガ・サタルゴンはバランスを崩し倒れ込んだ。

ホーピングドリーム「たっ、倒れたー！！」

アクア「そうか、がむしゃらに剣を振り回している奴は重心がうまくなくてなかったんだわ！！」

ボンバー「なるほど、だから足を外してバランスを崩したんですね！？」

その間にディオガ・サタルゴンは口から闇の光線を放ち、キュアジャイアントを吹き飛ばす。

プリキュア「きゃああああ！！」

ディオガ「消す消す消す！！」

バーニングルージュ「完全に狂ってるわ!!」

ルミナス「もうやるしかありません!!」

ピーチ「よし、みんないこう!!」

キュアジャイアントは翼を広げ空高く飛び上がった。

ディオガ・サタルゴンはエネルギー弾を連射してきたがナックルバニッシャーで全て叩き落とす。

プリキュア「はああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

キュアジャイアントはホーリーリボルバーを打ち込んだが弾丸は空中停止し、その弾丸はある魔法陣に変わった、そうスーパー戦隊魂のマークだった。

キュアジャイアントはマークをバリアブルセイバーにまわらせてディオガ・サタルゴンに突っ込む。

プリキュア「プリキュア・スーパーソウル・スラッシュ!!」

バリアブルセイバーはディオガ・サタルゴンを真つ二つに切り裂いた。

ディオガ・サタルゴンは激しい光と共に消滅した。

ۛۛۛۛ

## 第56話 巨人对巨獣（後書き）

次回、緊急アンケート!!

皆さんの好きな戦隊のメンバーを5人教えてください!!

注意

・メンバーは各戦隊から1人ずつ

・なるべく色はかぶらない

・必ず女を1人か2人

お願いします!!

第57話 大脱出！！（前書き）

ちよつとあいづら思いましたから

## 第57話 大脱出！！

ディオガ・サタルゴン「ぐあああああああああああああ  
あ……」

プリキュアはキュアジャイアントから降りた。  
メガシップが着陸しスーパージンが降りてくる。

ホーピングドリーム「終わったんだね……」

クロウ「うん、全部……」

しかし

レッドファルコン「……可笑的」

フェニックス「どうしたの？」

レモネード「何が可笑的ですか？」

レッドファルコン「突然とはいえあのモーフアだぞ？怪人があんな  
る事ぐらい考えてるはずだ。」

レッドレーサー「確かにあんなあっさり……」

アクア「まさかディオガ・サタルゴンを生み出すためにわざと？」

その時、声が響いた……モーフアだった。



モーフア「はっはっはっ。」

チェンジドラゴン「モーフアか!？」

バーニングルージュ「本当に生きてたの!？」

モーフア「おのれ、このまま自分達の世界帰れば良かったものを・  
」

ホーピングドリーム「どこ!?!どこにいるの!?!」

すると闇の雲のような物が現れた。

アクア「何!?!」

パイン「きゃあ!?!」

ウィンディ「何なの!?!」

暗雲はアクア、パイン、ウィンディ、クロウ、サンシャインを包みだした。

レッドファルコン「危ない!?!」

シュリケンジャー「助け出さずせ!?!」

ニンジャブラック「おりゃあ!?!」

ガオイエロー「って何だこの黒いの!?!」

デカスワン「ああ!!」

スーパー戦隊のレッドファルコン、ニンジャブラック、ガオイエロ  
ー、シュリケンジャー、デカスワンはプリキュアを助けようと暗雲  
に飛び込み暗雲ごと消えてしまった。

.....

パイン「あれ?ここどこ?」

シュリケンジャー「OH、なんだかmysteryな所にとばさ  
れたな。」

そこは何やら宮殿のような場所になっていた、そしてモーファの声  
が響いた。

モーファ「ははは、どうだ居心地は?」

ウィンディ「モーファ!?!どこにいるの!?!」

モーファ「言ったところでどうする?まあ、教えてやろう・・・今  
お前達の仲間を痛めつけているところだ。」

ホーピングドリーム「きゃあああああ!!」

アカレッド「うわああああああ!!」

モーファ「ははははははっ!!」

暗雲にとばされた一同はモーファの作り出した世界にとばされてい

た。

アクア「何！？このみんなの声は！？」

ガオイエロー「本当に別世界にとばされていたなんて・・・」

デカスワン「みんなが苦しめられてるわ！！」

モーファ「その世界から出たいか？無駄だ、あと10分ほどでその世界は消滅する・・・もちろんお前達もだ、はははっ。」

プリキュア「きゃあああああああ！！」

スーパー戦隊「うわあああああああ！！」

レッドファルコン「まずい！！早く脱出しよう。」

一同はとりあえず通路を見つけ脱出を試みる。

クロウ「扉！！って開かない！？ありえない！！」

サンシャイン「でも何か仕掛けがあるはずよ！！」

扉にはかたく閉ざされており、何か仕掛けがあるとサンシャインは思いその予想は的中、扉にはとても小さな文字が書いてあった。

（オモイヒトツ）

アクア「オモイ・・・ヒトツ？」

ニンジャブラック「何でモーフアの世界にこんな言葉が？」

パイン「力を感じる、この力・・・タルトちゃん達ね!？」

クロウ「メップル達が!？」

・・・・・・

プリキュアの妖精達は元の世界の安全な場所でプリキュアとスーパー戦隊を応援していた。

メップル「頑張るメポ!!」

ミップル「プリキュアもスーパー戦隊も必ず勝つミポ!!」

ポルン「別世界にとばされたみんなを助けるポポ!!」

ルルン「ルルン達の力をモーフアの世界に送るルル!!!!」

フラッピ「負けちゃダメラピ!!」

チョッピ「まだ応援が足りないチョピ!!」

ブライト「きゃああああ!!」

レモネード「ああああああ!!」

ムーブ「ああ!!みんながムプ!!!!」

フープ「弱音をはいちゃダメプ!!」

ピーチ「絶対・・・負けない!!」

デカレッド「くじけ・・・るもんか!!」

ココ「プリキュアとスーパー戦隊はどんな状況でも諦めないココ!!」

ナッツ「そうナツ!!もつと力を送るナツ!!」

シロップ「シロップも限界まで粘るロプ!!」

タルト「はよ戻って来るんや!!」

シフォン「キュアキュア〜プリプ〜!!」

ブルーレーサー「僕達はこれ以上の苦しみを味わってきていますで  
ございます!!」

ムーンライト「私達は絶対に諦めない!!」

シフレ「頑張るですう!!」

コフレ「負けちゃダメですう!!」

ポプリ「ポプリ達の力、受け取るでしゅう!!」

・・・

サンシャイン「妖精達だけじゃない、プリキュアやスーパー戦隊達

の勇気まで伝わってくる!!」

レッドファルコン「力が・・・溢れる!!」

そして別世界消滅まで5分をきった。

デカスワン「このみんなの力を扉に送りましょう!!」

一同は手をかざし扉に力を送る、扉がゆっくりと開いてくるがビッパ―が襲ってきた。

ニンジャブラック「この!!早く開け!!」

アクア「こんな狭い通路に大勢で来ないでよ!!」

一同はビッパ―を一掃していく、消滅まで3分をきった。

レッドファルコン「ふっ!はっ!!扉はまだ!!」

クロウ「やあ!!はあ!!」

ガオイエロー「もう少しだ!!」

デカスワン「大勢で来て一緒に消滅するつもりね!？」

サンシャイン「そうはさせない!!」

ウィンディ「私達は!!」

パイン「みんなの所に!!」



第57話 大脱出！！（後書き）

次回、決着



最終話 未来を繋げ！…さよならは言わない！…（前書き）

ついに最終回

## 最終話 未来を繋げ！！さよならは言わない！！

プリキュアとスーパー戦隊はモーフアの圧倒的な力と死闘を繰り広げていた。

アカレンジャー「くっ……」

ミント「はあはあ……」

モーフア「諦めないとは強情な奴らだ……何故そんなに必死なんだ？私は世界は新しく立派に作り変えようとしているだけなのに。」

バトルジャパン「何が立派な世界だ。」

ルミナス「そんな強制された世界……嫌です！！」

モーフア「嫌？人々の正義と悪が入り混じった世界など無用だろ・

・私は全て正義の世界に変えようとしているだけだ。」

ガオレッド「ふざけるな！！」

ホーピングドリーム「確かにこの世界は正義と悪が入り混じってる・

・でも、それが世界なの！！」

ブルーターボ「お前はただ、優しさしかない世界にしようとしている。」

メガピンク「そんなの立派でも何でもない！！」

ピーチ「優しさだけじゃなく、たまにはみんなと喧嘩して・・・泣いて・・・そして仲直りできるのが幸せなの!!」

ボンバー「優しさしかないなんてそんな本当の幸せがない世界には絶対にさせません!!」

モーフア「愚かな!!」

モーフアが攻撃しようとしたその時

「ファルコンセイバー!!!」

モーフア「がはっ!？」

アカレッド「帰ってきたか!!」

別世界にとばされた一同が元の世界に戻ってきたのだ。

モーフア「なっ、何故だ!？何故戻って来れた!？」

アクア「みんなが私達に力を与えてくれたのよ!!」

ニンジャブラック「お前にはいない仲間って奴らからな!!」

モーフア「おのれ・・・おのれえええ!!」

プリキュア「もう逃がさない!!」

するとプリキュアとスーパー戦隊の体が神々しく虹色に輝いた。

バーニングルージュ「こつ、これは!？」

ゴセイブルー「すごい力だ、希望に満ち溢れている!！」

アカレッド「今なら!！」

ホーピングドリーム「奴を倒せる!！」

モーフア「消え去れえええええええ!!!!!!!!!!!!!!!」

モーフアは暗黒の光線を放った。

プリキュア「輝け!!!伝説の力!!!!」

スーパー戦隊「燃えろ!!!スーパー戦隊魂!！」

プリキュア「プリキュア!！」

スーパー戦隊「マキシマムソウル!！」

プリキュア&amp;スーパー戦隊「ファイナリティイイイイイイイ  
イイイイイイ!!!!!!!!!!!!!!!」

スーパー戦隊の印がプリキュアの力と共に虹色の炎を出しながら暗黒の光線と追突する。

プリキュア「はああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

スーパー戦隊「うおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

そしてついに暗黒の光線は消滅しプリキュアとスーパー戦隊の力が  
モーファに直撃する。

モーファ「くっ！愚か者めが・・・また怨念を放てば・・・何！？」

モーファは怨念を放ち再び復活しようとしたが

アカレンジャー「無駄だ！！」

レッドワン「俺達の力はお前の力を封じる！！」

ホーピングドリーム「あんたはこれで最後よ！！」

モーファ「馬鹿な！？・・・私は消えんぞ！！消えるわけがああ  
ああああ・・・」

そしてついにモーファは膨大な光と共に消滅した。

・・・

のぞみ「モーファを倒したから・・・もうお別れだね。」

アカレンジャー「そうなってしまうな。」

なぎさ「なんか変な気分だなあ。」

ほのか「何が？」

レッドファルコン「聞いたよ、前回の戦いの仲間が助けてくれたん

だつて？」

咲「うん！！凄い嬉しかった。」

舞「だったらまた私達も会えるわね。」

ひかり「そうですね。」

レッドレーサー「でも何か寂しいなあ。」

りん「へえ、レッドレーサーがそんな事言うなんてねえ。」

かれん「それにしても本当にお世話になってしまったわね。」

レッドターボ「全然、また来てよ。」

うらら「わかりました。」

こまち「その時は豆大福を持って行くわね。」

シンケンレッド「楽しみだな。」

くるみ「まあ行き方がわかればね。」

ラブ「大丈夫！！みんなで幸せゲットできたからね！！」

美希「そうね、完璧な私がいればそんな方法簡単に見つかるけどね。」

ゴーオンレッド「楽しみだぜ！！」

祈里「うふふ、また会えるって私信じてる!!」

せつな「私も方法を見つけるために頑張るわ。」

レッドマスク「俺達も探すよ、また会うためにね。」

つぼみ「えりか、寂しいですう。」

えりか「よしよし元気出しな。」

いつき「つぼみは大げさだなあ。」

ゆり「本当ね。」

・  
・  
・  
・  
・  
・

アカレッド「よし、準備はできたな・・・また会おう!!」

アカレッドは次元を切り開きプリキュア、スーパー戦隊はそれぞれの世界に戻って行った。

・  
・  
・  
・  
・  
・

のぞみ「さてさて今日はどうしようかなあ?」

なぎさ「みんなで遊ぼうよ!!」

咲「それ賛成!!」

ラブ「よし！！みんなで幸せ！！」

つぼみ「ゲット・・・！！」

ほのか「何言ってるの！！」

舞「宿題！！まだ終わってないでしょ！！」

りん「のぞみ！！宿題今日中に終わらせなかったらプリキュアクビだよ！！」

祈里「みんなでやればすぐだよ。」

えりか「つぼみ！！やるわよ！！」

なぎさ、咲、のぞみ、ラブ、つぼみ「はい・・・とほほ。」

完



**最終話 未来を繋げ！～さよならは言わない！！（後書き）**

ターザン「みなさん応援ありがとうございます・・・ちょっと何ですかのぞみさん。」

のぞみ「次はどんな小説を書くの？」

ターザン「え」とですね、今作と前作をクロスオーバーさせるつもりですよ。」

士「また面倒な・・・」

のぞみ「あつ、士先生。」

ターザン「それだけではないですよ、毎回アンケートを実施して色んな物ともクロスオーバーさせるつもりです。」

のぞみ「どういう事？」

ターザン「例えば、プリキュア版ギャグマンガ とかプリキュア版仮面ライダーとかとか」

士「最初はわかるが次のは想像すらしたくないな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7857m/>

---

プリキュアオールスターズ×スーパー戦隊!!

2010年11月10日21時42分発行